
ジプシーダンス

国沢裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジブシーダンス

【Nコード】

N2035D

【作者名】

国沢裕

【あらすじ】

ある日、絡まれている女の子を通りすがりに助けた俺だが、その頃から突然、正体不明の視線に付きまとわれた。一目惚れでもした恋する女の子の視線だなんて、能天気な友人は言うが、表と裏、両方の世界を生きる俺には死活問題。SF小説シリーズ3作目となる「サイキックバトル編」。

チャプター・1 ジプシー（前書き）

この小説では、基本的にチャプター後に書かれている人物による、一人称交代方式をとっています。

チャプター・1 ジブシー

繁華街の小さな書店を出た時、俺は、かすかな叫び声を聞いた気がした。

立ち止まって辺りを見回す。夕方の、学生と会社員と買い物客が溢れた街。確かに聞こえたような気がするが、耳に届いていないのか、街行く人々は誰も気にする様子もない。

ふと、書店の横の細い路地が眼に入った。近くへ歩いて行き、路地の先を覗く。

一瞬だが路地の向こう側で、一人の女の子と、彼女を取り囲む男達数人の姿が見えて消えた。

あれか。

俺はどうしようか迷った。ひどい話だが、今は学校帰りだ。普段の俺は、制服を着たままで厄介事に首を突っ込む事をしない。

しかし、今日は何故か気が向いた。

路地の中を通り、男達の方へと歩いて行く。

そう言えど、制服の襟の校章が気になったが、まあいいかと考える。そこまで連中は見ないだろう。

メインロードから一本隣の道は店が並んでいない為か、普段から人通りがない。

路地から顔を出して覗いてみると、一人の女の子が見えた。あれは……近くの県立高校の制服だ。まあ、ちょっとばかり可愛い感じだが、ごくごく普通の平凡そうな女の子だ。

取り囲んでいる男達は、四人。全員が思い思いに髪を染めて、ピアスや指輪などの装飾品をいくつかしている。全体に着崩した感じの雰囲気があるが、一人だけが付けている校章にも、連中が一応お

そろいで着ている制服にも見覚えがない。この辺りは土地柄、時々修学旅行生がはぐれて散策する事がある。その類か。

女の子の方はもちろんだが、男達の方も、少々の事では後腐れはないだろう。

俺は、眼鏡を外しながら近づいて行つた。

「何だあ？ 何みてんだよ！」

一人が俺に気が付いて、威嚇してきた。

俺はすばやく女の子と男達の間を割り込ませて、彼女を背に庇つた。

「やめろ。嫌がつているだろう？」

俺の、一見真面目そうな雰囲気と小柄な体軀を見て取つた一人が、いきなり顔を狙つて拳で殴ってきた。

俺は左に身体をずらすだけで受け流し、勢いづいたその男の右膝の裏を右足刀で蹴り刈つた。アスファルトに右膝を強打し悶絶する男。……ああ、失敗したな。この連中は自分達の足で逃げてもらわなければいけない。普段の俺は、足止め系の攻撃をする事が多い為にうっかりした。今回は下段への攻撃は控えないと駄目だ。

俺の動きを見て、他の三人が殺気だった。だが、その中の一人は、おつ、と言う表情にもなる。少しの動きで相手の力量が推し量れない奴はたいした奴じゃない。俺は表情の動いた、両耳に合計六個のピアスをしたそいつが、この四人組のリーダーだと確信した。

なら、他の奴らは軽いいなし、このリーダーを叩きのめす事にする。力が上の人間がやられれば下は逃げるだろう。後で連中の上下関係がどうなるうとも、それは俺には関係のない事だ。

俺はピアスをしたそいつへ、殺気を込めて視線を固定した。奴の目の中に、恐怖の色が浮かぶ。結構。場数の違いを認識している表情だ。だが他の連中の手前か、ファイティングポーズをとる。これ

は、ボクシングの構えだ。

それを見た残りの二人が、道路に転がって呻いている仲間をまたいで、殴りかかってきた。

大振りな動作なので、この二人の攻撃は難なくよける。よけながら俺は、啞然と見ていた女の子の肩を押して脇へのけつつ、有無を言わず俺の鞆を押し付けた。

そして、ピアスの男へ一気に間合いを詰めて、顎に右ストレートを叩き込む。だが、巧みなフットワークで男は避けた。他の二人より隙が少なく動きもいい。

最初の一撃は予想通りにかわされたので、反撃が来る前に、今度は手加減なく男の脇腹に右の廻蹴、鳩尾に右足刀蹴を二段で蹴り込む。

ピアスの男は、意外にあっさりと吹っ飛んで仰向けに倒れた。対蹴技には慣れていなかったのか、初めから俺に勝つ気力がなかったか。どちらにしろ、倒せれば俺には問題ない。

その様子を見ていた二人があとずさる。

「仲間を連れて、さっさと失せろ」

さすがに力量の差がわかったのだろう。

二人は、それぞれ倒れている仲間の腕をとって引きずり立たせ、俺の方を伺いながら逃げ出した。

連中が見えなくなったのを確認して、呆然と見ていた女の子の手から鞆を取る。慌てて彼女は何か言おうとしたようにも見えたが、その前に俺は言った。

「気をつけて帰りなよ」

彼女にそう言った瞬間、俺は背に、殺気とも取れるような鋭い、今まで感じたことのないような絡みつく視線を感じた。

チャプター・2 ジプシー

振り返らなくても、背に痛いほど感じる、まとわりつくような鋭い視線。

先程追っ払った連中でも、当然目の前にいる彼女のものでもない。俺の緊張する気配が表情から伝わったのか、不安そうな眼で見返す彼女は、さらに俺へ声をかけるタイミングを掴めなかったらしい。「それじゃあ」

そう言いながら俺は片手をあげて、彼女からさっさと離れた。最初に通ってきた路地を、逆方向へ足早に歩く。

新たに現れたこの視線の相手の狙いは、間違いなく俺だ。だから通りすがりの無関係な彼女を巻き込む訳には行かない。俺は後ろを振り返らず、その場から離れる。

問題は、このまま人ごみに紛れるか、人気のない場所に向かうべきか……。

だが、しばらくすると、あれほど感じた視線が消えた。

俺は路地を出た所で立ち止まる。

おかしい。

今の感覚、俺の気のせいだったのだろうか。

あるいは狙いが俺ではなかったのだろうか。

それとも、今は仕掛けてくる気がなかっただけなのか。

いずれにしても、まく方向で少々遠回りをして、帰路についた方が良さそう。

俺は、薄暗くなってきた街の人ごみの中へ、ゆっくりと入って行った。

すっかり日が落ちた頃、俺は家に着いた。

静かな住宅街の一角に立つ、明かりの灯った二階建ての家。手入れされた季節の花の植木鉢やプランターが置いてある、ちょっとした庭もある。俺は門を開けて、鍵のかかっていない玄関のドアを開けた。

「ただいま」

そう言っただけで靴を脱ぐと、俺は真っ直ぐキッチンに向かう。

そこでは、この時間帯ならばいつも、夢乃の母親が夕食の用意をしている。

「お母さん、ただいま帰りました」

俺がそう言っていると、夢乃の母親は必ず顔を上げ、俺の目を見て「お帰り」と言う。

「夕食、もうちょっとで用意出来るから、着替えて来てね。夢乃と一緒に降りてきて頂戴」

続けてそう言っていると、夢乃の母親は夕食の仕度に戻った。

俺は廊下へ出て、二階へ続く階段を上がる。

夢乃の両親は、家族を亡くした俺を中学の時から預かってくれている。実際、養子縁組の話も最初に出たが、俺が断った。それでも夢乃の母親は俺を実の子供のように接してくれる。だから俺も彼女を母親と思ってそう呼んでいる。ただ、法律上だけの親子関係は俺には必要がないし、何か起こった時に、夢乃の家族に迷惑をかける訳には行かない。

俺の実父は陰陽師の家系ではあるが、もともと家業を継いではないので特に問題はない。実際問題は母方の家系なのだが、この話は夢乃の両親には言った事はないし、実は父方の従兄弟の勝虎や伯父貴にも、俺の知っている事を話した事は一度もない。

……話さなくて良い事なら、一生言う必要がない事もある。ただ一人、母の血を引いている俺個人の問題というだけだ。

二階へ上がり、夢乃の部屋の前を通り過ぎた。そして自分の部屋

のドアを開けて、壁際の電気のスイッチを入れる。少々殺風景な部屋が明るくなった。

中学に入る頃にここへ来てから、特に勉強に関するもの以外に、物が増えていない。目に付くものは勉強机や本棚、機械類としてパソコンやCDプレーヤー位か。時々京一郎が雑誌やらCDやら趣味の物を持ち込んで来るが、そんなに沢山の量じゃない。

俺は部屋の真ん中へ進みながらベッドの上に鞆を放り、右手につけた腕時計を外しかけた。小学生の頃に初めて腕時計を付けた時、何も考えずに最初に右手にした為、腕時計だけは何故かクセがついて左手に変えられない。まあ、些細な事で誰も気にも留めないだろうが。

ノックの音が小さく響き、ドアを開けた夢乃が顔をのぞかせた。

「遅かったわね。本屋さんで、何か面白い本でも見つかった？」

そう言つて微笑んだ。

「いや。……そういう訳じゃない」

俺は、外した腕時計を手にしたまま、今日の事を話すかどうか迷う。心配性な夢乃に、実害のなかった視線や気配だけの話をするべきかどうか。

その瞬間、窓の外から感じた。殺気と見紛うような鋭い、先程と同じ視線を。

「伏せる！」

階下には聞こえないように、俺は夢乃に小さく叫んで、左手に持っていた腕時計を部屋の電気のスイッチへ叩き投げた。夢乃が床に伏せるのと同時に部屋の明かりが消える。俺は目の慣れていない暗闇の中で、定位置に隠し置いていたリボルバーをホルスターからすばやく抜き、銃口を下に向けたまま窓際へ走り寄った。

しばらく外の気配を窺う。

気配が消えた。窓越しの街には、いつもと変わらぬ静寂が訪れている。

今まで俺は、どんな相手にも家まで後をつけられた事はなかった。俺がここに来てから、最も気をつけている事だ。思わず舌打ちする。

「……夢乃、五分程で戻る。説明は後で」

俺個人だけではなく、この家まで何らかのターゲットになるのなら、夢乃に黙っている訳にはいかないだろう。

俺はそう言って夢乃を残したまま、足音なく階段を駆け下りた。

チャプター・3 ほーりゅう

木曜日の今日、四時間目の授業は体育。一番お腹が空く時間なんだよね。その上に、体育館でバスケットボールだなんてさ。

私達女子は数人の班に分かれて、ボールをくるくる投げあう練習をする。あんまり私は球技が得意じゃないけれど、体育の女の先生は厳しくないから、和気あいあいとしていて結構楽しい。ちょっと位雑談が入っても、手が止まっていなければお咎めも特になく大丈夫だし。

逆に、体育館の半分を使っただけのようにバスケットをしている男子側は、結構厳しい男の体育の先生が指導している。……授業の進むスピード感が違うし、男子は皆黙々と言われたメニューをこなしていく。その中で身体を動かす事がいかにも好きそうな京一郎が、一番楽しそうに練習している。

明子ちゃんが、私の方に近寄って来て小声で言った。

「やっぱり城之内って、運動神経いいよねえ。見た目も悪くないから、あれで暴走族に入っていなきゃ、クラスの女子にモテるだろうにねえ」

「でもさ、話をすると、そんなに不良って感じしないけど？」

「いやいや、充分怖いって。……ほーりゅう、あなたの感覚違うんだよ」

そうかな？ 皆は初めから怖がって、まともに京一郎と話をした事がないだけだと思うんだけどなあ。

……そう言えば、ウチのクラスにはもう一人、京一郎以上にスバ抜けた運動神経の持ち主がいるじゃないかと思い、ジプシーの姿を探してみる。

……ジプシーがいた。いたけれど、何かいつもと今日の雰囲気

違う。どこか違和感があるように見える。

シュートの練習をしているのだろうか。ゴールに向かってボールを投げる。低めだったせいかりングに当たり、はじかれて転がったボールを拾いに行く。また右手で持って左手は直角に支え、基本通りの投げ方でゴールを狙っては再び入らず、またボールを拾いに行く、の繰り返しをしていた。

「……ジプシーって、いつもあんな感じだったけ？」

思わず、明子ちゃんに聞いてみる。明子ちゃんの目が、きよろきよろつとジプシーを探す。

「委員長？ あんな感じって？ そう言えば今日は珍しく授業に出ているねえ。身体が弱いから体育は見学が多いのに」

……そうか。いつも学校内ではジプシー、目立ちたくないから身体が弱いフリをしているって前に言っていたな。男子との体育は普段は別の場所だから、あんまり見た事がないせいで忘れていた。

「出られる種目には出ないと、単位が取れないからでしょ。でもまあ、結構離れた距離から投げている割には、リングに当たってたんだから、そんなにひどくはないんじゃない？ 試合になったら、すぐ息が上がりそうだけれどねえ」

私をもっとすごい技を期待してジプシーを眺めていたから、拍子抜けなのか。普通はあんなものなんだ。

何となく眺めていると……そう言えばジプシーが、今日は朝からいつもとイメージが違うと思う理由、もう一つ思い当たった。

なんて言うんだろう……俺に近寄るなオーラ？ っていうのが今日は、いつもよりも増して出ている感じがする。

何かあったのかな？

男子側の練習終了の笛が鳴り、分かれての試合が始まった。

ジプシーは京一郎と同じチームになる。京一郎は正真正銘ポイントゲッターだけれど、自らコート中を走り回ってボールを集めて、

どんどん入れる。まさしく水を得た魚状態だな。

対するジプシーは、殆どコートの中辺りで動かない。でも、京一郎がゴールを入れる度に相手側から投げ返されるボールを、こことく取って京一郎に回している。……あれって？

「インターセプトって言うのよ」

私のそばで見ていた夢乃が言った。

「疲れないように走り回らずチームに貢献、いかにも校内でのジプシーらしいやり方よね」

……なるほど！ それって疲れなくて上手いやり方じゃないの。

ちょうど、女子の方でも笛がなって集合がかかり、早速、私は試合に出ることになる。

同じチームになった、バスケも上手な夢乃が綺麗にゴールを決める。その後に飛んで返ってくるボールを、私はジプシーの真似をして狙ってみる。

……取れない。

何度かチャレンジする機会があったのに、遅いのかボールに届かなかったり、取れそうでも先に受け止められたり。私の狙った反対側をボールが通ったり。

「……ほーりゆう、あなた、インターセプトを狙っているでしょう？」

見かねた夢乃が寄ってきた。

「インターセプトって、勘やボールの読みや、それに伴う運動神経などが必要な、結構高度な技だと思うわよ。ジプシーだから目立たなく簡単そうにやってのけるけれども」

……なんだ、だめじゃん！

仕方がない。私は普通に、地道に走り回ってやれって事かあ。

チャプター・4 ほーりゅう

その自習室となつてゐる教室は、この高校の生徒棟四階の、端から二番目にある。

四階の一番端は、階段を挟んで音楽室。音楽室の下の子三階は美術室。

その教室が、普通の教室として使えない理由は明白だつた。

黒板も机も椅子も全て揃つてゐるのに、その教室の真ん中に、四角い二抱え程のある大きなコンクリート柱が一本、立つてゐる為である。

建てられた当時は意味もあつたのだらうが、今では教師も、もちろん生徒も柱の理由がわからず、だがどうしようもないので、そのまま自習室という形で放置されてゐる。

名前の通り、自習をする為の生徒が時々訪れるが、大半は、友人や彼氏・彼女との待ち合わせ、昼寝場所に利用される事が多い。

その利用目的の一つ、昼休みにここで、お弁当を広げるグループもいる。

「これから屋上でお弁当を食べるにしちゃあ、寒い季節に入るもんね。雨の日に限らず、しばらくは毎日ここでお昼を食べる事になりそうだね」

私はそう言いながら、勢いよくドアを横滑りに開けた。

「ほーりゅう、もうちよつと静かに開けるよ」

「あら、ごめんあそばせ、京一郎」

私は口先だけでそう言いながら、さつさと教室に入つて行く。きよきよと周りを見回し、入り口から柱の陰になり見えなくなる位置を確認して、手招きをした。

「ここ、こつちこつち」

そう言いながら、私がお弁当を広げる為に机を寄せ始めると、すぐに京一郎が寄って来て机を運んでくれた。こういう腰の軽い所が、京一郎の良い所だよなあ。

そう思いながらジプシーを見ると、何か考え事をしているようにあらぬ方向へ目が行っていた。やっぱり、いつも以上にとっつきにくい雰囲気。だけど。

「何があつたのよ。ジプシーはいつも変だけれど、今日は特に変!」
思わず言つた私に、ジプシーは視線を移した。

「……ああ。お前に言われるようじゃあ、よほど今日の俺は変なんだな」

何だ? それ。

怪訝な顔をした私に、ジプシーは言つた。

「とりあえず、食べながら話をする。お前は話が終わるまで食事、待てないだろう?」

……うん。待てない。

お弁当を食べながら、ジプシーの、昨日あつた出来事を聞いた。何となく女の子を助けた話。その後に感じた殺気と見紛うばかりの絡みつくような視線。家に帰ってから、途中で途切れたはずなのに再び感じた同じ視線。その後、実害もなく消えてしまった気配。結局、相手を特定できず取り逃がしてしまったらしい。

私は、ジプシーの話を一通り聞いた後、思わず言つた。

「それってさあ、前にあつた文化祭のせいじゃないの?」

ジプシーが、何の事だという感じで私を見る。なので、続けて言つた。

「ほら、文化祭の劇で舞台に出たから、ジプシーの人氣が出ちゃつたでしょ。ラブレターもあの後沢山もらつたし。……その後の京一郎の暴言で、全く誰もジプシーに近づかなくなっちゃったけれどさ」
「暴言とは失敬な。あの言葉は、ちゃんと計算した上で計算通りの

皆の反応だ」

京一郎はそう言い返してきたが、一応、私の言いたい事がわかったらしい。

「……なるほどね。殺気と見紛うばかりの視線。考え方を変えたら、一途で熱烈な好意の視線だって、ほーりゅうは言いたい訳だ」

「そう！　だって私が殺したい位に思っている相手の家がわかったら、多分その場で手榴弾……は持っていないか。ビール瓶にガソリンと布突っ込んで火をつけて投げ込んでる」

「確かに、俺ならジプシーの留守を狙ってプラスチック爆弾を仕掛けて、帰って来た途端に遠隔操作でスイッチを入れるかもなあ」

「……ちよつと、二人で私の家を爆破しないでくれる？　こういう時のあなた達って、何で気が合うのかしら」

不機嫌そうな顔をして、夢乃が言う。

京一郎は、そんな夢乃へ笑顔を返してから続けた。

「でもよ、今の話、一理あると思うぜ。後をつけられてもいねえのに家まで気配が来たって事はだ、例えお前を途中で見失っても、家を知っていたからついてくる事が出来たって訳だろ。それなら、お前の素性を知らない命のやりとりをしている裏の連中じゃなくて、普段顔を合わしたり家の住所を知っている、学校などの一般交友関係者の方が確率が高い」

腕組をして目を瞑り、京一郎の話を黙って聞いていたジプシーは、ゆつくり言った。

「……なんか、俺には、そう簡単に納得できない」

「でも、どちらにしろ相手が見えないと、お前も動きようがねえだろ？　ほーりゅうの話はあながち間違っていないって。お前、午前中みたいにそんなに気を張りつめていたら持たねえし。今の所、実害が出てねえんだろ？　逆にもっと誰かが仕掛けてくるまで、ゆつたり構えているよ」

まだ割り切れないという表情だったが、それでも京一郎の話を聞き終わったジプシーは、諸手を挙げて言った。

「わかった、気にしない。手遅れにならなкやいいが、今はこちらから動けないって事は確かだし、仕方がないな」

そう言つて立ち上がる。

「そろそろ行く。五時間目に使うプリントを職員室へ取りに來いて、先生に言われていた」

ジプシーは、取り付く島もなく一人でさつさと自習室を出て行つた。……それでもジプシー、やっぱりまだ、いつも以上に、俺に近づくなオーラが出ているんだよなあ。まあ、急に変えられないか。

そんなジプシーの後ろ姿を眼で追いながら、京一郎は夢乃に耳打ちした。

「奴が一晩かかつても、何の手がかりも掴めなかつたんだ。だが、見る目が変われば何か出てくるかもしれない。奴程の情報網は持っていないが、俺は暴力団関係と過去に関わつた事件を調べる。お前は親父さんを通して警察などで何か動きがないか、当たつてくれ」

夢乃は頷いた。

……なあんだ、あんなことを言いながら、やっぱり京一郎も、そつちの方面を疑っているんだ。

で、私は何すればいいの？

チャプター・5 ほーりゅう

あれから、特に変わったことはなかった。いや、あったんだけど。

ジプシーは例の、殺気を帯びた様な視線というものを一昨日昨日と、学校の帰りや家にいる時に三回程感じたらしい。やっぱり実害はなく、ただ、見られているだけ。

まるつきり油断をする気はない様だけれど、いい加減慣れてきたのか、ジプシーの行動は通常生活に戻ってきている。

ただ、正体不明の相手への緊張のせいか、やはりいつものジプシーの、無表情の中にある自信過剰な迫力やキレがない。こんな時に裏の仕事が入ったらどうするんだか。

そう思っているところに夢乃から、ジプシーは普段から個人的に武術の早朝練習していると聞いたので、一体ジプシーが、どんな練習を朝っぱらからやっているのかと、私は眠い目をこすりながら出て来てみた。

場所は近くの小さな山。子供の足でテッペンまで登るのに三十分程度。途中までの道は殆ど舗装されており、山裾には民家も多く建っている。上まで行く間に、遊具のない小さな広場がいくつかあり、そこでは、早朝の散歩や趣味を楽しむ決まった面子らしい人達が、それぞれの場所をとって朝の時間を過ごしていた。

ジプシーも以前から、その集団と同じように、ある一角の広場を使って練習をしているという事らしい。

「何か、面白くない」

私は、座っていたベンチの背にもたれた。

わざわざ外でする練習って言っていたから、てっきり映画のよう

な華やかな武術が見られると思ったのに。何か違う！　これは何？
太極拳？　この八工の止まりそうなゆっくりした動作。私が相手
になって一発蹴りをかましてやるのか！

……　って言いたい位、技や構えをゆっくりとやっていく。
見ているだけで退屈だ。

「ついた師匠の考え方で、練習方法も全然違うだろうからさあ」
集会というものの朝帰りらしく、オートバイをベンチの脇に止め
た京一郎が眠そうに言った。

「技のスピードや筋力を付ける事、体力重視の先生もいれば、ゆっ
くりでも技や急所の正確さを重視する先生もいるって事だ」

じゃあ、ジプシーに拳法を教えた人ってのは後者な訳ね。こんな
練習で強くなれるものなのかあと、ぼんやりと眺めていたら、夢乃
が紙袋を抱えて到着した。

「今朝は京一郎も合流するって聞いていたから、朝食に沢山サンド
イッチを作ってきたの」

夢乃も朝から大変だなあ。御相伴に預かります……。　
そう思っていたら、京一郎がジプシーに声をかけた。

「夢乃も来たし、残り十分程、俺の眠気覚ましも兼ねて連反攻に付
き合おうか。おひい様も期待しているようだしさ」

ジプシーが頷くのを確認して、上着を脱いだ京一郎が肩を回しな
がら近づいて行く。

「何するの？」

夢乃は、あいているベンチの上に、紙袋から取り出したサンドイ
ッチや保温ポット、紙コップを用意しながら言った。

「二人がいつもしているのは、お互いに最初に打ち合わせて決めた
剛法技を、攻撃防御を入れ替わりながら続けて行うつて感じのもの。
予め打ち合わせているからダンスみたいなものだけど、だんだん
スピードが付いてきたら、見ていても結構面白いものよ」

なるほど。ゆっくりの型練習の次は、スピード練習って事か。
「それって、勝敗がつくものなの？」

「普通は勝敗がなくて、攻撃に回った側が防御間合になれば終わるけれど、この二人の場合は、集中力が途切れて受け損ねた側が負けになるわね」

近づいて行った京一郎が、最初はゆっくり目に攻撃を仕掛ける。それをジプシーが防御し、続けて攻撃に移る。……なるほど、それを交互に続けていく訳ね。見ている間に、だんだんスピードが上がってきた。攻撃が全てわかっているから、全部お互いに防御されるんだろうけれど。

なんか、この打ち合いは見ていて気持ちが良いぞ。

休みが入らない上に、途中から本気モードになるので、この連続は十分程続けば長い方らしい。

「この十分だけでも結構いい運動になるよなあ」

そう言って廻蹴を受け損ね、痛む脇腹を押さえながら、京一郎はサンドイッチを手取る。そんな京一郎に、保温ポットから淹れた暖かい紅茶を飲みながら、ジプシーが言った。

「京一郎、悪いが、これからバイク借りる」

「おう。聞いていたから満タンにしてるよ」

「……ジプシー、何処かに行くの？ って、オートバイの運転免許持っているの？」

確かに今日は学校の授業がない土曜日。でも、朝から一人でオートバイなんか借りて、何処に行くんだろう？

「免許や資格は、取れる歳になった時に出来る限り取っている。バイクは普通二輪免許を持ってるよ」

「……出来る限りって。そうか、ジプシーって資格マニアだったのか。」

「夢乃の親父さんが、警察関係の射撃場の予約を隠密におさえてくれているんだ。俺は違法な部外者だから、こればかりは空気が取れた時に無理してでも行かないと。今回は少し場所が遠くてさ」

……夢乃のお父さんだからなのか、そんな違法がまかり通るのは。

そんな事を考えていたら、ジプシーが私に向かって言った。

「あと、ほーりゅう。今日は本当なら授業がないが、ちよつと学校に用事がある。俺が戻れる時間は、そうだな……二時に学校まで出て来られるか？」

「……私？ 私だけ？」

「いや、一旦このメンバーで。変更があれば随時連絡する」

……名指しで何の用だろう？ まあ暇だし。別にいいけれど。

学校って事は、制服で集合だな。

チャプター・6 ジプシー

思ったよりも高速が混んでいなかった為、俺は待ち合わせの約束よりも三十分早く学校に着いた。さすがにバイクでの移動中や行った先では、ここ数日の変な視線は付いて来ない。こうなると、俺に付きまとう例の気配は、学校帰りとその後に続く、寝るまでの生活限定って事か。

俺にしては珍しい待ち状態。相手の正体が分からず、こちらから先制攻撃を仕掛けられないのは、結構辛いものだ。

眼鏡をかけながら校舎に入ると、授業がない土曜日なのに生徒が多い。

……そういえば、テニス部とバレーボール部が他校との交流試合で、ウチのコートを使うって言うていたな。

俺は、待ち合わせの場所にした生徒棟一階の階段下で、ちょうど角度的に見えるテニス部の試合を、ぼんやりと眺めながら腕を組んで立っていた。

時々、待ち合わせ予定の二時を確認しながら待っていると、階段上から人の気配がした。

ふと、視線を上げる。

この学校の制服ではない、うつむいた女の子が一人、立っていた。見覚えがある。何処で会った……、ああ、数日前に街で絡まれている所を助けた女の子じゃなかったか？

その時。

「お待たっ！」

ほーりゅうが目の前に飛び込んで来た。

急にほーりゅうが視界に入った為、反射的に俺は言った。

「遅い」

「だってさあ」

慌てて階段の上を見る。しかし、先程の彼女は、もう姿が見えない。

「ジブシー、どうした？」

遅れてやってきた京一郎と夢乃が、不思議そうに声をかけてきた。
「いや、今そこに、この間助けた女の子がいた」

「本当？ …… 他校の人でしょう？」

「今日は、テニス部とバレーボール部が交流試合をしている。多分どちらかの応援について来たんだと思うが。 …… まあ、向こうは俺の事、気が付いてもいないだろう」

ふうんと、ほーりゅうが頷く。

そういえば。

「お前、二時の待ち合わせに遅れたな」

「だあってえ、学校に来る途中のお洒落な喫茶店で、新作のパフェが出ていたのよ！ ついついメニューを眺めちゃってさ」

なるほど、理由がほーりゅうらしいか。 …… 喫茶店に新作パフェ、ちようどいい。

「私達も遅れてごめんなさい。かなり待ったかしら？」

夢乃がそう聞いたので、俺は試合が終わったらしいコート振り返りながら言った。

「待っている間に、テニス部の試合を見ていた。 …… ウチのテニス部は思った以上に強いな。圧勝だ」

「おまえなあ」

あきれたように京一郎が言った。

「この間の、俺が用事で市営のテニスコートでの待ち合わせに遅れて行った日、そのテニス部の主将とお前で互角に打ち合っていたじゃねえか。何て苗字だったか …… 下の名前は男か女かわかんねえよ
うな、カオルとか言う二年と」

「 …… ああ、向こうは俺の事を同じ学校だと知らなかった様だがな」

そう言いながら、俺は時間を確認した。そろそろ行くか。
俺は、ほーりゅうに視線を移す。

「ほーりゅう、付き合おうか」

眼を大きく開いて、一瞬黙り込むほーりゅう。……その後、何か警戒でもしているのか、上目遣いで俺の様子を伺う。

「どうした？」

「それって、どういう意味」

「どういう？ 俺は何か特殊な言い方でもしたのか？」

「変な言い方だったか？ お前がパフェを食べたいなら今から付き合おうかという事だが。そうだな、言い方を変えたら……今までまともに、お前と二人きりで話をした事がないから、話をしがてら、さっきお前がメニューを眺めていたと言う喫茶店へ、これからパフェを食べにでも行こうか。おこつてやるから……って意味だが」

「……OK！」

意味が通じると即答のほーりゅう。素直で単純だ。

俺は、京一郎に目配せをしながら、借りていたバイクの鍵を放つて返す。夢乃は心配そうな顔をしたが、京一郎は鍵をキャッチしながら無言で頷いた。

「それじゃ今から、ほーりゅうを借りる」

俺は二人にそう言つて歩き始めた。後からほーりゅうが付いてくる。

チャプター・6 ジプシー（後書き）

このチャプター・6（&1）は短編『ヨツカカンノ恋』と内容がリンクしておりますので、そちらも同時に読まれると裏話っぽくなります

チャプター・7 ほーりゅう

「私ってさあ、てつきり勘違いしちゃったよ」

目的の喫茶店への場所を一通り説明した後、私は前を歩くジプシーにそう言った。

「何。どんな勘違い？」

ちよつと言いつらいかなとも思ったけれど、なんか今日の、と言うか今のジプシーはいつもと雰囲気が違う感じがする。なので言うてみた。

「ジプシーが私に付き合おうって言ったでしょ。付き合うつて、彼女になれとかの意味なのかと思っちゃった。考えたら、ジプシーに限ってそんな事言う訳ないよね」

「……なるほど」

そう言つて、前を向いたままで、ジプシーは少し笑った。

……やっぱり今は、いつもの刺々しさと言うか、突き放す冷たい感じがしない。

連日の正体の分からない気配と視線で、いつにも増してかなり神経質になっているジプシーだったけれど、こう何日か続くと神経が持たないよなあ。そのせいかな。

それとも、さっき言っていた二人で話をしようつてのは、腹を割つて話そうつて意味で、それでいつもの、俺に近づくなオーラが出ていないのかな？

……だから、つきまとっている気配の相手はきっと、文化祭でジプシーに一目ぼれした誰かのストーカーの類だって、私は思っただけどなあ。

十分程歩き、目的の喫茶店に着く。大通りに面したわけではないので、土地を広く使った一階建てのお洒落な雰囲気のある喫茶店。表には新メニューのサンプルで、ガラス越しにいくつかのパフェが

並んでいる。そう、これこれ！　どれにしようかなあ。

「これから寒くなる季節に、パフェか」

ガラスに張り付いている私の後ろで、ジプシーがつぶやくように言った。

「分かっていないなあ。女の子は寒い季節にアイス！　おコタに入りながらとか、暖かい喫茶店の中でとかで、アイスを食べるのが美味しいのよ」

そう言いながら私は、喫茶店の扉に向かう。飾り細工のある取っ手に手をかけようとしたら、先にジプシーが手を伸ばして扉を開けてくれた。

「……ありがとう」

京一郎だったら普通にしそうな事、一応ジプシーもするんだ。

広い店内に入ると、かなり混んでいた。それでもいくつかあいてる席を見回していたら、ジプシーが後ろから言った。

「窓際の二人席、日が入って明るそうだ。そこでいいんじゃないか」
意外な感じがした。

「……なんか、ジプシーのイメージとして窓際が嫌いそうなのに、いいの？」

「なんで？　裏の世界の人間に顔を見られたらとか、狙撃されたらとか？　そういう連中は俺が現役高校生だとは知らない。そこまで日常生活は制限しじゃない」

そう言って、ジプシーが先に歩いて行って席に向かった。ジプシーがいいって言うならいいのかな。なので、私も付いて行く。

席に付いてもう一度、私はフルカラーのメニューを手に取り、真剣に眺めた。

「……私、この『ピザの斜塔』って言うパフェにする。果物とバナナアイスとたつぷり生クリームの上に、チョコレートソースがかかっているヤツ！　美味しそうだよねえ」

ジプシーが、注文を聞きに来たウェイトレスに伝える。

「このパフェ一つと、珈琲一つ」

「あれ？ ジプシーはパフェ、食べないの？」

ジプシーはウェイトレスが立ち去った後で、言った。

「甘い物は嫌いじゃないが、この結構な大きさを一つ、食べきる自信がない」

なんか笑った。本当に些細な事だけれど、ジプシーでも自信がない事、あるんだ。やっぱり少々精神疲れかで気弱くなっているのかな？

パフェが来る間、初めて入った店内をきょろきょろと見回してみた。充分に間隔を置いて配されたテーブルに、緩やかなクラシックが流れている。女性同士のグループの中に、カップルも数組。土曜日のおやつ時間だもんね。ただ、制服で来ている人達はいないや。

店内は暖房が効いているようなので、下にカーディガンも着ている私は制服の上を脱ぐ。ついでにジプシーにも声をかけた。

「店内、結構暑いよ。制服の上着脱いだら？」

ジプシーは、眼鏡を外しながら言った。

「……いや、今日は下に吊っているから」

一瞬、何の事だか解らなかったけれど。……ああ、今、上着の下に物騒なものを持っているっていう意味か。

そして、ジプシーはおもむろにポケットからシルバー色の携帯電話を取り出す。

「……ジプシーって携帯、持っていたんだ。知らなかった」

「まあね。普段は持ち歩かない」

「……それって、携帯って言わないじゃん」

ジプシーは、それでもすばやくいくつかボタンを押してから二つ折りに携帯を戻し、テーブルの上に置いた。

「俺も夢乃も持っているが、そう必要に迫られる事がないし。今日是用事で遠出したからね。それに俺の携帯には、夢乃と京一郎の番号しか入っていない。……京一郎は普段からずっと携帯を持ち歩いているけれどね」

そう言っている間に、パフェと珈琲が来た。私の興味は、瞬間にパフェへ移る。

わぁ〜い！ 何処から突き崩そうかなあ。下手に食べると名前通り、上に高く、斜めぎみに絞った生クリームが崩れてくるぞ。

生クリームの下のパニラアイスを突つついている私の目の前で、珈琲に何も入れず、ジプシーはカップを手にする。ふと、そのカップを持つ左手の指に、私の視線がいった。

京一郎から勉強を教えてもらっている時に、京一郎はすらりとした長身に合わせて指も長いなあと眺めた事がある。

目の前のジプシーの指先は、男の子なのに、とても綺麗に整えられていた。

京一郎も、本当はジプシーも、かなり喧嘩をする格闘系なのに、ちよつと意外な感じがする。普通格闘系なら、拳ダコとか作ってゴツゴツしたイメージがあるんだけど。

……目の前にいる今のジプシーは、普通の、何処にでもいるような高校生の表情をして、穏やかな雰囲気漂っていて。頭も運動神経も見た目も良いのに。

自ら危険な事に首を突っ込まずに静かに過ごせば、普通の生活が送れそうのに。

何故、ジプシーは、裏の世界で生きる道を選んだのだろうか？

チャプター・8 ほーりゅう

「何？」

私は考え事をしながら、ぼんやりとジプシーを見つめていたらしい。慌てて横へ眼をそらしたが、私の視線に気が付いたジプシーが聞いてきた。

「……言わない。夢乃と京一郎と、約束したから」

横を向いたまま、そう言ったけれども、今度は逆にジプシーに見つめられているのがわかる。

……よそを向いてくれないと、この、目の前にあるパフェを食べにくいじゃない。アイスクリームが溶けちゃう。

「あの二人と何を約束した？　そういう言い方だと余計に気になる。

……まあ、夢乃の言いそうな事は察しがつくが」

横目で無言で、私はパフェを突つついていたけれど、ふと思いなおしてみる。今日のジプシーは話がしやすそうな雰囲気だね。私の今思っている事は現在進行形の事であって、過去の事じゃないよな気がするし。

……思い切って言うてみようか。うん。

私は視線を戻し、目の前のパフェを見つめたまま、一気に言った。「……何でジプシーは、運動神経も頭も見た目も良いのに、普段はへたれのフリをして、裏では危険な事をわざわざやっているのかわからない。でも、夢乃達にジプシーの過去は聞かないって約束したから、過去は聞かない」

……やっぱり直接過ぎたかな。

「お前……聞かないって言うても、そこまで、はっきり口に出したら、聞いているのと同じ」

あきれたようにそう言うて、それでもジプシーは怒らずにちょっと笑った。

笑いながら、眼を伏せた。

「そうだな……いろんな要因や気持ちが混ざっていて、一概にこれとは言えないが」

再びパフェと格闘をしていた私に、しばらくしてからジプシーは、考えつつ、ゆっくりと話し始めた。

ジプシーが眼を伏せたまま私から視線を外しているので、私はそのまま食べ続けながら話を聞く体勢になる。

「まあ、夢乃から俺の過去を多少は聞いていると思うけれども。理由としては……俺の家族を奪った犯人への復讐や、……リボルバー、俺が持っている銃を受け継いだ経緯や、……逆恨みとわかっているけれども」

言いにくそうに一旦言葉を区切ったが、目の前の珈琲カップを見つめながら、ジプシーは続ける。

「頭では逆恨みとわかっているけれども、俺は奴が許せない。……奴に対する恨みと憎しみが、俺が普通の生活を送れない一番の理由かも」

逆恨み……理由なんか必要ない感情だね。
奴って、我龍の事だね。

私は今、どんな顔をして、ジプシーを見たんだろう。
視線を上げて私を見つめ返したジプシーと、眼が合った。

「で、お前はどんなんだ？」

……はい？

急に話を振られても、何の事だか？ 今の私は多分、間抜け面をしているはず。

「お前も全く普通の生活とは言えないだろう。制御不能とは言っても超能力者で、お前の持っているロザリオの中の石、明らかに特殊な石だ。誰かに狙われるとか追われるとか、そんな心配はしないの

か」

心臓が、ドキンと打った。

確かに自分自身、物心ついた時から過去に何度も危惧した事だ。でも動揺している事がばれない様に、笑いながら何でもないように言う。

「私、家族以外では成り行き上、ジプシーと夢乃と京一郎にしか、ロザリオを持ち歩いている事を言っていないんだあ。私がここに来る前の学校の友達とかにも見せた事ないし、能力の事も今まで人に話をした事がない。だから大丈夫でしょ！」

ふうんという感じで、ジプシーは私を見る。……実は内心、結構気にしていること、ばれてるかな。私、すぐに顔に出るからなあ。

その時、ジプシーの眼が細くなり、表情から感情が消えた。

……最近、鳴りを潜めていたジプシーの殺気が広がる。私は近くで毒気に当てられたかのように総毛立った。

でも、それは、本当に一瞬だった。あまりにも一瞬過ぎて私の勘違いかと思い、彼の顔を見直すと、ジプシーは笑いを含んだような表情で私を見ていた。殺気なんて微塵も感じられない。あれ？ ……本当に今の感覚、私の勘違いだったのだろうか？

そしてジプシーはテーブルの上の携帯を手に取りながら開き、ボタンを一つ押して元通りテーブルに戻しながら、私に言った。

「ほーりゆう、もう少し上手に食べるよ」

？

話の流れがわからず、不思議そうな顔をしている私に手を伸ばし、ジプシーは私の頬に付いていた生クリームを指でぬぐった。

「顔に付いてる」

それだけでも恥ずかしい事なのに、ジプシーは、指に付いたクリームを、自分の口を持って行った。

「なっ……何すんのよ」

この男！ 周りから見たら、付き合っているカップルみたいで恥ずかしいじゃない！ …… って言うか、今気がついたけれど、二人だけで喫茶店に入ること自体が、もしかしたらデートになるのか？
うわぁ……。

急に恥ずかしくなってきた私は、顔を上げられなくなった。

パフエ、食べられないじゃん！

そんな私をジプシーは、テーブルに片肘をついて、面白そうに笑いながら見ていた。

チャプター・9 ほーりゅう

喫茶店を出ると、途端に外の寒い空気が身にしみた。お店の中は
かなり暖かかったし。……なんか最後の方は赤面するような、体温
上がるような事もあったしさ。

一体ジプシーは、何を考えているんだか。

「さて、今から何処に行きたい所、ある？」

後から出てきたジプシーが、私に聞いてきた。

「え？ ここのパフェだけが目的じゃなかったの？ ……うん。
何処かって言っても、もうこの時間だし制服だしなあ」

私は腕を組んで考えた。今、四時過ぎでしょ。今から行きたい所
も特に思い浮かばない。

「なら、うちで夕食を食べていくか？ お前の家は今日も叔母さん
遅いんだろう？」

前に私、今日は叔母が遅い日だって言ってたっけ？ 自分では記
憶にないのに覚えていたらしいジプシーが言う。それは確かに嬉し
い。夢乃のお母さんの作るご飯も美味しいし。

「そうしよかなあ。でも急にお邪魔して大丈夫？」

「……実は、もうそのつもりで、今日は朝から頼んできている」

そう言っただけで、ジプシーは私の前を歩き始めた。

私は慌てて後をついていく。

……私、かなり、ジプシーを誤解していたのかも。

私が転校して来た日に、確かに私が余計な事をしたとはいえ、殴
って気絶させようと考えたり、文化祭では変な術に巻き込んで感電
させたりと、女に対しても情け容赦ない奴だと思っていたけれど。

こうして二人だけで話をしてみると、そう悪い奴には思えないな
あ。

ただ普段は、裏の世界でも活動をしている関係で、そう振舞わな

ければならないだけなのかな……。

しばらくジプシーの後ろについて歩いていたらけれど、ふと、ジプシーの家の方向ではない事に気が付く。

「あれ？ 道、違うんじゃない？」

ジプシーは、私に合わせてか、歩調を緩めながら言った。

「散歩がてら、遠回りをして帰ろうかと思ったけれど。嫌か？」

まあ、まっすぐ帰っても夕食以外何がある訳でもないし。別にいいけれど。

そのまま歩いていくと、私の知らない道に出た。そう言えば、この土地に引越しをしてきて、私は三カ月程になるのかな。近くても普段行かない場所があるって事か。

うん。散歩も悪くない。

そのうち大きな公園が目の前に出てきた。中に入っていくと、子供の遊び場にあるような砂場やブランコはなく、逆に巨大アスレチックと言える位の大きな木製の遊具が、広場の中央にどんと置かれてあった。そこで、数人の小学生が遊んでいる。また、散歩道として想定されているのか、寒い季節の為に葉の落ちた木々に囲まれた長い道が、広場の周囲に幾重か作られている。その周りの夕暮れの散歩道を、犬と一緒にゆっくりと歩いている人々。

「知らなかったなあ。ちょっと足を伸ばせば、こんな大きな公園があったんだ」

今度は私が先に立って、公園の散歩道を歩いていく。アスファルトじゃない。土の道だけれど、歩きやすいように整備されている。

「いい場所だね」

振り返ってジプシーを見る。

すると、私の顔を見ていたジプシーが言った。

「お前、顔に何かついてる」

え？ さっき食べたパフェ、まだついてたのかな？ 慌てて手

の平でこすってみる。

「こすっている場所が違う。取ってやるから眼、つぶれって」

言われた通りに大人しく眼をつぶる。ジプシーの片手が私の頬を撫でる。……でも、なかなか眼を開けていいと言わない。なので、つい勝手に眼を開けてみた。

息のかかりそうな距離で、顔を斜めに傾けて眼を閉じたジプシーがいた。

思わず眼を見開いて固まった私の気配が伝わったのか、ジプシーも眼を開けて私を見た。そして、微笑みながら、ゆっくり私から離れる。

「さて、暗くなるから帰ろうか」

……ちよつと待て！ 今、キスしようとしていなかった？

あまりの事に言葉が出ない私へ、ジプシーは笑いかけてから、さっさと歩き出した。

チャプター・10 ほーりゅう

寒い季節になると、日が落ちるのが早い。薄暗くなってきた道を歩く。

結局、あの大きな公園から出た後、私とジプシーとの間に特に会話がなない。向こうはどう思っているのかわからないけれど、私は気まずいまま、ゆっくりとした歩調のジプシーの後について歩いていた。

……… ということ事が、問い詰めるべきなんだろうか？ ということ事は、問い詰めていいものなのか？ でも、なんて切り出せば良いのかわからない。

迷っている間に、ジプシーの家に着いてしまった。

ジプシーが家の門を開け、私も一緒に玄関をくぐる。

「お邪魔します」

靴を脱ぎながら、私は家の中に声をかけた。私の声が聞こえたように、キッチンから夢乃のお母さんが出てくる。

「お帰り、聡。ほーりゅうちゃんもいらっしやい。夢乃と京ちゃんも、もう二階に戻ってきているわよ」

そうだ、夢乃！ …… こういう事は、夢乃に相談したらいいのかも！

「お先に失礼します！」

私はそう言っ、ジプシーを玄関に置いたまま、二階への階段を駆け上がる。

私は夢乃の部屋の扉を勢いよく開いたが。あれ、いないや。ジプシーの部屋なの？

今度は恐る恐る、ジプシーの部屋の扉をあける。

「お、ほーりゅう、お帰り」

夢乃もいたが、先に京一郎が声をかけてきた。そして、二人はジブシーのパソコンで画面を見ながら、写真の印刷を沢山していた。何しているんだろ。写真の一枚を手にとつて眺める。……ただの街の風景。街並みや人が行き来する通りばかりを写している写真。なんだこれ？ でもどこかで見た事があるような景色。

「ほーりゆう、ごめんなさい！」

いきなり夢乃が、私に向かって手を合わせて謝ってきた。

「止めようと思ったけれど、押し切られちゃったの」

一体何の事？ 私は状況がわかっていない。写真と夢乃を見比べる。

「先に言っておくが、発案者は奴だからな。俺じゃねえよ」

京一郎もパソコンの画面を見つめながら言う。……何だか嫌な予感。

「OK！ 大体印刷出来た。後は写真チェックだな」

京一郎はそう言つてパソコン前の椅子から立ち上がると、私の方へ歩いてきた。

「怒るなよ。説明するから」

「説明によつては怒る！」

「まあまあ、落ち着けて。一応お前の意見を取り入れた形には、なつてんだから」

？

「このままの状況がいつまでも続いていたら、こちらからは動きようがねえだろ？ だから、おとりとしてだな、お前と奴でデートコースを回ってもらつた」

……はあ？

「デートという気の緩みそうな隙を作つて、もし裏の世界の連中が動くようなら、それでよし。お前が主張していた奴への一般人のストーリーカーなら、デートという状況があれば必ず動くだろうから、それでもよし。結果としては誰もその場では仕掛けてこなかったが、今回も、その誰かの視線と気配をジブシーは感じたそうだ。連絡を

もらった俺と夢乃で、お前らの周辺の通行人などの写真を撮りまくってきた。この中に怪しい人物が写っていたら簡単なんだがなあ」

……なにい？

慌てて写真を見直す。そうか、見覚えがあるようなこれって、喫茶店の中から見えた外の風景！

「連絡って？ そんなの、何か合図したっけ？」

「ジプシーの携帯から俺の携帯へ。今、気配を感じたってメール」

あ。あの、一瞬ジプシー自身の殺気を感じた時！ 確かにあの時、ジプシーは携帯を触ってた！

「一応喫茶店を出た後の公園までつけて行っただけだ」

……公園！ って事は。

「お前らの、いかにもラブシーンまで見たが、向こうも隠れていたのかなあ。周囲に写真に撮るような人の気配がないから、その時点で俺と夢乃はこっちに戻ってきて、プリントアウトしていた」

見たんだ。アレ、夢乃も京一郎も、見ていたんだあ！！

「ぎりぎり触れない距離をとった。問題ないだろ」

後ろで、いつのまにか部屋に入ってきて来ていたジプシーが言った。私が振り返ると、無表情で机の上に鞆を置き、制服の上着を脱ぎながら京一郎の方へ歩いていく。

この男！ こいつの演技にだまされた。先ほどまでの笑顔で穏やかな方がフェイクか！ もういつもの無表情に戻っているし。それに、触れた触れないの問題じゃない。よくも乙女の気持ちえ！

後ろから殴ってやろうかと、ジプシーの背後で私はコブシを振り上げる。

「あれ？ お前にしちゃ珍しい。制服なのに、下に拳銃吊っていたとは」

その時、不思議そうに聞いた京一郎に、ジプシーが写真を見ながら答えた。

「ああ。今日は特別。俺一人なら素手でもどうとでも切り抜けるが、

さすがに今回は俺の事情でほーりゆうを巻き込んだから。街中でも状況に応じてすぐに臨戦態勢に入れるようにはしていた」

私はジプシーの言葉で、ふと気がついた。確かに今回は、おとりだったかもしれないけれど。携帯で京一郎に連絡する直前までは、喫茶店で話をした内容や私が訊ねた事は、おとりとは関係ない内容だったし。

あの時の話は、本当のジプシーの気持ちだったんじゃないかな。

……それに、やり方は荒っぽかったとしても、あの場で何かあったら、きつと本当に私を護ってくれる気だったんだ。やっぱりジプシーは、そんなに悪い奴ではないのかも……。

私は、振り上げた手をどこに下ろそうか迷った。

そんな私の様子に気がついたのか、冷ややかな眼つきで私を一瞥して、ジプシーは言った。

「いろいろと未経験だったようだが、ちょうど良かっただろ。練習が出来て」

この、男！

私は後ろから殴った上に、首まで絞めてやったわ！ きゅーっ
と！

チャプター・11 ほーりゅう

私は夢乃の家で、京一郎と一緒に夕食をご馳走になり、そのまま泊まる事にした。明日は日曜日だし、問題はないよね。

夢乃のお母さんが、私の叔母に連絡を入れてくれる。前に泊まりで試験勉強をした時、お泊りセットとしてパジャマを置かせてもらっていたので、急でも大丈夫だったし。

夜更かしは美容の敵だもんね。私と夢乃はさつさと寝る事にしたので、夢乃の部屋のベッドの隣に、一組布団をもらって来た。

早い時間から電気を消す。暗い中で、私は唐突かもしれないけれど夢乃に言った。

「今日の事、シチュエーションのせいだと思うんだあ」

「……何が、どういう事？」

夢乃が聞いてきた。話題を持ち出すこと自体照れるけれど、暗闇だから、恥ずかしくなく言えるよね。私は仰向けに寝転がったまま続ける。

「確かに喫茶店や公園でドキドキしたけれどさ、あれはジプシーが相手だからじゃなくて、同じ事を京一郎がしたとしても、多分同じようにドキドキしたと思う。だから、その状況だけのせいだと思うんだあ」

「……うん、私もそう思う。ジプシーって何となく、ほーりゅうの好みじゃないって気がするし」

「でしょ。夢乃はそんな状況になった事、ないの？ ジプシーと同じ家に住んでいてさ」

「私は。ジプシーは多分家では、誤解が起きないように必要以上に気を使っているよ。私自身ももう、家族同然に思っているし。……それに、なんて言うか、私もジプシーは恋愛対象から外れるんだよねあ。好みの関係かな。私の好みは……そうね、知的で大人っぽい

人」

「それはわかる！ 夢乃、英語の熊谷先生を見る時の眼が違っもん」
「やだなあ！ そんな所だけ何見てるのよ！ ほーりゅうは」

見えないけれども赤くなっているだろう夢乃。そばで並んで座っていたら、きつと背中を照れ隠しにバシバシ叩かれているかも。……
……そうか、熊谷先生って事は、夢乃って、知的で大人っぽくて優しいタイプが好みなんだなあ。

「大人っぽいと言えば。……私が転校してくる前にいた高校の生徒会長、三年生だったけれど、多分夢乃の好みだったと思うなあ。何か、こっちの生徒会長と違って、すごく落ち着いていたし、頭も良くて大人って感じだったなあ」

「それ、こっちの会長に失礼よ。それに足立会長は二年生だし。一年後にはもつと落ち着いて貫禄が出るかもよ。……ほーりゅう、そういうあなたはどんな人がいいの？」

「私かあ……」

うーん。特にコレって言うこだわりはないんだけど。

「そうだなあ。私は、気持ち的には別れても、すぐまた会いたいって思える相手かなあ。あと、恋愛なんだから、一緒にいるだけでドキドキしたり嬉しくなるような。……顔はそりや良いに越した事はないだろうけれどさ」

「ウチの男共、見目は良いんだけど、何故か私たちの恋愛対象から外れるよね。……そばにいる距離が近すぎるのかしら」

「……くそっ！ どうしてもゲートが開かねえ！」

京一郎がパソコンの画面の前で独り言ちた。

それまでは予備のパソコンも引っ張り出し、ジプシーと京一郎の二人で長い間黙々と作業をしていたが。

「大した組織でもないのに、パスワードが三重もかかっていやがる」
「それでも組織の中のスナイパーリストだ。まあ、位置的には裏帳簿と同等位の最重要機密にはなるだろうからさ」

手を止めずに画面を見ながらジプシーは言う。

「俺、考えたら昨日も徹夜じゃねえか。機械使ってもパスワード解除に全然頭回んねえ。……下で珈琲入れてこようかな。お前も飲むだろ?」

両手をあげて背伸びをしながら、京一郎は言った。

「ところでさ、ほーりゅうと夢乃のヤツ、気がついてるのかな」
ちよつと声を落として、京一郎が言った。

「何を?」

声をさらに落ししながら、笑いを含んだように京一郎は言った。
「特に、ほーりゅうの声。でかくて内容が隣の部屋まで筒抜けだつて。全く好き勝手言いたい事を言っていやがる。俺ら対象外だつてさ」

「さっきまでこっちの部屋が、それだけ静かだったって事だろ。それに、ほーりゅうの声が大きいから夢乃もつられてるんだろう。普段は、夢乃の声は聞こえない。……まあ内容はともかく、女共は平和だつて証拠だ」

京一郎は席を立ち、静かに扉をすり抜けて部屋を出て行く。

ジプシーも一旦手を止め、伸びをしながら眼を瞑った。

そして今日の喫茶店での会話を思い出す。彼女の質問。あの時は、俺は演技じゃなかった。

以前ほーりゅうに、我龍との関係を直接聞かれた時は、かなり精神的に動揺した。今回は聞かれ方が違ったせいか、俺が自ら話す気になったせいか、比較的精神を安定させたままで奴の話が出来た。……こつやつて少しずつ、俺は奴の事も考えていけるようになるのかな。

あと、ほーりゅう。

あの様子では、彼女も能天気なりに自分の能力の事をかなり気にはしている。本当に感情がすぐ顔に出る女。よく今まで事件に巻き

込まれずにいられたものだ。

能力に関して全く無知で未開発なのは、今まで相談する相手もいなかった為だろう。

俺自身がこんな時だが、ほーりゅうの件も乗りかかった船だ。いつまでも先延ばしする訳にもいかない。何か対策を考えていかないと。

チャプター・12 ほーりゅう

そして月曜日の朝。今日はさすがに学校がある。

京一郎は二日間徹夜だったそうで、日曜日の夕方に家で寝るって帰ったけれど、私は土曜日からずっと夢乃の家にお泊りした。

考えたら私、土曜日におとりになったって事は、何か進展があるまで、おとりのままって事じゃないの？　ずっと、夢乃やジプシーや京一郎の中の誰かと、行動を共にしていないといけないってことじゃないのかなあ。

二人に合わせて一緒に家を出たので、早々に教室に着いてしまった暇な私は、夢乃やジプシーと一緒に窓の外の他の生徒の登校風景を眺めていた。

朝一番の教室って人は少ないし、晴れた日に窓から入る朝の風も結構さわやかだなあ。知っている人達が眼下を通るのを、四階からぼんやり眺めているのも楽しいかも。

「お、早いねえ」

京一郎も珍しく朝早くから教室に入ってきた。

「いつもはギリギリのイメージがあるほーりゅうも、さすがに夢乃の家から登校となると遅刻になる訳ねえよな」

「ギリギリのイメージは、京一郎だって一緒でしょ」

「俺はギリギリどころか普段は遅刻だって」

京一郎は笑いながら言った。

その時、窓の外で車の音がした。いやに大きく聞こえたので、私は思わず音がした校門の方を見る。

「おっ、あれ、フェラーリじゃねえ？」

同じように窓の外を見た京一郎が、目ざとく見つけて声を上げた。フェラーリ。車に疎い私でも聞いた事のある車の名前。門の前で赤いオープンカーが止まった。登校中の学生の間からも歓声が聞こ

える。人気がある車なんだあ。

「あれはF430のスパイダーだな。二千万は下らねえ」

へえ！　すごい高級車。誰が乗ってきたんだろ。

同じように窓から覗いていたジプシーが、続けて言った。

「ミツシヨンでV8エンジン。車回りが硬くて小回りがきかないから、乗るのは好みだ」

……　やっぱり男子は車が好きなのか。どういう事か私には意味がわからないけれど、よく知っているなあ。

見ている間に、左ハンドルの運転席から男が降りた。高級車に似合った雰囲気、あれは大学生なんだろうか。そのまま助手席へ回り、少々気取ってドアを開ける。

中から現れたのは、セーラー服を着た女の子だった。

大学生のお兄ちゃんが、高校生の妹を送ってきたような図なんだろうか。でも、あの制服、ウチの生徒じゃない。

「あれ？　でも何処かで見たような制服に見えるけれど、何処で見たんだろ？」

私は腕を組んで考える。すると、そばでジプシーが小さい声で言った。

「見覚えがあるのは、お前が生徒会長の妹に会った事があるからだろ。会長の妹が通っている私立中学の、あれは高等部の方の制服だ。デザイナーが同じだからデザインが似ているんだろ」

なるほど。

改めて、眼下の女の子を眺める。

細身で華奢な感じの、とても可愛らしい子だ。遠目でも良く分かる、小顔でパツチリとした二重。鼻筋も通り小さな唇。毛先を軽くふわふわ縦ロールに巻いたようなロングヘア！。そして、意識して動く動作も、場が華やかになるような芸能人的なオーラをまとっている感じがする。

「なんか、可愛いらしいんだけどねえ」

ずっと眺めていた京一郎が言う。

「へえ。京一郎って、ああいう子が好みなんだ」

私は言った。暴走族に入っている京一郎は、もっと何て言うか、そっち系が好みかと思っていた。それが先入観ってものか。

「いや、ロリータファッションの似合いそうな女に、特別興味はねえよ。俺はどちらかと言うと、顔が問題じゃなくて、こう、ボン・キュッ・ボンな身体の方が」

目の前の空間に手の動作で形を作り、ジェスチャー付で私に説明する京一郎の頭を、夢乃は「嫌な人！」っと言いながら後ろから叩いた。

ジプシーは、車から降りた彼女を無言で一瞥しただけで、車以上の興味はなさそうだ。

そんな私達がいる校舎の上方を、車から降りて門を通って来た彼女は見上げたらしい。

偶然、窓の外を見下ろした私と目が合った。

彼女は私を見て、にっこりと微笑む。

そしてそのまま、近くの入り口から校舎に一人で入って行った。でも。

「あれ？　ウチの学校に入っただけで、いいのかな？　今日は通常授業で何のイベントもないし、他校生って入っていいものなの？」

「他校生でも職員室とか、まあ用事で来る場合があるだろうしな」

京一郎はそう言ったが、しばらくすると、廊下からざわめきが聞こえ、先程の彼女がこの教室の入り口に姿を現した。

彼女は、まだ十数人の生徒しか来ていない教室内をゆっくりと見渡し、一瞬私の上で視線をとめる。しかし、すぐにそのまま視線を逸らし、今度は窓際にいるジプシーに眼をとめた。

嬉しそうな顔で教室の中を進み、自分に近づいてくる彼女に気がついたジプシーは、窓の外の風景を見ていた視線を無表情のまま彼女に移す。

ジブシーの正面に立った彼女は、これでもかと思う位の満面の笑顔で言った。

「はじめまして、たかはしれいか高橋麗香と言います。江沼聡君、私と付き合ってくださいませんか」

チャプター・13 ほーりゅう

はつきり「付き合ってください」と、彼女は言った。

私は、大胆にも他校の教室へ乗り込んできて、ジプシーに告白をした彼女に驚いた。

確かに文化祭後から最近まで、ジプシーは人気があった。机の中に置かれたり校門で待ち伏せされて渡されたラブレターは、かなりの数になっていたはず。今でも人気があるのだろうけれど、京一郎の一言で、それ以上に近寄り難さが出た為、今では誰も手紙を渡そうなどと思えないが。……そう言えばジプシーって、ラブレターは沢山もらっていても、直接「付き合って欲しい」とは、言われていなかったな。ジプシー、私の知っている限り、初の告白だ。

私は彼女をじっくり観察した。名前は、高橋麗香と言うのか。先程、窓から覗いて見た印象と変わらない。京一郎の言うロリータファッションの似合いそうな、ゆるいくるくるロングヘアーに覆われた小顔、パツチリとした綺麗な二重と通った鼻筋の下の小さな唇。そして近くで見ても、細身ながら場が華やかになるようなオーラを持っている。かなり、いや、これ以上はそうそうはいないであろう可愛い女の子だ。

しかし何で、こんな朝っぱらから他校に来て告白なんだろう？ 自分の学校はどうしたんだろうか。

そうそう、ジプシーが最近気配や視線を感じたりするって言っていたアレ、イメージが違うけれど、この彼女かな？ だとしたら、やっぱり私が言っていた一般人のストーカーの線で当たりじゃん！

彼女は重ねて言った。

「私を彼女にして欲しいんです。お願いします」

「ごめん。今は誰とも付き合う気がない」

彼女が言い終わるかどうかのタイミングで、彼女から視線を逸らしたジプシーが言った。

私も、遠巻きで見っていた十数人の生徒も、あまりの断りの速さに呆気にとられた。当の彼女も、あまりの即答に理解が出来なかったらしい。眼を見開いて、困惑の表情で固まっていた。

ジプシー、断るにしても早すぎるって。それに、もう少しやんわりとした言葉を選んだ方がいいのでは。

さすがに私は思った。これじゃあ、勇気を出してここまで来た彼女が可哀想過ぎる。

「……付き合う気がないって事は、今、彼女はいないって事ですよね」

ようやくという感じで、彼女が口を開いた。

ジプシーが視線を移して、一瞬私を見る。……そっか、一昨日の、おとりデートもどき。あれは本当におとりだから、どう考えても彼女彼女としてのデートじゃないでしょ。ジプシーもそう考えたんだろ。

「いないし、今後もしばらくは、誰とも付き合う気は、ない」

ジプシー、はつきり言い過ぎ。それでも彼女は食い下がる。そうそう、せっかくここまで来たんだもんね。……って、私は誰の味方なんだか。

「視線を逸らさないで。私の眼を見てもう一度答えてくれますか？」
教室内の雰囲気を感じたのか、廊下にも他クラスの人ばかりが出来てきた。何だか騒ぎが大きくなって来たかも。京一郎は、面白がっているような顔でジプシーの後ろで見ている。

その時、ジプシーは彼女から視線を逸らしたまま、かけている眼鏡の真ん中に左手の中指を添えて何かを言葉にした。あまりにも小さな呟きだったので、彼女にも聞こえなかったらしい。

「何ですか？ 私の眼を見て返事をください」

ジプシーは、ゆっくりと正面から彼女の眼を捉える。そして、一拍おいて、はつきりと言った。

「残念だが、僕は君と付き合う気は全くない。さっさと帰ってくれないかな」

驚愕の表情をした彼女は、小さくつぶやいた。

「そん、な……信じ……られない……」

教室に、平手打ちの音が響いた。

思わず私は、顔を両手で覆ったが、指の間からしっかりと見ていた。結構なきつさの彼女の平手打ちは、ジプシーの眼鏡を私の足元まで飛ばした。

ジプシーはよろめいたが、慌てて後ろにいた京一郎がジプシーの両肩を抱きかかえたので、踏みとどまる。その時、自分を支えた京一郎へ、ジプシーが何かをささやいた。

そして、教室から走り出て行く彼女を、誰も動けずに無言で見送った。

教室が一気に騒ぎ始めたのは、彼女の姿が見えなくなってからだった。

皆、ジプシーに声をかけてくることはないが、それぞれが遠巻きに見ながら憶測で話を始める。普段からあまりクラスメイトとの親交を持たないジプシーだから、まあ、その辺は仕方がない。

私は、足元に飛んできた眼鏡を拾った。大丈夫、割れていないし歪んでもなさそう。そして、眼鏡を渡そうと、ジプシーに近づいていった。

平手を食らった頬を押さえ、まだうつむいているジプシーの反対側の空いている手に、眼鏡を押し付ける。

「はい、眼鏡。でもさ、確かに今の断り方、結構きつい言い方かも……」

私の言葉は、そこで止まる。

これ以上、嬉しさを抑えられないという感じの笑みが、ジプシー

の口元に浮かんでいた。

この男、笑ってる！

何で？

訳がわからず、思わず後ずさりした私の眼は、京一郎の姿を探していた。いない。さっきまでジプシーの後ろにいたのに。

そして、登校してきて次々と教室に入ってくる生徒の向こうで、逆に教室から出て行くとする京一郎をみつける。

京一郎は、出口付近にいた夢乃に、すれ違いざま何か囁いてから、教室を飛び出して行った。私は夢乃に走り寄る。

「夢乃！ 京一郎は？ 何て？」

「今からサボリ。またお昼から来るって」

そして、夢乃はそう言った後、声を潜めて私に言った。

「ジプシーが京一郎に、『敵が動いた』って言ったわよ」

チャプター・14 ほーりゅう

敵が動いた？ …… 誰がどのように？

わかっていない私は、夢乃の顔を見る。

夢乃は、私の表情を見た後、ちよつと考えるような感じで小首を傾げる。そしておもむろに言った。

「ほーりゅう。今の女の子、高橋麗香さんって可愛かったわよね」
うん。

「あんなに可愛いんだったら、普段はどんな子なんだろうとか、ジプシーに告白しに来る前って、どんな彼氏がいたのかなあとかって、気にならない？」
なる。

「ウチのクラスの明子ちゃんって、そういう情報も詳しそうよねえ」
「…… 明子ちゃんに聞いて来ようっと！ やっぱ夢乃も噂話は気になるよね！」

私は明子ちゃんの所へ飛んで行った。多分、私の行動って夢乃の思惑通りに動いたんだろうな。

だから、その後すぐに、夢乃が他クラスや他学年をあたって、彼女の情報集めをしているなんて、知らなかったよ。

「知ってる知ってる！ 高橋麗香。あの子、この辺りでは可愛くて有名なもの」

他にも何人かのクラスメートの女の子に囲まれて、明子ちゃんは嬉しそうに知っている話を教えてくれた。

「なんか芸能人的なオーラがあるでしょ。本当に雑誌のモデルのような仕事もちよつとしているのよお。でも学校はちゃんと行ける時には行っているみたい。彼氏は今までいないって。高校生だし事務所が認めていないらしいしねえ。だから、彼女の周りにいる男は皆、タダのファンや追っかけ。今日、車で送ってきたのも取り巻きの一

人だよ。でもさあ、男に告りに来るのに、他の男の車に乗ってくるってのもさあ」

「……でも明子ちゃん、よりもよって、何で告白の相手がジプシーなんだろう？」

「ほーりゆう、それって普通に失礼だつてえ」

「文化祭に彼女、来ていたらしいよ。それでジプシーの舞台を観たんじゃない？」

「そりゃ、あのジプシーの女装は綺麗だったけれどさあ、ラブレターならまだしも直接告白に来るなんて」

いろいろと情報と憶測が飛び交う中、なるほど、やっぱり思った通りじゃないかと、私は勝ち誇った気分になった。

彼女は、文化祭の舞台で観たジプシーに一目ぼれして、その後は今日までずっと学校帰りなど、後をつけていたんだ。で、私とジプシーとの土曜日のおとりデートに引っかけたって、今回まんまと姿を現した。

さつき夢乃が言っていた「動いた」って、彼女が出てきたって意味だな。

なんだ！　今回全然、心配していた裏の世界とも関係ないし。

ジプシーの交際の断り方は酷くて、それがあある意味問題だけでも、これで一件落着じゃん！

その日の午前中の授業は、ややざわめいていたけれども、いたって何事も無く過ぎていった。職員室には、今朝の騒ぎは伝わっていないという事らしい。

ジプシーも普段と変わらない態度で授業を受けている。……動揺はないんだ。

チャイムが鳴って昼休みに入ると、私はお弁当を持って、さつさといつもの自習室へ向かった。普段からジプシーに目をつけている位だ。ひよっとすると、騒ぎを聞きつけた生徒会長あたりが、ここぞとばかりに冷やかしゃ糾弾に来ないとも限らない。

同じところに向かうので、廊下を歩いていると、先に歩いていた夢乃と並んだ。自習室に着くと、ちょうど扉を開けようとしていたジプシーにも出会った。

「ビンゴだビンゴ！ まあ、見てみるって！」

扉を開いた瞬間、部屋の奥で既に机を寄せて、何やら資料を見ていたらしい京一郎が、私達を見て嬉しそうな声を上げた。この男は、午前中の授業をサボって何してたんだろう？

早速近づいて、京一郎の差し出した一枚の写真を見る。……これ、土曜日のおとりデートの時の写真だ。

「……高橋麗香さん、写ってる！」

「そう！ しかも時間的に、ちょうどジプシーがメールを送ってきた時、この道を男の取り巻き三人連れて歩いている」

へえ〜！ やってみるもんだね。これで体を張ったあのデートが無駄じゃなかったって思えるよ。

……なんて言えるかあ！ 思い出しちゃったじゃない、ジプシーのばか！

「あと、俺の憶測を入れない事実報告だけをする。家族構成は、製菓会社の専務の父親、専業主婦の母親、そして彼女の三人家族。先日の土日が彼女の高校の文化祭で、月曜日の今日は代休。朝からここに来られる訳だ。ちょっとだけ雑誌のモデルもしているって話だから事務所も回ってきたが、一応過去の男関係は出なかった。取り巻きとファンっていうのだけ。……これが意外と曲者かもって位かな。でも取り巻きも含めて裏世界とのつながりは今の所全くなし！ 大まかには以上。夢乃とほーりゅうは？」

「似たようなモノね。この様子じゃ、ほーりゅうも同じでしょう」
「うん！ ……なあんだ、明子ちゃんに聞いてきてっつてのは、昼休みにこうやって相談する為の情報収集だったんだあ。って事はさ、まとめると、やっぱりこの高橋さんが、文化祭後からジプシーの後を付け回していたって事で決まりだよな。解決じゃない？」

私は勢い込んでジプシーに向かって言った。でも、それまで席についてから、お弁当に手をつけず、眼を瞑り腕を組んで、皆の話を聞きながら考えていたジプシーは、顔を上げて言った。

「京一郎、お前は百パーセント本当に、ただの彼女のストーカーだと思っているか？」

間を置いて、真剣な顔つきになった京一郎は答えた。

「俺は、今の段階では九十パーセント、一般人女子高生のストーカーだと考えている。残りの十パーセントは……俺の勘で、彼女は一般の女子高生じゃないような気がする」

ジプシーは、頷いた。

「俺も、残りの十パーセントの理由で、敵だと思う」

「何だよ。どうして男二人がそんな事、勘でわかるのさ？」

私は訝しげに聞いた。夢乃も頷く。

「あの女が、自分の眼を見て返事をくれと言った時に」

ジプシーが思い出したかのように、平手打ちを食らった頬をなでながら言った。

「眼で俺に術をかけてきやがった」

チャプター・15 ほーりゅう

「あの女、俺に平手打ちを食らわす前に、信じられないって言った
だろ？」

呆氣にとられている私と夢乃に向かつて、ジプシーは、彼女の戸籍や家系図などの資料に目を通してながら続けた。

「俺が術にかからなかった事を、あの女は信じられないって言ったんだ」

術。

って事は彼女は、裏世界関係の敵じゃなくて、陰陽道関係の敵って事？ とっても可愛い女子高生にしか見えないのに。そんな力があるようには見えなかった。

「京一郎が調べてくれた資料を見る限り、彼女の家や血縁は陰陽道とは係わりがない。ただ、陰陽術の中には知識や力のない素人でも使える、蠱毒や犬神のような術も結構あるから、もう少し調べる必要がある」

「ジプシー、あのさ」

私はどうしても気になったので、話の途中だったけれども聞いてみた。

「彼女、あの一瞬で、どんな術を眼で仕掛けてきたの？ それにジプシーが術にかからなかったって事は、ジプシーの方が陰陽師としての力が上だったって事？」

腕を組みながら、ジプシーは答えた。

「断言できないが、あの状況を考えたら傀儡術か。俺にイエスの返事を出させたかったんだろ。だから彼女の眼を見る前に、俺は自分のかけている眼鏡に防御結界をはった。力や状況判断としては、あの時点では俺の方が上だったな」

「……傀儡術って、何？」

「傀儡術は、簡単に言えば、相手を操り人形のように術者が動かす

ことの出来る術だ」

……彼女、そんな術を使ってまで、ジプシーと付き合いかけたのかな？

恋する乙女は手段を選ばないのか。相手が自分の事を思ってもいないのに、付き合うのもどうかと、私は思っただけれどなあ。

私がおとなしくなったので、ジプシーが京一郎に視線を移した。

「京一郎は、どう思う？」

京一郎の考える、今回の彼女の中の不透明な十パーセント。ジプシーと同意見なのかな。

「ジプシー、おまえさあ」

いつになく真剣な顔で、京一郎がジプシーを見た。

「今回の彼女は、おまえの性格上、敵としかみなしていねえだろ」
「？ ……何が言いたい」

珍しく細部において意見の食い違いが出たのか、京一郎とジプシーの視線がぶつかる。

視線をはずさずに京一郎は言った。

「おまえの中の人間のカテゴリーは、敵か味方が一般人の三つに分かれてんだろ。そりゃま、今回の彼女は敵の部類だろうさ。けれど、俺の考える残りの不透明な十パーセントは、人間としてのカテゴリーとしては、女、だ」

意味が理解できないという顔をして、ジプシーは京一郎を見る。

「まあ当たってりゃ、俺の言いたいことは追々わかるだろうが、俺の勘が外れてりゃ、やり方はいつもの感じでいい。お前にまかせる」
しばらく、無言で二人は見つめていたが、ジプシーが視線を逸らせて言った。

「わかった。考慮に入れておこう。京一郎の勘だからな。ただ、……俺にはただ単に、女と言われてもなあ……」

なんだ？ なんか何故だかジプシー困ってる感じがするぞ。これは面白いかも。

私も今の意味、わかんないけれどさ。

放課後、私と夢乃は甘味処に行こうと、明子ちゃん達から寄り道を誘われた。

もしかしたら、朝の出来事に興味津々の明子ちゃん。私達からジブシーの情報や動向を知りたいのかも。

「相手の片鱗が見えた分、結構精神的に落ち着いている。俺についている必要はないから行って来い」

ジブシーはそう言って、教室で、私と夢乃と別れた。京一郎は、先に教室を出たのか姿が見えない。そう言えば、午前中はバイクで情報集めに走り回ったって言うていたからなあ。普段は歩きで学校に來ている京一郎も、移動手段の変わる今日は別行動になるって事だな。

私と夢乃は、今日に限って皆が別行動だという、この事をあまり深く考えていなかった。

チャプター・16 ジブシー

自宅から俺が通っている高校まで、普通に歩くと三十分程かかる。電車では一駅分。途中バス停もあるが、あえて普段から徒歩で通っている。

いつも途中まで一緒に歩いて帰る京一郎は、今日はバイクだった為、別行動だ。

ほーりゅうと夢乃も、クラスの女子と甘味処に寄ると言っていた。予定もない俺は、ゆっくりと歩いて帰る。

ようやく姿を見せた敵。だが、俺は『敵』と呼んだが、京一郎は『女』と言った。当然性別だけの意味じゃない。俺には京一郎の言葉の意味がよくわかっていないが、普段から勘の良い奴の事だ。何か思い当たる節があるのだろうか。

それと、『敵』である彼女。彼女が首謀者として一人だけなのか、あるいは、複数の仲間がいる組織であれば、どの辺りの立場の人間なのか。確認したいことはまだまだある。

そんな事をつらつら考えながら歩いていると、当の『敵』である高橋麗香が、先の道の壁に寄り掛かり、こちらを見ながら一人で立っていた。

なるほど。確かに、もう姿を隠す必要もないからな。

朝と同じ防御結界になるが、ないよりはましだろう。何度と同じ手が通用するとも思えないが、眼鏡の真ん中を左手の中指で押さえ、真言を唱える。

そして俺は、必要以上に彼女の眼を見ないように、通り過ぎようとした。

「聡君、今朝は頬を叩いたりしてごめんなさい」

彼女はそう言いながら、俺の横に並んで歩き出した。

「付き合いは断ったはずだ。それに、下の名前を呼ばれるのは好きじゃない」

とりあえず突き放す。

「じゃあ、友達が呼んでいるように、私もジプシーって呼んでいいですか」

いきなりあだ名で呼ばれるのも気に入らない。この場合は苗字だろうと思ったが、そう言った事で、この女に苗字を連呼されるのも何故だか気に食わない。無視する事にして、歩調を速める。本当は、敵だかわからない女に背中を見せたくはないところだが、何らかの攻撃をされたら、最初の一撃位、意地でもかわしてやる覚悟で、あえて前を歩く。

「私、文化祭でジプシーを観た時から一目ぼれしちゃったんです。あと、あなたが道で女の子を助けた事、あったでしょう？ あの時も偶然そばで見ていたんです」

……その辺りは、ほーりゆうの予想通りか。へえ、あいつにも女の勘つてのがあったんだ。

「何度か、学校帰りに待ち伏せしちゃったんです。遠目からでも会いたいなって。……まだ私がどんな女の子かも知らないでしょう？ 話だけでもしませんか？」

俺は無言を通す。話をする気が起こらない。本当は、この機会に何かしら情報を引き出すべきなんだろうが。

何故だろう？ 俺の本能が、彼女の話の話を拒絶するように警告している。

「やっぱり、彼女がいるんですね。……私は自分の学校の文化祭帰りだったんですけど、土曜日モジプシーをみかけたんです。女の子と二人で一緒にいる所を。普通、彼女じゃない人とキスしないですよね」

やけに手の内を明かすようにしゃべってくる。何が目的だ。

いや、それ以上に、俺は彼女の声を、これ以上聞きたくもなかった。

俺の中の本能がひっきりなしに、この彼女の話をやめさせるように警告してくる。

突然、この警告の意味に思い当たった。

だが、その時にはもう、彼女は術を発動していた。

「ジプシー。私を見なさい」

俺は言われた通りに足を止め、後ろから袖をつかんだ彼女の方へ、ゆっくりと振り向いていた。

……この女！

眼だけではなく、声でも術を発動できるのか！？

振り返った俺に、彼女は少し背伸びをして、ゆっくり唇を近づけた。

無抵抗の俺に、彼女は瞳を閉じて唇を重ねてくる。

やわらかい唇の感触と、かすかにフローラルの香り。

彼女からの、ゆっくりと何度か角度を変えての、触れ合わせるだけのキス。そんなに長い時間ではなかったはずだ。

突然の爆音に、彼女がびくつと身体を震わせた。

俺と彼女のすぐそばを、後ろから来た黒いオートバイがかすめた。爆音と同時に身体束縛から解放された俺は、通り過ぎざまに放られたフルフェイスヘルメットを掴み、オートバイの後を追って走り出す。彼女が慌てて言葉を発する前に、急ブレーキをかけて止まったオートバイの後ろへ、俺はヘルメットをかぶって飛び乗った。そのまま急発進するオートバイの重力に振り落とされないように、俺は京一郎の腰に腕を回す。

遠ざかる風景を映すミラーの中で一瞬、悔しそうな彼女の顔がよぎった。

チャプター・17 ジブシー

ここは、俺が前の土曜日に、ほーりゅうを連れて来た大きな公園だ。ただ、巨大な遊具が置いてある所ではない、散歩道だけが見える側だった。

京一郎は、公園の囲っている柵ぎりぎりそばにオートバイをつけると、ヘルメットを脱ぐ。俺も京一郎の腰に回していた手を放して、同様にヘルメットを脱いだ。

「公園の中。ベンチがあるだろう？」

京一郎がそう言ったので、俺はオートバイの後ろから降り、公園の低い柵を乗り越え、ベンチに向かう。その間に京一郎は、公園の外に設置されている自動販売機に向かいながら、俺に聞いてきた。

「ホット？　アイス？」

「アイス」

俺の普段飲んでいる銘柄を確認して、二本の缶を手にした京一郎も、同じように柵を跨いで公園に入ってきた。

ベンチにたどり着く途中で俺に一本、ブラックコーヒーを投げてよこす。

「さんきゅ」

そう言いながら受け取り、俺は大きなため息をついた。

「役得役得。ほーりゅうと夢乃には、黙っというてやるって」

そう言いながら、京一郎は俺と並んでベンチに腰をかけた。

「俺が、さっきお前の前に出た理由は二つ」

しばらく黙ってベンチに座り、コーヒーを飲んでいたが、急に京一郎が俺に言った。

「一つ目。いつものお前なら俺にこう言うだろ？　なぜ出てきた、最後まで姿を見せずに彼女のアジトを突き止めるまでやれって。そう言わないお前が本調子に見えなかったからだ」

「ごもつとも。普段の俺ならそう言うだろう。言い返す言葉がない。二つ目の理由。やり方が極端だが、はたから見えていたら、実際彼女は本当にお前の事、好きなんだとは思う。そう思っていないのは、当の本人のお前だけで。彼女が純粋な恋愛感情だけでお前に接近しているなら個人的な事だから、俺が余計な口を出す問題じゃないと思うんだが。……でも何か彼女からは、それ以上のものも感じる」

「だから、あの女が単に、好きだという感情以外で動いているからじゃないのか？」

しばらく考えていた京一郎は、俺に言った。

「お前、恋愛感情まったく抜きでの男女の駆け引きってのは、経験あるだろう？」

「……まあ、それは」

確かに立場上、全く抜きには出来ない。ただ、感情が入らないから、全ては計算尽くで動く。

「だが、相手がここまで……術を使ってまで、感情をぶつけて来ている恋愛、お前は未経験だろ」

「……なぜ、そう思う？」

京一郎はベンチから立ち上がり、公園内に設置されたゴミ箱の中へ、うまく缶を投げ入れる。

それから、俺の方を見て笑った。

「今のお前の中の動揺ってのが、傍から見えてよくわかるから。三年前の俺が似たような経験、したからさ」

俺が今の言葉の意味を考えている間に、京一郎は一人、公園の柵を乗り越える。

「まあ、俺の言う彼女の中の『女』ってのは、そういうこと。感覚的なモノだから、なんて表現すればわかりやすいのかなあ」

そう言って、京一郎はオートバイに跨り、ヘルメットをかぶる。

「まあもうちよっと、彼女を『敵』としてただけではなく、別の角度から見てみるよ。何か見えてくるかもしれねえからさ」

そう言って、京一郎はオートバイを発進させた。

京一郎の姿が見えなくなった頃、俺はふと思い当たった。

「……え、三年前……って事は何だ？ 今の俺の恋愛経験値って、京一郎の中一レベルって事か？ ……マジかよ！」

俺は、がっくりとベンチに崩れた。

チャプター・18 ほーりゅう

夢乃の家まで帰って来たら、もう外は薄暗くなってきた。

今日も夢乃の家で、夕食をご馳走してもらっちゃう。外科医の私の叔母、仕事が忙しいからなあ。一緒に食べる機会があまりない。

外から帰って来て、夢乃の部屋へ入る前に、ふと奥のジプシーの部屋の扉に眼が行った。学校の授業が終わり教室で別れた後、まだ帰ってきていないみたいだ。もう夜になるのに、どこ、うろついているのかな。

学校の帰りに、明子ちゃん達と甘味処に寄って来たから、私も夢乃もあまり空腹感がない。

夢乃のベッドの上に仰向けに寝転がって、私は気になっていた事を夢乃に聞いた。

「夢乃って、今日の京一郎の話の意味、わかった？」

残念ながら、私はやっぱり理解力がないのかな。はつきりと意味わかんなかった。

「そうね。私の考えだけけど」

夢乃は制服の上着を脱いで、ハンガーにかけながら言った。

「要は、恋は盲目って事じゃない？ 好きになったら、その人しか目に入らない。起こす行動もその人中心になるでしょう。でも、十六歳の女の子の考え方だから、その相手の為を思っただけじゃなくて、逆に相手の迷惑を考えずに自分の欲望を満たす為の行動をとるかもそこが今回問題だって京一郎は言っているんじゃないかな」

「ふうん。京一郎って、そんなに女の子の恋心に詳しい奴だとは思わなかったな。……自分の為にかあ」

ジプシーへ告白する為に、知らない学校の教室まで乗り込んで来た彼女。恋は盲目、相手のいやな面が見えないばかりか、周りも見えないって事か。恋する乙女は怖いなあ。

恋する乙女、その辺りが京一郎の言っていた、気をつけないといけない感覚的な彼女の「女」の部分かな。

あっさりジプシーは付き合いを断ったけれど、当然彼女はこのまま諦めないだろうな。

「今回の事件で、ジプシーと京一郎って、かなり考え方が違うんだ」「京一郎はともかく、ジプシーは私の知っている限り、今のところ恋愛に興味がないみたいだから。文化祭後にもらった沢山のラブレター、未だに全部未開封で部屋に積んであったわよ」

ジプシー、もらったラブレターを全然読んでいないなんて。相変わらず、女の子を無下にする奴だなあ。

なんて考えながら、私は廊下に出てお手洗いに向かう。廊下を歩いていると、偶然目の前にあった電話台の上で電話がなったので、夢乃の家の物だけれど、出た。

「もしもし、佐伯です」

うん。ちゃんと苗字を間違えなかったぞ。

でも、相手は何も言わない。携帯か何かで電波でも悪くて、聞こえないのだろうか。

「もしもし？」

もう一度言つと、やっと声が聞こえた。

『俺』

この家で、俺という奴はジプシーしかない。

「どこで何やってんの？ もう遅いから夢乃もお母さんも心配するよ」

声が小さくて聞き取れない。

「何？ もう一度言つてよ」

何か様子がおかしいかも。もともと感情表現の薄い奴だが、いつもと感じが違う。

ようやく電話の向こうから聞こえた言葉。

『悪い、学校に戻ってきてくれ。夢乃も、お前も』

そこで、電話は一方的に切れた。
私は受話器を握ったまま、途方にくれる。

「ほーりゅう、電話は誰から？」

夢乃が部屋から出てきて、声をかけてきた。
私は受話器を戻しながら、そのまま伝える。

「なんか、いつものジプシーじゃないなあ」

ちよつと考えた夢乃は、私に言った。

「何か理由があるからだろうね。今から学校に戻ろうか。外はもう暗いけれども、二人そろってなら大丈夫だろうし」

私は頷きながら言った。

「あ、でも夢乃のお母さんに何て言う？ 黙って出ちゃう？ それとも忘れ物を取りに行くとか。あんまり心配かけたくないよねえ」

夢乃は、母親のいるキッチンに向かいながら言った。

「どんな事でも嘘は言わずに全部話すって約束。そういう条件でジプシーの手伝いをお母さんから許してもらっているから、はっきりジプシーと呼ばれて学校に行くって言ってくるね」

……そっか。そうだよな。考えたら夢乃は一人娘なんだもん。親は心配するよね。

海外にいる私の両親、普段は電話も何も、私から殆どしていないけれども、心配しているかなあ。叔母からの連絡は絶えずしていると思うけれど。

そして、後で、つくづく思ったよ。

お出かけする時は、ちゃんと家の人に、目的や行き先を言ってから出かけるべきだなんて。

チャプター・19 ジブシー

すっかり日の暮れた頃、家に帰り着くと、玄関先で夢乃のお母さんに言われた。

「あら？ さつき学校で待ち合わせだって電話してきたんでしょう？ 夢乃とほーりゅうちゃん、もう学校に向かっているわよ」

一瞬で血の気が引いた。

そして動揺が顔に出ないように、俺は普段通り無表情で穏やかに言った。

「あれ、うまく伝言が伝わってなかったんだな。すれ違いになったみたいだ。鞆を置いたら、二人を迎えに行つてきます」

俺は足早に階段を上がり、自分の部屋に向かう。

あの女、ほーりゅうと夢乃に矛先を向けた。

俺の名前で二人を呼び出しやがった。

怒りがあるが、ありがたいことに、俺はかえって、今の一瞬で頭も冷えた。

今回は最初から後手に回ったせいかな、消極気味で調子も狂った。

今も向こうの方が行動が素早い。この様子なら、俺が動かなかった数日間よりも前から、もしかしたら文化祭の直後から全て考え下準備をしていた可能性もある。

まだ正体の不確かな相手だが。

この道で生きると決めたプロの意地をみせてやる。

先に夢乃の部屋の扉を開けて、机の上を見た。やっぱり普段の俺と同じで、学校へは携帯を持たずに出かけている。

俺は自分の部屋に入り、上着を脱ぎながら、俺の携帯から京一郎

の携帯にかける。

『おう』

三回のコールで出る。

「京一郎、今どこだ」

『家』

「すぐに学校へ出て来られるか」

一瞬考える様子が伝わってきたが、返ってくる言葉は簡潔だ。

『單車なら五分』

「OK。少し前に夢乃とほーりゆうが学校へ向かった。途中で会えばその場で足止めして俺の携帯に連絡。会わなければ高校裏門で俺と合流。俺も用意が出来次第向かう」

『了解』

電話が切れる。

相手の確かな能力がまだ確認出来ていないので、念の為に俺は、すばやくホルスターを脇に吊る。

多分陰陽道関係の術だと踏んだのだが、彼女の術の使い方が、まず俺とは違う。俺は正式な修行過程を行っていない為か、真言や印契や陣・梵字や独鈷のような媒体を使わなければ、スムーズな術の発動が行えない。

従兄弟のトラは陰陽道直系だが、奴はどんな術や技の使い方をしていただろうか。

あるいは、今回の彼女は陰陽道の術ではなく、例えば、ほーりゅうや……我龍のような別の力なのだろうか。

シリンダーの中の弾丸チェックをしてホルスターに戻した。半分はお守り代わりの意味もあるリボルバー。使わないに越したことはないが。

上着を着直し、左袖に隠し武器として独鈷を持った俺は、階段を駆け下りる。

裏門で、京一郎が一人で待っていた。

「あいつらの通りそんな道と高校の周りを回ってきたが、いないな。もう学校に入ったんじゃないかねえか？」

「校内か」

そう言っただけ俺は校舎を見上げた。十分に日が落ちて、静寂と暗闇の中で妙に壁が白く浮かび上がる学校。

見上げている俺の顔を、京一郎は見つめる。

俺は、京一郎に視線を走らせて言った。

「大丈夫。充分頭の芯まで冷えている。今から、こちらのペースに巻き返す」

そして携帯を取り出し、音を消してバイブ機能のみに切り替える。

「部活の生徒は、もういない時間帯だな。式神召喚の陣を描くより二手に分かれて探した方がはやい」

京一郎も頷く。

俺と京一郎は裏門を通り、京一郎は生徒棟へ、俺は職員室棟へと、足音を消して走った。

チャプター・20 ほーりゅう

「ほーりゅう、詳しい待ち合わせ場所、電話の時に聞かなかったの？」

下校時間とはつくに過ぎている為、生徒の姿のない暗い校内は、昼とは違う雰囲気をかもし出す。

静か過ぎて妙に響く空間の為、夢乃にそう聞かれた私は、さすがに声をひそめて言った。

「学校へ来てくれてただけだったよ。前にここで待ち合わせた事あるし、てっきり同じ場所がいいんだと思ったしさあ」

二日前の土曜日に、ジプシーと待ち合わせをした生徒棟一階の階段下で、私と夢乃は立ち尽くす。

ここから眺める事の出来るテニスコートは、土曜日はクラブの交流試合があつたせいか賑やかだったのに、今はひっそりとして人影がない。

「でも、多分待っているはずのジプシーがいないって事は、この場所じゃないって事よね。……教室かしら？」

「今日、最後に別れたのが教室だもんね。そうかも」

私と夢乃は階段を上がり、四階にある一年の教室へ向かう。

教室には、鍵がかかっていた。

「当然と言えば当然か。たいてい私が毎朝職員室へ、鍵を取りに行くものねえ」

夢乃がつぶやいた。私は思いついて言う。

「鍵がかかっているって事は、ここでもないよねえ。それじゃあ、お昼にお弁当を食べてる自習室かなあ？ 色々打ち合わせて、よくそこでしているしさ」

そう言いながらも私は、廊下から窓にはり付き、教室内に動くモノがないか、目を凝らす。

その時、耳が、音を捉えた。

「……夢乃、ピアノの音が聴こえる」

夢乃も頷いた。夢乃は、神経を集中させるように俯いて呟く。

「多分音楽室からだよね。……それに、この曲、聴いた事がある」

そのまま耳を傾けていた夢乃が、はっとした。

「この曲！ 私、初めの十六小節ほどだけれど、昔、小学生の頃にピアノの練習曲として弾いた事がある！」

口を押さえて、そう言った夢乃に、私は聞いた。

「何？ そんなに驚くような曲なの？ どんな曲？」

夢乃は、小さな声だけれども、はっきりと言った。

「リヒナー作曲の『ジプシーダンス』」

ジプシーに呼び出された学校で聞こえるピアノ曲・『ジプシーダンス』。

私は妙な胸騒ぎを覚えた。

「……これって、もしかしてジプシーが弾いているの？」

「ん〜。ジプシーはピアノを弾けるけれども、この曲を知っているかどうかは、わからないなあ」

「え？ 本当にジプシー、今聴こえている曲のレベルは弾ける訳？」

本当に、何でも出来る奴なんだ。

半分は冗談で言ったのに。

「そうね。最近は殆どピアノに触っていないみたいだけれど。一期は一年位続けて、『幻想即興曲』ばかり練習しているのを聴いた事ある。基礎は習っていたみたいだけれど……なんて言うか、その後は我流で練習を続けていたみたいだから。弾き方は結構荒っぽかった気がするな」

「……『幻想即興曲』。夢乃、私、その曲も知らないかも」

「多分聴いたら、何処かで耳にした事のある曲だと思うけれどね。」

……どうする？ 音楽室まで行ってみようか」

「うん。何となくだけれど、無関係って感じがしないもんね」

そう言っ、私と夢乃は音楽室のある方へ身体を向けた時、周囲を複数の人影に囲まれている事に気がついた。

「え？」

私は一瞬、状況が把握できなかった。

下校時間の過ぎた暗い校内で、数人に囲まれるって。

……もしかして、これって、とってもまずい状況？

チャプター・21 夢乃

……あの電話、偽の呼び出しだったんだ！

私は、その事に気が付くのが、遅かった。

最近のジプシーの様子が今までと違っていたから、何となく電話に疑いを持たなかった。普通に考えたら、あんな電話をかけてくる人じゃない。

啞然としているほーりゅう。まだ何が起こったのか理解出来ていないかもしれない彼女と私は、顔の識別がはっきりしない位の暗闇の中、学校の廊下で五人の男子生徒に囲まれていた。

それでも、窓から入る街のわずかな明かりで、私は五人の顔をチエックする。確か全員、ウチの高校の運動部所属の一、二年。なんとなく見覚えがある。所属の部はばらばらだ。部活が終わった後に下校せず残ったのか、それとも部活をせずに残ったのか、全員ユニホームではなく制服を着ている。だが、その中の一人は剣道の竹刀を持っていた。

まずい。

「ほーりゅう、逃げて」

私は彼女を背にかばって言った。

「え？ 何で？」

ほーりゅうは聞き返す。……ここで、ほーりゅうに天然ボケを發揮されても困るので、簡潔にはつきり言う。

「ここに、この学校に今、ジプシーはいないわ。偽の呼び出しだったのよ。そして私達二人共そろって捕まる訳にはいかない。私が彼らの注意を引き付けている間に、用務員でも警備員でも外の人間でも誰でもいいから、助けを呼んで。早く！」

「あ……私も戦う！ だって私には」

私は連中の動きに注意を払いながら、ほーりゅうの肩を押して言

った。

「行きなさい！　ここで貴女の力が暴走したら、多分私には止められない。文化祭の時のような偶然は起こらないんだから！　出来る限り相手にも怪我をさせたくないでしょう？」

ほーりゅうはあの時の出来事を思い出したらしい。ゆっくりと後ずさりする。

「夢乃、ごめん！　頑張つて助けを呼んでくる！」

そう言つてダッシュしたほーりゅうの後を、三人が追いかけるようする。

その足元へすばやく身を落として、円を描くように私は足払いをかけた。二人はひっかかってくれたが、僅かに遠くの一人には届かない。しまった！

ほーりゅうは、音楽室とは逆の正門の方向へ廊下を走つて行き壁に突き当たると、曲がつて三階へ降りる階段へと姿を消した。追つて行つた男も一人、同じように消えていく。

ほーりゅうと男が消えた方向を背に、倒れた二人がゆっくり起き上がり、私の方に向いた。

私は、昼休みの時に聞いた、ジプシーの言葉を思い出す。

この連中の、次の行動を起こす時の緩慢な動きは、裏で操り人形のように術者が動かすという傀儡術の為に違いない。ならば、おそらく彼女・高橋麗香の仕業。

いつもジプシーの近くにいる私とほーりゅうが、目ざわりつて事ね。

追つ手を一人取り逃がしてしまつたけれど、無事に、ほーりゅうは逃げ切れるだろうか。

そう考えながら、私は自分の置かれた状況を確認する。もうほーりゅうの事は、ほーりゅう自身に任せるしかない。

四人に囲まれた形で、私は両手の五指を広げ、ゆっくり半身にな

り基本の構えをとる。

私は自分の合気道の実力を充分に知っている。この四人を倒せるとは思っていない。せいぜい四〇五分の足止めが限度。それでもほーりゆうが逃げ切れる時間稼ぎになれば。

今から、道場での練習じゃない。

私は、ジプシーから教えられた通り実戦向けに、基本の構えからさらに腰を落としつつ、両手の手刀を高めに構えた。

チャプター・22 ほーりゅう

明かりのない静寂の中、遠くで一際響くピアノの音を聴きながら、私は学校の廊下を走る。

助けを呼ばなきゃ！

この場合、職員室へ行けばいいんだろうか？ それとも学校を出て外へ？

とりあえず、一階まで降りちゃおう。

夢乃が他の男達を引き付けてくれている間に、早く助けを呼ばなくちゃ！

私は四階の廊下の端まで走って来た後、三階へ向かう階段を駆け下りた。

その途中の踊り場で、追いついてきた一人の男に、後ろから二の腕をつかまれる。

「やあだ！ 放して！」

私は思い切り腕を振って、逃れようとした。

他に助けしてくれる人のいない、一人きりで味わう恐怖。

そう思った途端に私は、自分の周りの空気が変わるのを感じた。

……！

やばい。

これは私の、制御できない超能力発動の前に起こる感覚だ。

先ほど夢乃に言われた言葉で、前の文化祭の一件を思い出す。

ここは学校内の、三階と四階の間の狭い踊り場だ。だだっ広い外ではなく、さらに地上一階じゃない。この男を、今ここで私の超能力で吹っ飛ばしたら、下手をすれば大怪我させてしまうかも。それじゃあ、前の文化祭の時の二の舞だ。

文化祭の時には、暴走した私の力を、偶然にも居合わせたらしい

我龍が惨事にならないように助けてくれた。今、こんな時間にこんな所で、助けてくれる人がいる訳がない。我龍もジプシーもいない。ここでは私一人だけ。

どの位の規模でどう発動するかわからない超能力を、今ここで出す訳にはいかない。

そう言えばジプシーが文化祭の舞台の後で言っていた。私に向けられる攻撃や殺気が大きくなると、比例して私の力も大きくなる可能性があるみたいなさ。だから、私は一生懸命、能力発動の原因にもなる恐怖心をなくそうとした。

能力が出ても、出来るだけ被害を少なくしないと！

そして私は、めちゃくちゃに腕を振って、つかんだ男の手を振り切ろうと暴れる。

だが、男の力は強く、逆に私は踊り場の床に引きずり倒された。

このまま押さえ込まれたら、多分無事じゃすまない。

まだ自由だった足で、必死に男を蹴り上げた。何度か蹴った足が、男の向こうずねにでも当たったらしい。男の手の力が緩んだ瞬間に、私は這い出し、立ち上がって下り階段に向かい、駆け下りようとした。

その時、後ろから足首をつかまれ、再び私は両手を床について倒れた。

限界だ。

首から下げているロザリオの中の石が、きっと光を放っているに違いない。制服の上から握り締めた感覚が、いつもより熱を持っているのを感じた。

ここまでできたら、自分ではもう止められない。

私の周りの空気が一変、不穏な風を巻き起こし出し、内側から一気に噴き出す感覚を覚えた。

私をつかんでいた男の身体が宙に浮き、目の前で階段下の三階へ吹き飛ばされる。同時に起こった周囲の空気が渦を巻き、踊り場の窓を全て内側から割っていった。

吹き飛ばした男へ、怪我をさせたくないと反射的に手を伸ばした私は、だが手が届くどころか自分がバランスを崩し、階段上から転がり落ちてしまった。

高い所から落ちるのではなく、もともと倒れた状態から階段を転がったので、比較的ぶつける事もなく、ごろごろと三階まで横に転がり落ちる。

それでも、最後の最後で、床に頭を打ったらしい。

これが、星が飛ぶって言う状態なんだあ。

私は、三階の暗闇の中へのびる廊下に倒れている男と、目の奥にチカチカとする明るい点滅を見ながら、意識が暗闇に落ちていった。

チャプター・23 ジブシー

いない。

ほーりゅうと夢乃の二人がいるのは校舎のこちらではなく、京一郎の向かった生徒棟の方が。

俺は、電気の消えた職員室棟のそれぞれの階の廊下を確認しながら、一気に階段を四階まで駆け上がる。そして、四階から各教室の中を窓からチェックしつつ廊下を突っ切り、三階、二階と降りてきた。

一階の職員室前では、さすがに走るのをやめ、静かに廊下側の窓から様子を伺う。

うちの高校は、結構下校時間などにはうるさい。なので下校時間をとつくに過ぎた今、職員室の中にも教師の姿はない。

となると、この時間で学校内にいるのは、夜間の見回りの為に別の部屋で待機しているであろう用務員か警備員位か。

俺は、生徒棟に移動する事にして、一階の渡り廊下の方へ向かう。そして、渡り廊下を通ろうとして、音に気がついた。

これは、……ピアノだ。

聴いた事がない。知らない曲。

音楽室は、生徒棟の四階の一番端で、ここからは最も遠い場所だ。俺は渡り廊下の手すりに手を掛け、身体を乗り出して音楽室を仰ぎ見た。

暗い夜空を背景に、白い校舎の角に位置する音楽室が浮かび上がり、その窓が黒く開いているのが見えた。それでピアノの音が外にもれ聴こえているのか。

この時間にピアノ練習とは、普通にありえない。今回の呼び出し

に無関係ではないだろう。

俺は音楽室に行く気で、生徒棟への入り口の方向に顔を向けた。そして、前方に複数の影を見つける。

空手部の一年が二人。二人とも隣のクラスの男で顔は知っているが、俺はどちらとも話をした事は一度もない。そして別の一人は、サッカー部のキーパーをしている二年。こちらも顔を知っているのだが、資料上では彼は確か、類を見ない程の部活熱心な男のはず。そして、野球部の一年が二人。こちら二人は別々の違うクラスのはずだ。まだ野球部内でも補欠で、全くやる気の見られない連中だったはず。こちらの二人とも俺は話をした事がない。

そんな五人が渡り廊下の、生徒棟の入り口に背を向け、ふさぐ様に立っていた。

まず、気配がなかった。

俺とした事が、すぐに気がつかなかったとは迂闊だったが、連中の様子が尋常ではない為か。この存在感のない連中の様子からみて彼女・高橋麗香の仕業、傀儡術とみて間違いないだろう。この複数を同時に操るとなると……今聴こえてくるピアノ音が術を発動しているって事か。

現状の問題は、操られているこいつらを、果たして叩きのめして良いのだろうか。俺が、同じ学校内で顔を知っている連中なだけに、そう躊躇する事を見越してこの連中を使ったとしたら、あの女、結構いい性格をしていやがる。

俺は、出来るだけ怪我を負わず、戦闘不能にさせる程度にとどめるつもりで構えた。

親しい間柄でもないだろうに、連中は申し合わせたように、無言でタイミングよく殴りかかってきた。空手部の二人の構えと攻撃は確かに隙がない。主将をしている生徒会長の教えが良いのだろう。

その二人の動きをメインに、俺はとりあえず全ての攻撃を避けながら、様子を伺う。そして、野球部の一人の大きな隙をかくぐつて、そいつの鳩尾に手加減しつつ足刀蹴を蹴り込んだ。廊下を軽く吹っ飛んだ後、起き上がる気配がない。……操られているって事は、そのうち、ゾンビのように起き上がってくるかもしれない。油断は出来ないって事だが。

まず、一人。

その時、目の前に残り四人がいるはずなのに、背に殺気を感じた。頭で判断する前に、反応した身体がとっさに前受身をし、俺の立ち位置を変える。

そして相対した先で、どう見ても怒り心頭の生徒会長が、空振りで蹴り終わった片足を宙に浮かせたまま、俺を睨みつけていた。

「……江沼、また貴様か！」

「な……足立先輩！ 何故ここに」

そう言った途端、一瞬の隙が出来た俺は、四人の中のサッカー部の二年に右手首をつかまれていた。つかまれたと同時に俺は、反射的に身体が動き、つかんでいた彼の右上膊の裏の急所を蹴り上げていた。

しまった！ 折れていなけりゃいいが。

それでも、手を放したが痛さを感じてはいないような表情の顎に、俺は左の拳を手加減して叩き込んだ。頼むから、これで脳震盪でも起こして意識を失ってくれ。

その直後、俺は左の横三枚に激痛を感じた。

思わず脇腹を押さえて片膝が床についた俺を、会長が拳を引きながら構えなおし、冷ややかに見下ろしていた。

チャプター・24 ジブシー

激痛の為に片膝をついている俺を見下ろしながら、生徒会長は居丈高に言った。

「今日も朝から騒ぎを起こしてくれたようだな。昼休みに詰問に行けば、貴様は逃げた後だ。さて、俺は生徒会室で仕事をしていた為に、この場に偶然居合わせたのだが。丁度いい。今からたつぷりと事情を聞かせてもらおうか」

……会長のこの様子では、彼女の傀儡術にはかかっていないようだ。まさか自分の意思で高橋麗香に協力している訳でもないだろう。会長がこの場にいるのは本当に偶然か。

俺は痛む横腹を押さえながら、ゆっくり立ち上がった。

高橋麗香に操られている三人は、仲間の二人が倒された事がわかっていいのか、俺と会長から距離をとって、様子を見ているようだ。……口は聞けないらしい連中だが、状況判断は出来ているのか？

不意に、俺の耳は遠くの音を捉えた。目の前の会長の表情は変わらないから、彼には聞こえていないようだ。……これは、ガラスの割れる音。状況やタイミングからみて、恐らく割ったのは、ほーりゆうに違いない。あの音の位置は、やはり生徒棟だ。

俺は三人の連中の動きを眼の端で捉えながら、会長に言った。

「足立先輩、話は、とりあえずこの状況から抜けた後で」

そんな俺の言葉には聞く耳を持たない様子で、会長は言った。

「この乱闘も、貴様が原因なんだろう？」

俺をつかもうとする会長の手から、俺は身体を退いて逃れる。

どうやら、逆らったと感じたらしい会長は、本気で一度、俺を叩き伏せる気になったのが、その表情から読み取れた。

まずい。

高橋麗香に操られた三人とは別口で、空手の実力がある会長も相

手か。

今、手加減をすれば、俺がやられる。

上段中段と正拳での連続攻撃を、さすがに体捌きだけではかわし切れずに上受下受と払いつつ、俺は後ろにさがって防御間合いを取る。その間合いを予想していたらしい会長の右の廻蹴が飛んできた所を、あえて俺もタイミングを合わせ、更に左足を退きつつ右の廻蹴の前足底で、会長の蹴りを真っ向からはじき返した。狙った俺の方の力が強かったらしく、不意を突かれた会長の軸足がよろめく。

すかさず俺は攻撃間合いまで踏み込んで、体重を乗せた左の外腕刀で会長の胸を狙い、壁際まで押し飛ばした。背を壁にぶつけた會長へ更に踏み込み、反撃を許さぬ一瞬の間で、はじき飛ばした会長の喉仏を壁に向かって動かぬ様に外腕刀で押し付ける。

そして俺は、右手の人差し指と中指の二本を立て、会長の両眼に突き立てようとして。

あと五センチの所で、止めた。

その体勢のまま、俺は容赦ない眼光で会長の顔を凝視しつつ言った。

「先輩。話は、後にしてもらえますか？ 出来る説明はしますから」眼を見開いたまま、驚愕の表情で俺を見る。俺の本気が伝わったか。

だが、会長からの返事を聞く前に、俺は気配を感じて、会長の身体を横に突き飛ばし、俺自身も身を沈めた。

俺の頭のあった空間に、うなりを上げるような勢いで蹴りが宙を舞う。

高橋麗香の操っている、空手部の一人の裏蹴りだった。

息をつきながら喉もとを押さえ、ようやく会長は、俺以外の三人

に眼を向けた。そして、初めて気がついた様に言った。

「……一年の岩崎？ それと平野か！ 貴様ら、今日の練習に出て来ないで、何をやっている！」

「先輩、今の連中は、何を言っても聞こえませんよ」

俺は、対峙している空手部の主将と後輩達に向かって、声をかけた。

ようやく会長も、この異常な事態が飲み込めてきたようだ。

邪魔者は排除という術をかけられているのか、空手部後輩二人が勝てるはずもない主将である会長に向かって構えようとした。

その途端、情け容赦のない会長の蹴りが飛んだ。しかも、野球部の一人も巻き添えて、三人共に。

瞬く間に三人が床に倒れ、俺は呆氣にとられた。瞬殺。想像以上の速さと力だ。

先程の俺が優勢だった闘いは、もしかしたら偶然なのかとも思わせる位に、鮮やかな足技だった。しかし、この手加減なしの攻撃、三人共、大丈夫なのだろうか。

……ああ、なるほど。今回、俺に負けたと思った会長が、憂さ晴らしか八つ当たりで、この三人に当たったと言う可能性もあるか。この会長なら、やりかねない。

そう考えつつ傍観していたら、会長が俺の方を振り向いて言った。「やはり、貴様が揉め事の原因か！」

……いや、だから会長、人の話を聞けって。

息が切れてきた。

やはり武道を少しやっていた程度の私一人の力では、この四人の男子を倒すのは無理だ。こうやって逃げ回って時間を稼ぐのが精一杯。

助けを呼びに行ったはずのほーりゅうの安否が一瞬頭をよぎった時、遠くでガラスの割れるような音が聞こえた。まさか、ほーりゅうの力が暴走？ でも確かめるすべと余裕がない。

ジプシーと京一郎の動きを、私は普段から間近で見ている。その二人の速さに眼が慣れていている為に、今、この男達の動きは、難なく見切る事は出来る。でも、そろそろ限界。さすがに、よけ続ける私の体力が続かなくなってきた。

動きが若干緩慢でも、そこはやはり男子。一突一蹴の重さが違う。殴りかかって来るのを体捌きで避け、つかみかかって来るのを払っているだけで、足がもつれて来た。

その時に一人が、持っている竹刀を横になぎ払い、よけた私の肩をかすめた。よろめいて床に片膝がつく。思わず近くの壁に片手を付いて、それ以上倒れないように身体を支えた。

一瞬、集中力が途切れる。そして気配を感じて、はっと仰ぎ見ると、男は竹刀を構えなおし、私に向かって振り上げていた。

やられる。

私は恐怖心があったが、受ける攻撃を確かめる為に、男から視線をそらさず、防げるとは思わなかったが両手を上げ、頭上で交差し、十字受の体勢を取った。

男から視線をそらさなかったから。

竹刀を振り上げている男の背後で、さらに高く、空中に躍る影を見た。

男の背後で空中に舞った京一郎の廻蹴が、男の側頭部を後ろから綺麗に捕らえて、反対の壁まで吹っ飛ばした。

「夢乃、大丈夫か！」

足音なく身軽に降り立った京一郎は、男の取り落とした竹刀を拾いながら、私に声をかける。安堵の為に、私は思わずその場に座り込んだ。

「あれ？ ほーりゅうは？ 一緒じゃねえのか？」

「そうだ、ほーりゅう！」

「助けを呼ぶ為にも二手に分かれたのよ。でも、さっきガラスの割れる音がして」

「ガラス？ 俺、向こうの階段で上がってきたから、場所的に聞こえなかったのかな？」

「ほーりゅう、多分職員室に向かったと思う」

「職員室。なら、向こうから回っているジプシーと合流できるだろう」

「そう言いながら、京一郎は残りの連中に向かって、竹刀を構えた。」

「京一郎、やり過ぎないで」

私の言葉に、京一郎は嬉しそうに言った。

「わかってるって。俺は素手より竹刀の方が、加減がきくんだよ。ちゃんと外傷を負わず、跡形を残さないようにやってやるからさ」

「京一郎！」

「冗談冗談」

「そう言っ、京一郎は真剣な表情になり、倒すべき相手を見据えた。」

チャプター・26 ジブシー

「やはり、貴様のせいじゃないか！」

俺からの大まかな説明を聞いた後、生徒会長はそう言った。

だが、口先ではそう言いながらも、何故か楽しそうに会長は続ける。

「しかし、まあ、なんだな。女に言い寄られてなんぞ、贅沢な悩みじゃないか。しかも俺の可愛い空手部の後輩を操って、自分に振り向かない貴様を襲わせるとはな。なかなか侮れない女だ」

俺が高橋麗香にまわりつかれている事と、あと、事実として見られているので彼女が傀儡術で人を操れる事を話した。俺はもしかしたら、会長に格好の話の種を提供してしまったのだろうか。だが、今回の場合は仕方がない。

俺は会長に説明しつつ、倒した五人の状態をすばやく確認する。そしてようやく、生徒棟への渡り廊下を抜ける。当然のように会長はついてきた。

ただ、ついてくるどころか、何かやる気満々の雰囲気までする。この会長は、結局お祭り好きなんだ。

確か、さっきガラスの割れる音が聞こえたのは、音楽室の方ではなく、こちら側の角度だったはず。そう思いながら、俺は一番正門に近い階段のそばまで来て、立ち止まる。相変わらず、ピアノの音が途切れ途切れだが聞こえてくる。現在の彼女の術発動の源。

俺の勘が、引かなかった。静かに神経を研ぎ澄ます。
「どうした？」

立ち止まった俺を見ながら、会長は歩を進め、階段の一番下の段に足をかける。

「この上、四階の奥の音楽室に向かうんだろう？」
そう言った会長が、何か気配を感じたかのように、不意に上を見

上げた。

正門に近いこの階段は、四階まで吹き抜けの構造になっている。眼を凝らすように、その空間を見つめる会長。その動作を俺は見ている。

「……何か、上で光っている物が」

会長は最後まで言えずに、硬直して眼を見開く。

人間は、上から落ちて来る物から、反射的に避ける事が出来ない。反応出来て、せいぜいしゃがみ込む位だ。

俺の眼が会長の言う光るものを捉える前に、吹き抜けの上に向かってリボルバーを抜いた。重力も乗って加速するものを確認してから構えたのでは遅い。

轟音が三度、狭い建物の中で大きく響いた。

すばやくホルスターに戻したが、俺は自分に注がれる会長の視線を感じた。今回は人命優先。見られてしまったものは仕方がない。

三発とも手ごたえがあった。多分飛び散ったであろう、かけらの確認をする為に、俺は階段の周囲に眼を走らせる。

だが。

見当たらない。確かに、リボルバーを上に向けた後、光るナイフが包丁を三つ確認し、命中する所まで、俺の眼は対象を捉えていたのだが。いくらマグナム弾とはいえ、跡形なく粉碎する事はない。

轟音と同時に鳴り止んだピアノの音。昼間の京一郎のバイク音で術がとけた事と合わせて、わかった事は、音でかけられた術は、それを上回る音で打ち消せると言う事だ。

静寂の中で腕を組んで考えている俺に、会長が声をかけた。

「おい！ 江沼！」

「先輩、エアガンです」

「……貴様！」

「改造して強力にしたエアガンです」

「……江沼」

「本物じゃありません。エアガンです」

会長は、ため息をついて言った。

「江沼、学校へは不用物を持ってきたら没収する」

「先輩、目の錯覚です。僕は何も持っていません」

何か、もう少しで、彼女の能力の全貌が見えそうなのだが。

俺は、吹き抜けの空間をもう一度見上げてから、階段に足をかけた。

チャプター・27 ほーりゅう

轟音と共に床の振動を感じて、眼が開いた。

ぼんやりと見える学校の天井。私は今、どんな状態なのだろう。徐々に記憶が戻ってくる。そうか、私の超能力が暴走して、結局私、階段から落ちたんだあ。どの位、意識を失っていたんだろう。やだなあ。花も恥らう女子高生が、仰向けに大の字で寝ちゃっていたよ。

私は、ゆっくり身体を起こした。ちよつと、どこか頭の芯で痛むような重い感じがするけれど、身体の怪我はなさそう。よいしょつと立ち上がる。そして、周囲を見渡す。

すっかり暗くなった夜の学校の三階。左隣には私が転がり落ちてきた階段。目の前に、二年生の教室が並ぶ長い廊下が暗闇の中、のびている。その脇に、私を追いかけてきて一緒に階段下まで落ち、意識不明の男子生徒一人。……眼を凝らしてその男子を見ると、ちゃんと胸が上下している。生きているから、ひとまずOKって事で。

私は、このまま職員室に行けば良いかと、下りの階段へ向きかけたが。

殺気を感じた。

突き刺さるような視線。思わず身体が硬直した。

これは、暗闇にのびている、廊下の向こうからだ。

……ここ最近、ジプシーが感じていた殺気って、きっとこんな感じだったんだろう。それが何故、私に今、向いているんだろう？ ゆっくり、視線を感じる廊下の先の方を向いて眼を凝らす。そう言えば、階段から落ちるまで聞こえていたピアノの音が、今は聞こ

えなくなつて、全くの静寂になっている。

その代わりのように、いい香りが漂ってきた。これは、花？
静かな空間の、暗闇の奥。周囲に漂う、爽やかな花の香り。

そして私は、眼で姿を捉えた訳ではないのに、廊下の突き当たりに高橋麗香が立っているのがわかった。

私と夢乃を校内で襲わせたのは、彼女だ。四階の音楽室でピアノを弾いていたのも彼女。弾くのをやめ、音楽室から出てきて、多分すぐそばの階段を下りたら、この三階の廊下の端々で、偶然今、私と向き合う形になった。彼女は、私がジプシーの彼女だと勘違いしている。だから、私に対してこれだけの殺気があるんだ。

そこまで、今、理解が出来た。
で、ここから私、どうすればいい？

一身体彼女の殺気を受け続ける。

私の中の力が、ざわめき始めた。まずい。このまま殺気を受け続ければ、また私の中の超能力が暴走してしまう。このまま行けば、間違いなく彼女に向かって力が放たれる。

でも、突き刺さるような殺気の前に、私は動けなかった。

そして、私の中の緊張感が高まって、もう力が抑えられなくなりそうになった、その時。

不意に、後ろから腕が伸びてきて、私は背後から抱きすくめられた。思わず声を上げそうになった所を、さらに今度は口を手でふさがれる。

恐怖心で力が一気に爆発しかけた時、耳元で声がした。

「俺だ。ほーりゅー」

……ジプシー！

急に安堵感が押し寄せ、私の周りの空気が急速に静まった。私がおとなしくなったのを確認したジプシーは、私の口をふさいでいた手を外しながら言った。

「お前、今、緊張を解いたな？」

「だって！」

「来るぞ」

ジプシーの言葉に、はっと前方を慌ててみる。

そうか、私がジプシーと合流できた安堵感で緊張を解いても、彼女の方の殺気が増しているんだ！

当たり前のようにこの場から逃げようとした私を、さらに後ろから両腕できつく抱きしめるジプシー。動けない。

「何すんのよ！」

「いい機会だ。実戦練習なんて、そうそう願っても出来ない」

「……何ですと！？」

「このまま彼女のPK攻撃、受けるぞ」

チャプター・28 ほーりゅう

私は、我が耳を疑った。

ジプシー、今、何て言った？

無表情のまま、当たり前のようにジプシーは繰り返す。

「彼女のPK攻撃、このまま受けるって言ったんだ」

……それは無理。絶対無理！

私は、背後から抱きすくめるジプシーの両腕から逃れようと暴れた。でも、見た目が細身とは言え、日頃から鍛え抜いている男だ。少しも力が緩む気配がない。

「何も実際に彼女の攻撃を食らえて言っているんじゃない。直前で防御してやるから。力をためる感覚を覚えろって事。ほら、前を向いて」

私は仕方なく前を向く。

うひゃあ、怖いよう。

「ねえ、ちよつと腕がきつい」

「お前、緩めたら逃げる気だろ。前見て集中！」

「ねえ、腕が胸に当たってる。すけべ」

「……前見て集中」

「ねえ」

「前見て集中！ 集中しなかったら防御してやらねえぞ！」

急に前見て集中って言われても。今まででも出来ていたら苦労していないって。

仕方がないので、廊下の奥の暗闇に眼を凝らし、殺気を頼りに、そこに立っているであろう彼女・高橋麗香の気配を探る。

そして、その時、彼女から殺気の塊のような物が放たれたを感じた。

来たよう！

「眼、そらすなよ」

同時に耳元でジプシーがささやく。

恐怖の為、逆に彼女から視線を外せない私を抱きしめていた左腕だけを、ジプシーは不意に緩めて下に振る。

袖口から、仕込み武器の独鉈を手のひらに落とし、親指と薬指、小指で独鉈を握ると前方に突き出して、眼の高さにすばやく五芒星を描き、そのまま手のひらを高橋麗香に向けた。瞬間、大きく見開いた私の眼の前で、彼女の殺気の塊が粉々になって、四方にはじけ飛んだのが、感覚でわかった。

あまりの出来事に、声の出ない私を右腕で固定したまま、ジプシーが言う。

「さっき一度、お前は能力発動を抑えたせいで、今の彼女の攻撃のタイミングには間に合わなかった。やはりお前の超能力は出るのに、数秒のタイムラグがあるな」

そして、考えをまとめるようにつぶやく。

「朝の彼女の視線での術には防御結界が有効だったし、音にはそれ以上の音で掻き消せる。今回のPKも充分結界で防げた。畑違いだが彼女の五感を使つての術は、おそらく俺の陰陽術で、ほぼ対抗出来るって事だ」

……勘の悪い私でも、今のジプシーの言葉の含みに気が付いた。

「まさか、試した？ 防ぎ切れるかどうかかわからないのに、試した？」

「いや、そんな事はない」

「……ワザとらしく私から視線を外しての棒読み、しないでくれる？」

「ほら、ほーりゅう、前。第二弾来るぞ」

ジプシーの言葉に、あわてて前方を見る。と、なにやら先ほど以上の威圧的な気を感じた。

「なんだか、この感じ、さっきの攻撃の数倍は威力がありそうだな」
「そんな！ もうやだよ」

「おい、貴様ら本当に、バカップル炸裂だな」

急に横から聞こえた声に、私はどきりとした。

声の方を見ると、なんと、階段を数段降りた所から見物をしていたらしい生徒会長が、楽しそうにこちらを眺めていた。

「江沼、貴様はわかってやっているんだろう？ わざと貴様らのバカップルぶりを見せ付ける事で、あちらの彼女を挑発して逆上させ、攻撃力を上げるつもりだろう？」

え？

わざと？

私はジプシーの顔を仰ぎ見ると、私に向かってジプシーは満面の笑みで、につこりと微笑み返した。

この男、こんな顔もできるんだあ……なんて見惚れてはいけない。この笑顔は前に散々騙されたフェイク。って事は本当に会長の言う通り、わざとなんだ！

「ほーりゅう、次も能力を出せなかったら、出るまでこの状態で練習」

思った通り、ずっと無表情に戻ったジプシーに言われ、私は顔面蒼白になる。

「ほら、前見て集中。次はお前の能力が発動するぎりぎりまで防御しない」

この男の性格の悪さを考えると、多分ジプシーは本気だ。練習は続くし、本当に防御もしてくれないかも。

ひえ〜ん。

チャプター・29 ほーりゅう

私は仕方なく、自分自身の超能力を発動する為の気持ちを作る。でも、集中するってたって、どうすればいいんだろう？

昔から制御不能な超能力だし。急に使う練習って言われても。

今、向かい合っている彼女・高橋麗香から、敵意むき出しの殺気を浴びている事を思ってみる。

きっかけはそれしかないもんね。

私はジプシーから以前、能力発動の媒体になるって聞いた石が埋め込まれたロザリオを握り締め、彼女の殺気を探る。

集中。集中。

……お？ なんかいい感じかも。内側の、体の奥のさざなみが立って、ざわめく。徐々に総毛立つ気配がしてきた。いつもの能力発動の前兆と似ている。ロザリオの石も、私に反応して熱を持ってきたかも。

このまま行けば、超能力発動できそう。

「OK。そのままの状態ですばらくキープしろ。この状態からなら、力をためるタイムロスなしで攻撃できる」

後ろから私を抱きしめている両腕の力は抜かずに、耳元でジプシーがささやく。

……なんか、それはむずかしいかも。横ばいキープじゃなくて、どんだん力の気配が大きくなって。もう少しで、止めるって急に言われても止まらない位に、中の力が膨れ上がってきているようなやばい。

暴発、暴走しそうな気配。

つまり、発動できるようになっても、結局は力の制御が出来ない

って事じゃん。

ジプシーどうしましょう。マジやばいです。

そう思った時にジプシーが言う。

「能力発動までの感覚は覚えたか？ その感じを忘れないようにして、力を抜いて能力を押さえてみる」

「無理。もう出そう」

「止めろ」

「止まんない」

「止めろ」

「止まんないって」

どこら辺が生徒会長のツボに入っているのか、階段の陰で必死に声を立てないようにして大笑いしている姿が、眼の端に見える。

私達のバカツプルなやりとりが分かったのか、前方にいる彼女の殺気が、一気に高まった。

そして、彼女のPKが先程の数倍の威力を持って、こっちに放たれた気配がした。

来る！

「私も行く！」

「駄目だ。押さえる。今回も俺が防御する」

「だから止まらないんだって！」

そう私が言った途端、ジプシーは後ろから私を抱きしめていた両腕を、急に離れた。同時に私は、そのせいではない別の理由で、両足から力が一気に抜けて崩れ落ち、床に膝がついた。慌てて前に倒れこまないように、両手も床について、私は身体を支える。

自分自身に何が起こったのかわからなくて、私は呆気にとられた。唖然とすると同時に集中も途切れ、周囲から能力発動の気配が掻き消える。

両腕が自由になったジプシーは、左手に独鈷を持ったまま真言を

つぶやくと同時に、両手でいくつかの印契をすばやく結ぶ。そして、先程より数倍の威力のありそうな彼女の力を、今度は四方に碎き飛ばすのではなく、独鉗を握った左手を斜めに振り下ろして跳ね返した。

恐らく、能力者同士の戦いが初めての彼女と違って、場数を踏んで戦い慣れしているジプシーだから出来る、絶妙のタイミング。

一直線に、彼女の方へ力が跳ね返った気配がして、その直後に彼女の気が消えた。

「彼女、逃げたな」

しばらく、そのまま様子を伺っていたジプシーが緊張をとく。それを見計らって、私は叫んだ。

「ひどい！ あの場合で、後ろから膝カッくんはないじゃん！」

そう。ジプシーは膝で、私の膝の後ろを押したんだ。

「一気に拍子抜けしただろ。問題ない」

相変わらずの無表情で、にべもなく答える。

……この、男！ 後ろから羽交い絞めプラス膝カッくん。女の子に対して、そんな恥ずかしい事、普通はしないでしょ。

あまりの事に立ち上がれない私に向かって、ジプシーは言った。

「今の感覚、忘れるな」

「膝カッくんで全部頭から飛んじやったわよ！」

「……もう一度同じ目にあわせてやろうか」

「覚えました。遠慮します」

階段の下から会長の、呼吸困難直前の楽しそうな笑い声が聞こえた。

俺と夢乃は、四階の音楽室に、もう誰もいないのを確認してから、三階へ向かう階段を駆け下りようとした。その時、周囲の空気が震える気配がした。俺と夢乃は無言で顔を見合わせ、一気に降りる。だが、三階には、誰かがいた気配が残っていただけだった。

俺は小声でつぶやく。

「……夢乃、廊下の向こう側、誰がいるよな？」

「もしかして、ほーりゅうとジプシーかも」

俺と夢乃は、警戒しながらも連れ立って廊下を走ると思った通り、ジプシーと、床に座り込んだほーりゅうの姿を見つけた。

「ほーりゅう、合流できて良かった！」

夢乃が嬉しそうに言う。

「どうした、腰でも抜かしたか？」

少々不機嫌そうなほーりゅうに声をかけながら、俺は辺りを見回す。そして、何故かこの場にいる生徒会長と眼が合った。途端に俺の表情が陰しくなったのがわかったのか、会長は面白がるような気配で両手をあげ、俺に向かって言った。

「私は偶然居合わせたオブザーバーだ。気にするな」

確かめるようにジプシーの顔を見た夢乃と俺に、ジプシーは無言でうなずいた。

奴がそうだと言うなら、そうなのだろう。俺は話題を変える。

「お前のリボルバーの音でピアノの音がやんだが、念の為に音楽室まで行ってきた。誰もいないのを確認してから降りてきたら、偶然廊下の向こう側で気配がしたから、こちらに来た」

「と言うことは、あちら側にいた高橋麗香は、もう下へ逃げてしまったか……校舎内にいない可能性もあるな」

無表情で腕を組んで考え込むジプシーのそばで何気なく、俺は窓

の外に眼を向けた。すっかり暗闇に包まれた広い運動場。そして、その真ん中に立つ人影。

俺の固まった視線に気が付いた会長も窓の外に眼を向け、緊張した声で低く言った。

「あれ、例の彼女じゃないのか？」

全員で窓の外を見る。

そこには、校舎に向いて一人立つ、高橋麗香の姿があった。

最初にジブシーが走り出した。

俺と会長、そして夢乃とほーりゅうも続いて走り出す。一気に階段を一階まで駆け降り、運動場に走り出た。校舎の出入り口そばで、固まって立ち止まった俺達に向かって、彼女は言った。

「何故、私は駄目なの？」

訝しげに彼女を見た俺達に、続けて彼女が叫んだ。

「どうして、その女がそばにいて、私は彼のそばにいてはいけなのよ！」

俺は、それはお前が単にジブシーの好みではないからだろうと言う、きつい言葉を出さず、別の角度から探るように声をかけた。

「お前、こいつの性格知らねえだろ。何処が良くて、こいつと付き合いたいわけ？」

不意を突かれた様子だが、彼女はすぐに答えた。

「だって彼、綺麗じゃない?!」

「女装が？」

俺の台詞に反応したジブシーから、俺の背中へ無言の膝蹴りが入った。俺は背中をさすりながら、続けて彼女に言った。

「それはおかしい。この世で最も美しいのは、賛美歌と女性の裸体だと言われている」

今度は横に立っていた夢乃から、俺は頭をはたかれた。冗談で彼女の気を削ぎ、場の雰囲気を変えようかと思っただけ、俺は話を戻す。「いくら綺麗だったって、こいつより他にもっと綺麗だと言われる男

がいるだろう？ 第一ここまでの程の価値が、こいつにあるのか？」

「価値があるわ！ 私の中で、一番綺麗で理想の人なの！」

「でも、性格の悪さで、お釣りが来るよ」

そう言ったほーりゆうに、今度は後ろからジプシーの首絞めが入った。

「全く貴様ら、どつき漫オグループか」

俺らの行動を見ていた会長が、呆れた様につぶやく。

「彼女の中の、最も綺麗で理想の美しさか……黄金率でもあるまいし」

続けて言った会長の言葉に、ジプシーの動きが止まる。多分付き合いの深い俺だけがわかるジプシーの変化。でも今は気付かない振りをする。何故なら、遠くで警察のサイレンが聞こえてきたからだ。ここでのいろいろ騒ぎを起こしたから、多分こちらに向かつてきているに違いない。ジプシーも会長も、サイレンに気が付いたように振り仰いだ。

「どうして、今、あなた達のその中に私は入られないの？ 彼の隣にいられないのよ！」

急にそう叫んだ彼女の方へ、俺達が慌てて視線を戻した時、彼女は両手を夜空に振り上げ、そして俺達に向かって思い切り振り下ろした。

場所的に俺と会長は、夢乃の手首を引つ掴み、横っ飛びに逃げた。ジプシーも、ほーりゆうの腰を腕で引つ掛けて反対側に飛びのく。かまいたちのような風が、俺達の立っていた場所の地面をえぐりながら亀裂を走らせた。そして、俺達の後ろにあった校舎にもひびが入るのを、なすすべもなく啞然と俺達は眺めた。

俺達が再び高橋麗香の方を振り返った時には、もう彼女の姿は見えなかった。

「逃げるぞ」

ジブシーの言葉に、俺達は我に返る。

そうだ、警察が近づいている。取り敢えず、この場から逃げた方が賢明だろう。

俺達は全員で、裏門に向かって駆け出した。

私と夢乃とジプシーは、ほぼ、ぶっ通し全力で走って、夢乃の家まで帰り着いた。途中で、名残惜しそうな生徒会長と、必ず何かしら連絡をすると約束をして別れた。学校に警察が到着する様子を最後まで伺っていた京一郎が、後から単車で戻ってきた。

家に戻るとすぐに夢乃は、警視庁の父親と連絡を取り、数人の部下と共に父親は帰ってきた。そして、部外者ということで、私だけ部屋の外に出され、父親とその部下、そして夢乃と京一郎とジプシーが応接間で話し合いになった。

私が入ると、話がややこしくなるらしい。

仕方がないのでキッチンのテーブルで、私は一人待つ。

しばらくして、皆にお茶を出し終わった夢乃の母親が、キッチンに戻ってきて、私に紅茶を入れてくれた。そして、私の前の席に座って言った。

「ほーりゅうちゃん、普段はあまり、何が起こっているのか聞かない事になっているんだけどね」

そうだよなあ。さすがに今回は心配だね。私は、嘘をつくことも上手く誤魔化す頭もないので、普通に説明する事にする。

「ジプシー……聡君に、片思いの女の子がいて。その子に私、聡君と付き合っていると勘違いされて、学校に呼び出されて、喧嘩になっちゃった」

うん。簡単すぎる説明だけれど、嘘じゃない。

「聡に片思いの女の子！」

夢乃の母親は、思いがけなく嬉しそうな顔をした。

意外そうな私の顔を見て、夢乃の母親は続けて言った。

「いえね、思春期の男の子の事、よくわからないんだけど、そんな話を今まで全く聞かなくて、ちよっと心配していた。ほら、血が

つながっていないとはいえ、息子のように一緒に暮らしているから。息子同然の子がモテないと思うと、やっぱり親として気になるでしょう？」

ふうん。そういうものなのかな。

「聡の彼女、ほーりゆうちゃんのように、楽しくて明るいい子だったらしいわよね。考えてくれない？」

「え？ えへへっ」

照れたように、私は笑った。

でも、いきなり、そんな話を振られても、それは無理。

残念ながら、私はジプシーからはまだ酷い扱いしか受けていない。この先、ジプシーにときめくなんて、多分考えられないなあ。

「それに」

急に夢乃の母親は、顔に影を落とした。

「聡は心配事がある度に、食が細くなるのよ」

そうだ。ここ最近、夢乃の家に連日泊まっているから、それは私も気が付いていた。家でも学校のお昼でも、ジプシーは最近あまり食べていない。そうか、昔から何かあると食べられなくなるんだ。

意外な弱点。結構小心者。だから背も伸びないんじゃない？

そんな事を考えている私に、夢乃の母親はつぶやくように言った。「聡は、それこそ皆が呼んでいるようなあだ名のように、そのうちに何処かへ行ってしまふような気がして……」

応接間の扉が開いた。

結局今回の事件は、私と京一郎と生徒会長、そして高橋麗香はノータッチで、夢乃とジプシーが明日の朝一番に警視庁へ出向き、事情聴取を受けることに決まった。父親と、普段連絡を取り合っている部下の刑事達と打ち合わせ通りの、形だけの事情聴取。

夢乃の父親の話では、やはり学校の警備員から通報があったらしく、現場での窓ガラスの破損と十人の生徒が倒れていた事があげられていた。そして、ジプシーのリボルバーからの弾が三発。これは

まだ発見されていないだろうけれども、警察が現場を調べればわかる。

不思議な事に、それ以外の痕跡がないそうだ。まあ明日、学校に行けばわかる事だし。

それと、珍しくジプシーが嫌がったので、生徒会長への連絡は、夢乃の父親が直接した。ジプシーったら今逃げて、どうせ明日には学校で、生徒会長に捕まるかもしれないのにね。

ところがというか、やはりというか、次の日は、休校の連絡網が回ってきた。警察の現場検証が長引いているんだろうか。

珍しく私は、朝の新聞を読んでみた。

三面記事として載っていたけれど、『校内の窓ガラスが割られ、犯人見つからず』だけだった。窓ガラスを割ったの、私だ。夢乃の父親がこれ以上の事は揉み消してくれるだろうから、この事件はこのまま迷宮入りだろうなあ。

それでも気になった私は、夢乃とジプシーが警視庁へ向かう車に便乗して、学校前を通ってもらった。三人で車から降りて、運動場を眺める。

運動場には何も、跡形がなかった。

最後、確かに高橋麗香は、運動場の真ん中に亀裂を入れ、校舎にひびを入れたはず。その痕跡が全くなかった。

無言で考え込むジプシーと夢乃を乗せ、再び走り出した車を、その場で私は一人見送る。

朝食抜きで出てきたからなあ。朝、食べる気の起こっていない二人の前で、一人だけ食べるのも気がひけたし。

私は、腹が減っては戦は出来ぬと思い、ファーストフード店で朝食をとることに決めた。

チャプター・32 ほーりゅう

ファーストフード店は、朝早くでも結構混んでいた。ふうん。朝限定のセットって言うのがあるんだ。早速、ハンバーガーとポテト、オレンジジュースのセットを購入して、席を探す。

私は一人だったので、窓の外が眺められるカウンタータイプの席に着く。

そして、ぼんやりとハンバーガーをかぶりながら、外を眺めていた。

ふと、ガラス越しに、このお店の前で待ち合わせをしているらしい一人の後姿が眼に入った。何処かで見た事のある後姿。運動でもしているのか、バランスの取れた体形。今日は、前につばのある帽子をかぶっているが、背中の中程まで伸ばして三つ編みにした髪。誰だったっけ？　じっと見ていると、気配を感じたか、その人物が振り返ったので、私と目が合った。

…… ああ、文化祭で会った男の子だ！

彼も私を思い出したか、にっと笑った。そしてお店の入り口へ回り中に入ってきて来て、あいている私の隣の席に腰をかけた。

「ここで朝食？　もう学校が始まっている時間じゃないの？」

笑顔で、もつともな事を聞いてきたので、私は答えた。

「校内で事件があつて、今日は臨時休校。そう言うあんたは？　学校もだけれど、誰かと待ち合わせ？」

「俺は、友人と待ち合わせ中」

「あ、女の子と待ち合わせなんだあ」

「残念！　待ち人は男なんだ」

屈託なく彼は笑った。

この話のしやすさは、京一郎と似ている所があるなあ。そして、

この喜怒哀楽のはつきりしていそうな彼の雰囲気、何故だろう……思わず一瞬、普段無表情のジプシーを比べてしまった。

ジプシー。そうだ、急に事件を思い出した。

私の表情の変化が分かったのか、彼が聞いてきた。

「何か悩み事がある？」

何故だろう？ そう言われて思わず、事件には無関係の彼に、私は喋ってみたくなった。

「何て言うか。親しい友人が、ある女の子にやけに気に入られてるんだ。断っているのに付きまとわれて、とっても困っているんだよね。……どうにかならないものかと思つてさ」

「ふうん。そんなに大変な事になっているの？」

腕を組んで考えた後、彼はこう言った。

「男女の問題つて、やり方を間違うとさらに大変な事になりそうだよね。可愛さ余つて憎さ百倍なんてさ。女の子の嫉妬つて怖いんだろ？ 周りの異性の友人も巻き込まれそうだし。って、もう君なんか巻き込まれているクチ？」

笑いを含んだような眼で瞳を覗き込まれて、私は視線のやり場に困った。

「あはっ、凶星つて顔。……何？ やけにその彼の事、心配しているね。もしかして、その彼の事、好きなの？」

「まさか！ ……友人として心配しているだけよ」

ドキッとしたのは、今、眼を覗き込まれたせい。

ジプシーは、私の恋愛対象に入っていない。それは間違いない。

……だって私の、好みの顔や性格とさえいば。

「何？」

私の視線を感じたか、彼はテーブルの上にひじをつき、片頬を手のひらで支えて私を見返してきた。なので、慌てて視線をそらした。自分でも分かる。今の私、絶対顔が赤い。

そして、私は気が付いた。前に初めて文化祭で出会った時、私がその時に妙に楽しい気分になったのは、多分話しかけてきた彼が、

ストレートに私の好みのタイプだったからだ。

ごまかすように私は、目の前のポテトを彼の方に押しやった。

「どうぞ。沢山あるから食べて」

彼の、一瞬躊躇する間があく。

……？ 何だろう、この間。

まあいいやと、私は自分もポテトをとろうと手を伸ばした時、偶然手を伸ばした彼の手とぶつかった。慌てて二人共、手を引っ込める。

その慌てぶりを見て、この人は女の子に免疫ないのかな？ 京一郎と同じ位の軽さで見えていたけれど、案外純情なんだ、なんて思っ
て笑った。

自分も慌てた事は棚に上げて。

チャプター・33 ほーりゅう

目の前の彼は再び、今度はゆっくりポテトに手を伸ばす。そして一本つまんで食べている彼の後ろに、人影が立った。

「お前がファーストフード店に入って、ものを食べている所なんて初めて見た！」

本当に驚いたような声が上から急に降ってきたので、私はびっくりして振り仰いだ。そこには長身の男性が、端正な顔に驚いたような表情を浮かべて、こちらを見ていた。

「お、待ち人が来た」

そう言っただけ振り返った彼に、長身の男性が言った。

「ファーストフード店に入っている事も驚きだが、お前が女の子と一緒にいるのを見るのも初めてだな」

そう言ったあと、長身の男性は、私に向かって右手を出して来た。

「はじめまして、東条ツバサです」

「あ、どうも」

私はそう言っただけ中腰になり、慌てて右手を出して握手した。

すると東条さんは、なぜか不満げな表情になり、握手をしたまま私の顔を見返してきた。

？

私、何か失礼な事、したかな？

その時、面白そうに成り行きを見ていた彼が、突然はじける様な大笑いをした。

「女子高生で、東条ツバサを知らない子がいる！」

え？ と言うことは、この人、有名人なんだ。そう言えば、見覚えがあるようなないような。芸能人？ …… と言えば、情報通で芸能界大好きなクラスの明子ちゃん。…… あ、もしかしたら明子ちゃん、よく学校に持ってきている雑誌！

「…… ファッション雑誌のモデルをしている？」

東条さんは、ようやく嬉しそうに、満面の笑みを浮かべた。

「思い出してもらえて嬉しいよ」

なるほど！ 本当にそういう業界の人なんだ。確かに背が高くてカッコイイ、芸能人的なオーラがある。……あ、だとしたら。

「ねえ、高橋麗香って、知ってる？」

私からのいきなりの質問で、ちよつと驚いたような顔をしたが、すぐに東条さんは答えてくれた。

「知ってるよ。何回か撮影現場で会って仕事も一緒にした事がある。でも、お互いあまりそりが合いそうに思わなくて、特に個人的な話をした事はないね」

そうか。そう簡単に、彼女の新たな情報が手に入る訳でもないか。「ちえ。ついにツバサを知らない子がいると思ったのに」

そう言いながら彼は、勢いよく立ち上がった。

「それじゃあ、またね」

笑顔で私に手を振りながら、彼は東条さんと連れ立って、お店の出入り口に向かう。

「あいつ、今日は出て来ないのか？」

「大学の研究室に泊り込みだつてさ。現在進行中の仕事の詰めが近いつて言っていた」

会話する声が遠くになっていく二人の後姿を、私はじつと眺めていた。そして、二人がお店を出て、通りの向こうへ信号を渡って行く頃、私は重大な事に気がついた。

私、彼の名前を聞いていない！

でも前に、うちの高校の文化祭に来た位だし、ここでも偶然会った。近くに住んでいるのかもしれない。だとしたら、また次に会う機会がすぐにあるような気がするし、その時に名前を聞けばいいかあ。よく考えたら、私も名乗っていないや。

今の二人の様子を見てみると、東条さんがモデルの仕事をしているって事は、彼も同じようにモデルをしているのかな。それなら、

男の子なのに髪を伸ばして三つ編みしているのもわからないでもないし、スタイルも良さそう。なんてったって、私好みに見た目がカッコいいもんね。早速、明子ちゃんに雑誌を借りて、探してみようかなあ。

あ、でも今の会話、大学がどうこう言っていたな。もしかして同じ位の年と思っていたけれど、二人とも年上の大学生だったりして東条さんはどう見ても年上っぽいし。それならこの平日の午前中に講義の合間に街中にいるっていう設定もおかしくないよなあ。

ぼんやりとガラス越しに街の風景を眺めながら、黙々と目の前のポテトを食べ、私、すごく彼の事を考えていた。

もう一度会いたいって思うのも、彼の事を考えるだけで楽しいって事も、やっぱり、これって一目惚れなのかな……。

私は、なんだか今、ジプシーに一目惚れをした高橋麗香の気持ち、手に取るように理解出来る気がした。

朝、教室に入ると、ほーりゅうと夢乃はもう登校してきていて、日の当たる窓際にいた。ほーりゅうは相変わらず、夢乃の家に連日滞在中だ。確かに、一昨日の出来事を考えれば、一人暮らしのマンシヨンへ帰す訳にもいかないだろう。

だが、一緒に登校しているはずの、ジプシーの姿が見えない。

「夢乃、奴は？」

「今日は用事で、午前中の学校は休むそうよ。家を出るのは一緒に出たけれど」

「ふうん……で、奴の様子は？」

「本人は、いつものペースを取り戻しているから、心配ないって言っているわ」

「そうか。奴が本調子と言うなら、単独行動も問題ねえな」

一昨日の出来事の為に昨日は臨時休校だったが、ジプシーと夢乃は事情聴取で警視庁に行っていた為、奴は殆ど動けなかったはずだ。昨日一日、身体は動けなくても、おそらく頭の中で計画を練っていたに違いない。実質的な事件の内容として奴の得意の範疇だから、俺は全面的に計画を奴に任す気になっていた。

隣で俺達の会話をおとなしく聞いていたほーりゅうが、教室に入ってきた女子を見つけて、嬉しそうに寄って行った。

「ほーりゅう、嬉しそうだな。何かあったのか？」

俺は夢乃に聞いた。

「昨日、ほーりゅうは街中で芸能人に会ったらしいわよ。それで、その芸能人のファンらしい明子ちゃんに、その話をしたいらしいのよ」

夢乃がそう言った途端。

「うっそお！ 何て羨ましいー！」

藤本明子の叫び声が教室に響き、さらに興味を持ったクラスの女子を引き寄せ、教室の中心で集団になる。

「芸能人ねえ」

俺は、そうつぶやきながらぼんやりと、女子の集団の真ん中に混じる、ほーりゅうの横顔を眺めた。そして、同じように集団を眺める夢乃に、小さな声で言った。

「夢乃」

俺の方を向いた彼女に、言ってみた。

「意外とさ、ほーりゅうって、ジプシーと合っているような気がする？ 天然と言うか癒し系と言うか、その辺の性格が奴とさ。ほら実際、ほーりゅうが俺達の前に現れてから、奴の感じ、いい方向に変わったと思うんだが」

俺の言葉の意図する所がわかったらしい夢乃だが、俺の期待する言葉を口にしなかった。

「残念」

てっきり夢乃は賛同してくれるものだと思っていた。だから、そう言った夢乃に正直驚き、どういう事かと顔を見つめる。

「否定じゃないの」

夢乃は、俺の表情を読んで言った。

「私も、あの二人は、結構お似合いだと思っていただけけど、それは、お互いの気持ちが、お互いに向いている時の話でしょう？」

「奴は、ほーりゅうを嫌っていないと思う。興味のない人間は眼中にない奴だ。むしろ、ほーりゅうの事を、からかう位に興味を持っていると思うが」

夢乃は、小さく笑った。

「ジプシーの方じゃなくて。……ほーりゅう、他に好きな人がいるから」

ピンと来なかった俺は、一拍遅れで驚いた。あのほーりゅうに、そんな艶っぽい話があったのか？

「あ、なるほど。相手は、こっちに転入して来る前の学校の奴か？」

「いいえ。こつちに来てから。出会ったのは文化祭の時らしいわよ」
文化祭から？ 彼女のそんなそぶり、全く気がつかなかった。へえ、あのほーりゅうが……。考え込んだ俺を見て、夢乃はさらに笑いながら言った。

「今まで気が付かなかったって思っているんですよ。当然よ。私もほーりゅうから聞いたの、昨日だし。その相手とは文化祭で一度会ったそうよ。そして、昨日も街中で偶然に会って話をしたんだって。……本人曰く、昨日気がついた一目惚れだそうよ。京一郎の今の話、一日遅かったわね」

一目惚れ。本当にそんなものがあるのかと、俺は疑う方なのだが、考えてみたら今回の事件、高橋麗香がジプシーに、文化祭の舞台で一目惚れをした事から始まったんだ。

「奴は……ジプシーはこの事、知っているのか？」

「今はこの状況だから言っていない。この場で、こんな話が出たから私は京一郎に話したけれど、多分あえて周囲に言う事はないでしょうね。ほーりゅう自身がどれだけ周りの人に言うかにも、よるだろうけれど」

そうだ。この先どうなるかわからない。ほーりゅうの一目惚れっただけで発展なく、このまま済し崩しに消えていくだけの話かもしれない。

「夢乃、今の会話、忘れてくれ。こうなったら良いなと思った、ただの俺の希望の一つだから」

俺は、ため息をつきながら呟いた。

「どうも、人の想いつてのは、上手いかないものだねえ。ほーりゅうにしても、あの高橋って女にしても」

ジプシーのそばに、ほーりゅうがずっといるとすれば。

生き急ぐ奴の未来も、変わる気がしたのに。

チャプター・35 ほーりゅう

「江沼！ 顔を貸してもらうぞ！」

昼休みを告げるチャイムと共に、生徒会長が一年の教室のドアを勢いよく開いた。

「すみません。江沼君は今日、お休みです」

夢乃の、すまなそうな言葉を聞いた会長は驚いた顔をし、そしてすぐに、怒りあらわに叫んだ。

「親からの電話一本で、この私が納得する訳がなかるう！ 絶対捕まえてやる！ 今日の放課後、家庭訪問だ！」

きびすを返し、足音荒く会長は教室から出て行く。

……会長、本当にジプシーの家まで行っちゃうよ。あの様子じゃあ。

そう思いながら、私はお弁当を持って、いつものお昼を食べている自習室へ向かう。

でも、確かジプシーって、今日の学校は午前中だけ休むって、言っていなかったっけ？

そう思いつつ、向かう途中で一緒になった夢乃と京一郎と一緒に、自習室のドアを開けた。そして、腕を組んで考え込んでいるジプシーの後姿を見つけた。

いつもの昼休みのメンバーが、顔をそろえて椅子に座ったのを確認したジプシーは、腕を組んだ姿勢のまま、おもむろに言った。

「今日、高橋麗香を呼び出して、けりをつけたと思う」

さらに続けようとしたジプシーの言葉を、さえぎって私は言った。「その前にジプシー、お昼ご飯を食べようよ。ジプシーもママさん手作りのお弁当、持ってきているんでしょ？」

急に何の事だと言わんばかりに、ジプシーは私の顔を見返した。

「だから、食べながらでも話、できるじゃん」

「いや。今はいらない」

「そう言って食べない気でしょ。あんた最近、食事量減ってるもん」
「今は関係ない話だろ」

「でも、三食きちんにとらないと身体に悪いって」

「俺が食事をしようがどうしようが、お前には関係ない」
「でも」

ジプシーは、急に押し殺したような低い声で、静かに言った。

「ほーりゅう、今回の作戦は、お前中心に計画を立てた。お前に頼った、お前がメインの計画だ。……あまりしつこく言うと、メンバー自体から外すぞ」

「すみません。もう何も言いません。メンバーに入れてください」
普段からいつも、こういう計画には、ないがしろで爪弾き気味の私。メインにしてもらえると聞くと、ちよつと立場の弱い私。夢乃のお母さん、ジプシーにご飯を食べさせようかと頑張ったけれど、無理だったよ……。

おとなしくなった私を見て、一息ついたジプシーは、小さな声で言った。

「後で必ず食べるから、心配しなくていい」

そして、改めてジプシーは腕を組みなおして、話を再開した。

「今日の朝、高橋麗香の家に行ってきた」

……いきなり、敵のアジト襲撃ですか！

さすがに呆気にとられた全員の顔を見ながら、ジプシーは続けた。
「もちろん、彼女が学校に向かう為に家を出たのを確認してから、彼女の母親に会った。……母親は、彼女の能力に気がついていたが、今まで、どう対処していいのかわからなかった様子だな。母親と話し合って、これからの計画に合意してもらった。……と言うか、結果的には、彼女の母親に頼まれた形になったんだが」

ジプシーは、いったん区切ってから言った。

「今回の計画の目的は、彼女の能力の消失。術自体を使えなくさせ

る。彼女との話し合いはそれからだ」

能力消失。

そんな事、可能なんだろうか？　って事は、私の能力やジプシーの術も、使えなくなる事があるって事？

私の考えが分かったのか、ジプシーは言った。

「これから、ほーりゅうに分かるように説明する。何と言っても今回は、ほーりゅうメインだからな。その代わり正しい説明ではなく、お前が理解できる言い方や表現に変えるから。……まず、彼女の能力は、彼女の母親と話をして俺の思った通りの能力だと確信した。俺の陰陽術でも、お前の超能力とも違う能力だ。ただ、今回の要であるお前の闘志を落とさない為に、あえて今言わない」

「何で私の闘志って言うのが関係するのよ」

「それは計画の実践方法として理由が分かるから後で説明する。俺の陰陽術は、練習や修行という形で身に付けたものだ。お前の超能力は、生まれつきの遺伝子レベルの能力とみた。それらは基本的に少々の事では、なくならない。だが、高橋の母親の話では、彼女の能力は精神に担う所が大きく感覚的なもので不安定、あやふやで不確定に身につけたもの。だから、今回立てた計画で消滅させる事が出来る。だが、間違いなく、お前の超能力で対抗できるものだという事、それは俺を信じる」

まあ、こんな関係の話に詳しいだろうジプシーの言う事だから、本当に私の力で太刀打ち出来るものなんだろうな。

「目的は分かったか」

「うん。彼女の能力消失」

私が計画の中心だから、私が理解したら、説明が先に進む訳ね。

「次に方法なんだが、俺としては今日でけりをつけたい。その為に彼女の母親に伝言を残してきて、今日の夜、彼女をこの学校に呼び出した。また、これと思う方法一つのみで戦って外した時が怖い。だから、実質的な方法と、併せて精神的なトラップの、合計四つの

罨の同時進行で、彼女の能力を消滅させようと思う」

……急に不安になってきた。四つの罨を一度に仕掛ける。
果たして私に、そんな器用な事、出来るんだろうか？

チャプター・36 ほーりゅう

私の不安が顔に出たのだろう。ジプシーが続けて言った。

「彼女の能力消失の為の、四つの罠。別に全て、お前が仕掛けると言う訳じゃない。ほーりゅうにしてももらうことは、彼女との一对一の超能力での戦いであるPK戦。これに必ず勝って事だけだ」

それが一番難しいじゃない！

「無理！ それは無理！ 私は自分の超能力、まともに制御できないんだよ！」

「いや、一昨日の様子なら、お前は彼女に攻撃を仕掛けられる。だからお前がメインなんだ。今回俺は、全てにおいての防御に回る」

「ジプシーが一人で、攻撃と防御の両方をすればいいんじゃないの？ 絶対その方が勝てるって」

「今回、お前が彼女と戦う事に意味があるんだ。……彼女にとって戦う相手が、自分の好きな男より、その男を取り合っている恋敵だと思ってみろ」

そうか。私は彼女の恋敵になるのか。彼女の勘違いだとしても。

「お前が相手の方が、狙いの能力消失につながる。実質的な方法の一つとして、彼女の能力をオーバーヒートさせる」

「わざと能力の限界を超えさせて、力が出せなくなるって事か」

京一郎がそばで言う。うん。意味は分かるけれど、それは実際可能なんだろうか？

ジプシーはしばらく考えた後、ちょっと難しいかなと言いながらも話を続けた。

「俺が使う陰陽術の中で、呪詛返しと言う術がある。相手が仕掛けてきた術を、こちらで相手に返す技だが、この場合、返された方は、最初に仕掛けた時よりも、かなり大きなダメージを受ける」

「なんで？」

「一の力で攻撃された術は、跳ね返す為には結果的に一以上の力じ

やないと返せない。簡単に言えば、二の力で返すとするだろ」
うん。

「すると、相手もさらに跳ね返してくるとしたら、二以上の力、簡単に言えば、三の力で返すことになる」

うん。それも分かる。力が小さければ、跳ね返らないもんね。……ん？

「結果、徐々に力の大きくなっていくラリーで、力負けして跳ね返せなくなった方が、全てのダメージを受ける」

ちよつと待って！

その戦いを私にやれと？

「絶対無理！ 私が負けるのがわかってる。それに、結局どちらかが大怪我するって事でしょ？」

「だから、俺が全面防御に回るって言っているんだ。……お前の防御はもちろん、今回は傷つける為の戦いじゃないから、相手の彼女の防御も俺がする。お前は安心して攻撃を仕掛ける。彼女のオーバードライブが目的だから、徹底的に」

「私の方が、最終的に力不足だったら？」

「それはない。俺の見立てでは間違いなく、ほーりゅうの能力の方が上だ」

それで、私の闘志を落とさない為に、彼女の本当の能力を教えてください。どんな能力なのか、この際気にしない方がいいんだな。

「それが、ほーりゅうにしてもらった実質的な攻撃。それと、それに伴う、最大能力を駆使しながらも敗北と言う精神的なダメージが二つ目。彼女の能力は、精神に担う所が大きいから。今までそういう力を持つ相手に出会わなかったんだろう。一昨日の感触では、彼女もPK戦は初めてだ。……あと、予定している残りの二つの精神的なトラップは、俺が用意して仕掛けるから、お前は気にしないでいい」

「ふうん……とにかく、彼女にPK戦で勝てばいいって事ね」

……本当に上手く出来るんだろうか。

「あと、もう一つ別に、防御の面で大技の術を仕掛ける予定だ。それが、俺がメインで攻撃出来ない理由の一つだが」

大技の術。何だろう？

ちよつとわくわくするかも。

でも、私の期待満面な表情に対して、ジプシーは今一乗り気ではなさそうな表情で続けた。

「言葉としてわかりやすく言うなら、……復元結界とでも言おうか」
復元結界？

「この高校の校舎全体、運動場も含めて、一つの結界をはる。これは、術を発動してから最後に術をとくまで、その間に破壊された建物や草花や木も含まれる結界内全ての静物が、術をといた時に全て復元される……元に戻る術だ」

「……それって、すごいじゃん！」

何で今までそんなすごい術、使わなかったんだろう。って、単に使う機会がなかったからか。

「今回、思い切り、ほーりゅうに力を使ってもらう為に、この術を使おうと思っている。これなら、校舎破壊を気にせずに戦えるだろう？」

「ねえ、一昨日、高橋さんが壊した校舎や運動場が元に戻っていたよね。それってもしかして、彼女もこの術を使えるって事？」

「いや、彼女の術は、また別の違う方法だ。彼女の術に関しては、とっても難しく長い説明があるが、聞きたいか？」

「いえ、遠慮します。……それにしてもジプシー、この術を使うのに、何か乗り気じゃない感じがするけれど？」

眉間に手を当てて少しの間考えていたジプシーは、それでも続けて無感情に言った。

「この術の欠点というものが三つ。一つ目は、術の性質上、術者が、かなりの力を一定してずっと出し続けられないといけない。その理由も

あつて、今回俺は攻撃なしで防御にまわる。二つ目は、復元されるのは静物のみで、人の怪我は治らない。だから俺が防御に回って、お前も彼女も怪我をさせない。三つ目は……術を発動した者が、途中で意識を失ったり、ましてや死んだ時点で術はとけ、術発動内で起こったダメージがそのまま全て、現実の世界のものとなる。術を発動した術者が、意識を持って術をとかなければ復元されない」

ジブシーの話を聞いた後、ほーりゅうは怪訝な顔をしていた。多分、最後の説明が長すぎて、すぐに理解できていないのだろう。夢乃の方は、少々青ざめた顔になっている。こちらは恐らく説明内容を理解した上で、俺と同じ事を考えている。

明らかに、ジブシー個人の負担が大きい。

「もう一度、説明をお願い！　どういう意味？」
ほーりゅうが聞きなます。

ジブシーは、考えながら言葉を選びつつ、ほーりゅうに言った。

「つまり、結界が消えても、怪我をした所はすぐに治る訳ではないから、怪我をするな」

「それはわかる。他の部分」

ちよつと間を置いて、ジブシーは、きっぱり言い切った。

「後は、俺自身の問題だから、お前は気にする必要はない」

「へ？　どういう事よ。さっきの説明と、全然長さが違うじゃない。第一、それなら何で、京一郎や夢乃が心配そうな顔をしてんの？」
鈍感そうに見えて、意外と目ざとい。俺と夢乃の表情を読んでいる。

ジブシーは、やれやれという感じを出しながら言った。

「いや、結論的には、俺自身も怪我をしたり、意識を失ったりするなって事。多分俺のやる事が多いから、京一郎達が心配しているだけだ」

結構、時間が経っていたらしい。気がつくと、昼休み終了のチャイムが鳴り始めた。

まだ、納得していないような顔のほーりゅうに、俺は言った。

「ほーりゅう、今聞いた限りでは、確かにジブシー一人の負担が大きいが、これから俺と二人で話し合って、一番いいやり方を選ぶ。」

次の授業は休んでも俺はコマ数がまだ大丈夫だし。お前ら二人は授業に戻れ」

本当は、ジプシーのような能力を持ち合わせていない俺には、奴の負担を軽くすることは出来ないかもしれない。せいぜい俺に出来る事は、スムーズに事が運べるようにサポートする位だろう。だが、ほーりゅうや夢乃の心配を、わざわざ増やす事もない。

しぶしぶ椅子から立ち上がる、授業のサボリ癖がついていないほーりゅう。

その彼女に向かって、ジプシーが言った。

「そうそう、お前の最初の仕事だ。高橋麗香を挑発する台詞、考えておけ」

「何よ、それ！」

そう言いながらも、ほーりゅうと夢乃は、自習室を出て行った。

「さて」

彼女達が出て行った後、昼休みが終わった事で、急に静寂が広がった校舎を感じつつ、俺はジプシーに言った。

ジプシーが俺を見る。

「とりあえず、お前は弁当を食え」

お前もそれを言うか、と言わんばかりの嫌そうな顔に、俺は続けた。

「これからのお前は体力勝負だろう。今、食べた方がいい。それに計画自体は、さっき聞いた内容が大筋なんだろう？」

ジプシーは、仕方がなさそうに鞆から弁当箱を出しながら答えた。

「そうだな。高橋麗香の能力を黙っている事と、俺が仕掛ける罠の内容以外、ほぼ全部だ。復元結界の決まり事も百パーセント事実」

「高橋麗香の能力、そんなに複雑で難しいものなのか？」

「いや」

ジプシーはすぐに答える。

「一言で説明が出来る。だが本当に、ほーりゅうの士気を落とした

くないから言わなかったただけだ。今からお前には全て話すし、俺の仕掛ける二つの罠も説明する。……それを承知した上で、全員で高橋麗香の術に落ちたい。罠の一環で」

「了解。お前の食事が終わったら、俺の役割も含めて打ち合わせよう」

黙って食べ始めた奴をみて、俺は、ふと思い出した。

「なあ、言いたくなかったり、今回の件に全く関係ないって事なら、無理に話さなくていいが。今回の件に関係があるのなら聞いておきたい事がある」

俺の、珍しく聞きにくそうな前振りに、ジプシーは顔を上げ、ちよつと意外そうに俺を見た。

「何だ」

俺は、奴の表情を見るために、ゆっくり言った。

「お前、一昨日の運動場で、生徒会長の『黄金率』って言葉に反応しただろう？」

眼を見開いて、奴は俺を見る。

しばらく、俺の顔を眺めていたが、ようやく言葉が決まったかのように言った。

「ああ、……あれ。あれは、……俺の深読みのし過ぎだと思う。多分、この一件には関係ない」

そして、再び弁当に視線を落としたジプシーを見て、俺はこの話に関しては、ここで終わりだと思った。しかし、ジプシーは考え続けていたらしく、ゆっくり話し出した。

「多分、本当に関係ない話なんだ。……黄金率、その種の最も美しくみえる比率の事だ。四角の辺の比やフィボナッチの数列、パルテノン神殿のように無生物もあるが、自然界における比として生物に関して言えば、らせん状に詰まっているひまわりの種のつき方や、巻貝のフォルムなどは、遺伝子伝達レベルの話になる」

話の方向性がわからない為、俺は言葉を挟まずに黙って聞く。

「彼女は理由として、俺を綺麗だからと言った。彼女は俺の中に、彼女が知らないはずの俺の両親の掛け合わせの、遺伝子レベルでの黄金比を見たのかと思ったんだ。そんな事、あるはずがないのに」
うつむき気味にそう言った奴の整った顔を、俺は無言で眺めた。

五時間目が始まっている今、校内はとても静かだった。この自習室の近くにある音楽室も、今日のこの時間は授業が入っていないらしい。やわらかい日差しが入る窓際の席に座って、ジプシーは窓の外に視線を向けて話を続ける。

「俺の父は、これは前に言ったかな、伯父と同じ陰陽師の血をひいていた。陰陽道の家系の血のつながった兄弟だから、まあ当たり前か。俺の母は、……普通の、特に何の特別な能力を持たない、ただの人間……そこいらにいるただの人間と、中身も能力も、本当に変わりないと思う」

ジプシーは、そこで言葉を切る。あまり聞いた事がない、奴の亡くなった家族の話を、俺は黙って聞く。

「中身は普通の人間だと思うけれども、母は、その……家柄というか、身分が高かった」

「身分？」

こいつが母親似って事以外での母親の話は、全てが初めて聞く。家柄や身分が高い。どの程度のレベルでの話になるのだろうか？

「俺の父親との結婚に親族からの反対があって、母は一族から追放された。同じように父の方も。伯父が陰陽道の一族の直系って話は、多分夢乃から聞いたと思う。その弟にあたる俺の父親は、母との結婚に反対された上に、当時の当主の怒りを買って勘当された。言葉上の縁を切られただけではなく、戸籍も一族の末端に養子として出されて苗字も変わり、事実上本当の本来の追放だな。そして、当の二人は駆け落ち同然に、お互いの一族の前から姿を消し、行方をくらませた」

……淡々と無表情でジプシーは話をしているが、こいつの親に、この目の前の息子からは想像も出来ないドラマのような恋愛話があったとは。

そこで、ジプシーは一旦話を区切ったので、俺は素直な感想を言った。

「お前、その両親の血をひいているとしたら、情熱的な恋愛をしそ
うだな」

「俺が？ 冗談。俺がそんなタイプじゃない事位、知っているだろ
いや、俺から見たら、こいつはまだ恋愛に疎く目覚めていないだ
けだ。こいつに見初められた相手は、きっと将来、大変な苦勞をす
るに違いない。」

まあ、今は関係のない事だから、俺は話を戻す。

「しかし、そこまでこだわるほどの高い身分になるのか？」

ジプシーは、どこまで話せば良いのかと考えるような感じで答える。

「確かに母から聞いた限り、詳しく言えないが、実家の家柄は、は
るかに高い。でも、現実に母が俺に残したものは、俺自身とロザリ
オ、そして、リボルバー」

え？ っと、思わず聞きなおす。

「ロザリオは以前に形見だと聞いた事があるが、そのお前が持つて
いるリボルバーも、母親所有だったのか？」

こいつの母親は、どんな女だったのだろう。護身用に持つにして
も、こいつの持つているリボルバーは、馬鹿でかいマグナム銃だ。

「まあ、前に、ほーりゅうには言ったかもしれない。ほーりゅうの
持つているロザリオの中に埋め込まれている石はカディアと呼ばれ
る、ある意味本物の石だ。俺の持つているロザリオは、形がまっ
く同じの偽物。しかし多分、中に埋め込まれている石は、偽物だが
価値としてはかなり高い石だろうとは思う。それと、リボルバーの
方は、……ロザリオと同時期に特注で作らせたものだ聞いた。コ
ルト社の実在の拳銃を模倣して作ったから、コルト社のロゴは冗談
で本物と同じように入れたのだろうけれど、グリップの底に、家紋
と言つか、家の刻印が入っている」

……こいつの、時々グリップの底を眺める癖、それが理由だった

のか。

そこで、ふと、ある考えが浮かんだ。

父親も本当の血筋は悪くない。母親も高い身分だ。高橋麗香は本能的に、こいつの見た目や能力もだろうが、こいつに流れている掛け合わされた高い身分の血を含めた、全てのバランスに「美」を感じたのか？

そう考えて、なるほど、これが運動場でジプシーの頭に引っかけた、遺伝的なレベルでの黄金比な訳か。

「まあ、よく考えたら、今回の件には関係ないと思う。そんな事、彼女にわかるような話じゃないし。純粹に、彼女の中の単独な見た目の美的感覚に俺が引っかけただけだろう」

そう言ったジプシーに、俺はふと思い当たって、つい口に出してしまった。

「そう言えば、お前の昔の事件、まさか、母親側が関係して、……あ、いや、ごめん」

昔の事件に触れる気はなかったのだが。

両手を挙げて謝った俺に、しかし、無表情を変えずに、ジプシーはあつさりと言った。

「可能性がない訳ではない。だが確証もない。まあ、父方の家系よりも、母方の方が複雑な事情のある一族ではあるのは確かだ。ただ、俺は事件当時、警察にも伯父にも従兄弟のトラにも、母方の事は一切何も話を聞いた事がないで通した。俺は実際、昔も今も、母の一族や身分に全く興味がない。しかし、こちらがそうでも、今後何が起こるか……向こうがそうは思わずに仕掛けてくるかわからない。佐伯の家を巻き込む訳にはいかないから、養子の話は断った」
ここまで話をした後、急にジプシーは表情を緩め、かすかに笑って言った。

「いつも、京ちゃんには心配かけるね」

そして、なんだかんだ言いながらも、お昼を食べ終わったジプシ
ーは、さて、と俺に向き直った。何故か自信過剰で迷いのない不敵
な迫力を持つ無表情。間違いなく、いつもの見慣れた奴の顔に戻っ
ている。

「俺は夕方までに、この学校中に結界と術発動の梵字を張り巡らす。
見た目はほーりゅうのみを護衛するが、離れた場所から陰で高橋麗
香も護る為、瞬間に俺の術を飛ばせるようにしないとイケない。あ
と、不本意だが、どうしても頭を下げなければならぬ相手もいる。
何を見返りに要求されるか考えたくもないが。……京一郎、手早く
打ち合わせといこう」

チャプター・39 ほーりゅう

五時間目の授業内容は、出席したというだけで、全く頭に入らなかった。

今日の夕方に、この高校で、急に彼女と戦うって決められてもなあ。それに、ジブシーに出された宿題をずっと考えていた。『高橋麗香を挑発する言葉を考える』だなんて、簡単に思いつかない。

ありきたりなものじゃ駄目かな。どこかで聞いたような台詞を使ったらバカにされるかな。オリジナルの台詞の方がいいのかな。

うーん。私って、ボキャブラリーが貧困だもんなあ。

でも、言われた限りは何か考えとかなないと、いけないんだろうなあ……。

五時間目が終わった後、今日の校内でのクラブ活動は全体的に中止になった。一昨日の事件の為に昨日が休校。学校側としては、今日も念の為に、夕方までには生徒を全員帰らせるつもりなのだろう。ジブシーは結局、教室に戻って来なかった。京一郎だけが五時間目の後、私と夢乃に連絡を伝える為もあって、教室に帰ってきた。『彼女を呼び出した時間は、六時。それまで、いつもの自習室で隠れて待っているってさ』

「ジブシーは？」

「今日の為のトラップを仕掛けに行っている。出来次第合流するぞうだ」

私も夢乃も、京一郎の後について、こっそり四階の自習室に移動した。先生に見つかったら、校外へ放り出されちゃうものね。

六時まで、結構時間があるなあ。だけど、これから彼女と戦うだなんて、何か実感がわかないし。それより私、本当に戦えるんだろうか。

自習室の入り口から見えない位置で、椅子に腰をかけて待っている間に、私は足元のチョークで書かれた線に気がついた。……この図形、見た事ある。

私の視線を追った京一郎が言った。

「もう始まっているって事だ。以前にも、この式神召喚の陣を見た事あるだろう？」

京一郎の言葉で、途端に私は、現実味を帯びた戦いに不安になる。部活をする生徒がない上に、夢乃も京一郎も今は必要以上の話をしないので、私も無言で、徐々に暗闇が濃くなり静寂が街を包み込む、窓の外の夕焼けを眺めていた。

ゆっくりと自習室のドアが横に開かれたので、私はどきりと入り口を見る。足音なく、ジプシーが入ってきて、後ろ手にドアを閉めた。

「ぎりぎり間に合った」

ジプシーの言葉に、私は自分の腕時計を見る。

「え？ 六時でしょ？ まだまだ時間があるじゃない」

「いや、何か仕掛ける気なのかどうかわからないが、彼女はもう、近くまで来ている」

正面の窓の外に広がる、日の暮れた街を眺めながら、かけていた眼鏡をはずしてジプシーは言った。

そして、ジプシーは自習室の真ん中にある柱に近寄り、その前に立ち止まる。しばらくそのまま柱を眺めていたが、不意にまた、窓の外へ視線を走らせて言った。

「彼女が、学校の敷地内に入った」

ああ、そうか。窓の外を気にしていたのは、先に放っていた式神を見ていたんだ。

来たあゝ！ と頭を抱えてつぶやく私の言葉を聞きつつ、ジプシーは、左手の平を柱に当て、長い真言を唱える。

一瞬、身体が傾くような、小さな地震の揺れを感じた時のような錯覚が生じ、慌てて周囲の机の上に手をついて、私は身体を支えた。その私の目の前で、柱の四面全体に梵字で書かれた陣が浮かび上がって、消える。

「復元の為の結界が発動した。術をとくまで、俺以上の能力を持つ者以外は、誰も外界との行き来も出来ない」

ジプシー以上の能力を持つ者。

「って事は、高橋麗香さんは通れないから、結界をとくまで逃げられないって事なんだ。……例えば誰なら通る事が出来るの？」

私の質問に、ちよつと考えてから、ジプシーは答えた。

「従兄弟のトラなら、俺の結界を通る事が出来る。でも、通るって事は、この結界を破壊する意味になる。術者の俺がとく事にならないから、結界術として成立しない事になる為、ダメージがリアル世界に残る」

ジプシーの従兄弟の勝虎君か。陰陽道一族直系の彼なら、きっと相当な力があるんだろな。でも、そんな高いレベルの結界なら、今回は外から破られる事はないか。

「ほーりゅう、お前は彼女の殺気を力として感じる事が出来る。逆に彼女は、まだお前の超能力の存在を知らない上に、感じる能力を持ち合わせていない。今から集中して、いつでも攻撃が仕掛けられるように力をためている」

そう言つて、ジプシーは自習室を出る。

なので、慌てて私も、夢乃も京一郎も、続いて自習室を後にした。

夢乃と京一郎と一緒に、しばらく私はジプシーの後に続いて、四階の自習室を出る。階段をゆっくり降りながら、言われた通りに、私は一昨日練習した事を思い出して、力を呼び起こそうとする。そうだね。これが今回の私の目的だもん。さすがに今日は本気でやらないと。

私の目的。彼女と超能力で戦って、彼女の力がオーバーヒートするまで追い込む。

うつむいて集中集中と思いつながら階段を降りていると、一階分だけ降りた所で立ち止まったジプシーの背中にぶつかった。

「痛あゝい！ 何よ、急に立ち止まらないでったら」

一応出っ張った鼻の頭を押さえてジプシーを見上げると、横を向いたまま無表情で黙っている。同じように視線を追って横を向くと、一昨日と同じ三階の廊下の向こうに、高橋麗香が自校の制服姿で、一人立っていた。

「あなた、私を一人呼び出しておいて仲間連れ？ あなたも一人で来ると思っていたのだけれど」

高橋麗香は、私をまっすぐ見て言った。

怒ったような強張った表情だが、不思議な事に、怒りは彼女の可愛らしさの中に美しさを彩る。

私は、神秘的なモノを見るように視線が釘付けになりかけたが、いやいや、見とれている場合じゃない。私は彼女と戦う為に、呼び出したんだ。……ん？ 実際彼女を呼び出したのはジプシーなんだけれど、私が呼び出したって事になってんの？

「俺と夢乃は見届け人だ。邪魔する気はねえよ。もつとも、余計な邪魔者を連れてきていたら排除しようかと思っていたが、あんたは一人で来たようだし」

夢乃を背にかばい、京一郎がそう言って、両手の平をあげて見せた。

高橋麗香は京一郎を一瞥し、そのままジプシーに視線を移す。

「あなたは、何故ここにいるの」

「何故って、自分の彼女がこの遅い時間に出歩くなら、普通はついてくるだろ」

しれつと悪びれず、ジプシーは言った。

「あなた、この前に自分で、彼女はいないって言ったじゃない！」

思わず叫んだ彼女に、ジプシーは無表情で答える。

「じゃあ訂正。こいつとの関係は、お前が見た通りだ」

見た通り？ 私は思い起こす。それは、喫茶店での偽デートや公園での偽ラブシーンや一昨日のバカップル姿って事？ それって更なる誤解を招くのでは。

案の定、高橋麗香は、ぎりつと私を見据えた。

「私に見せ付ける為に呼び出したの？ なら覚悟は出来ているでしょうね」

そう言った彼女の周囲に、前に嗅いだ事のある花の香りが広がった。

これって。

「いい香り。麗香さん、これ、何て言う名前の香水？」

思わず聞いてしまった私の頭を、ジプシーは左手でガシツと掴んで言った。

「お前、状況をわかってる？ 本当に思った事が何でも、すぐに口から出る女だな」

「だつてえ！ 気になるじゃない」

またもやバカップルモードに入りかけた私とジプシーに、京一郎の、夢乃へささやく声が聞こえた。

「俺、こうやって外野から見ていたら、ジプシーって自分に気のある女二人を喧嘩させている、非道い奴に見える」

だから！ 私はジプシーに、全然その気はないって。今回巻き込まれた形なんだってば。

なので。

そんな私の、ささやかなジプシーへの抵抗と逆襲の意味を込めて、バカッフルモードを目の前で見せ付けられそうになってキレかった表情の彼女に人差し指を突きつけて、私なりに考え抜いた挑発の言葉を言った。

ええっと。

「麗香さん。力づくで私に勝ったら、ノシつけてジプシーをあげるわよ。好きにしたら。さあ、私からジプシーを奪ってみなさいよ！」
横で「げ、マジかよ」とつぶやくジプシーの声。後ろで大爆笑の京一郎。

でも、どんな形でも彼女が最大の力を出してかかってくるように仕向ける事が出来たら、今回はOKなんですよ？ 私、間違つてないもん。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

そう言つて私を見据える彼女の眼。

怒りで異様な光が反射しているような眼。

「お前、今、何も考えずに彼女の眼、見ているだろ？」

ジプシーの言葉に、私は、はっと我に返る。

え？ …… あ！ そうか、彼女の術！

そう思つた瞬間、麗香は右手を、下からすばやく振り上げた。

ジプシーが同時に、私の手首を掴んで自分の腕の中に引き寄せる。

呆氣にとられた私が見たのは、さっきまで私が立つた廊下の表面に亀裂が生じ、背にしていた窓ガラスが碎け散る所だった。

チャプター・41 ほーりゅう

目の前で、廊下の表面に亀裂が入る。

さっきまで私が背にしていた壁と窓ガラスが砕け、下から切り裂いた形になった為か、校舎の内外にガラスの破片が飛んだ。途端に、三階の廊下に吹き込んでくる、外からの冷たい空気。

その冷たさに、私は我に返る。

今、この彼女と戦うのは、そうだ、私だ。

今の攻撃をかばってくれたジプシーを、とりあえず横に突き放した。私がやる気になったのがわかったのか、あっさり離れるジプシー。そして私は数歩下がって、彼女を見る。一昨日の練習を元に、早く自分の中の力をためなきゃ。幸い目の前に、私の超能力を発動させられるだけの、殺気を持った彼女がいる。

ジプシーは、私の力の大きさや出るタイミングが読めるはず。それに、どんな派手な戦いになっても、ジプシーは、私も彼女も護ってくれるって言ったんだ。それを信じて、思いつきりやってやる。

少し離れた所から、怒りと、そして何故か同時に楽しそうな雰囲気漂わせ、私に微笑みながら麗香が言った。

「力ずくで彼を奪っていいって言ったわよね。身の程知らずが、思い知らせてあげる」

右手を、これ見よがしに目の前へ突き出し、手のひらを上に向けてる。すると、その手のひらの上で、彼女の気の塊が大きくなっていくのがわかった。

私の力の発動の源は、今はその彼女の殺気。彼女の力の大きさに合わせて、私の中の力も、小波をたてて大きくなってきた。彼女が時間をかけて、力をためてくれるのありがたい。そして、ちょうど私の中の力が、外に向けて暴発できるまでに膨らんだ時、彼女が

力の塊を私に向かって、投げつけてくるのがわかった。

私も、足元から風が巻き起こる。それに合わせて、私も彼女と同じように両手を上にあげ、そのまま振り下ろした。意識的に力を使った事が今までにないから、見よう見まねでしか外に出す方法がわからない。

それでも、彼女の力が届く寸前、私の力は願い通り、手を振り下ろすと同時に前へ出て彼女の力にぶつかり、跳ね飛ばした。

誰もいない、あらぬ方向へ。

そして、派手な音を響かせて、教室と廊下の間の壁に、見事な穴をあけた。

「……あり？」

出たのはいいけれど、タイミングのせいか当たり所のせいか、まったく飛ばない。彼女に返らなきゃ、予定通りの力のラリーにならないじゃん。これは困ったぞ！

「……あなた、あなたにも、そんな能力があるの！？」

驚く麗香に、それでも私は思いつきり、はったりをきかせて言った。

「どうだ！ 驚いた？ 特殊な力でも、あんたなんかには負けないもん！」

でもやばい。次も彼女の方へ向かって返す自信がない。

すると、私の様子を数歩下がって様子を見ていたジプシーが、私だけに聞こえるような小さな声で言った。

「気にするな。次からは俺が軌道修正、入れてやる」

え。そんな事もできるの？ 振り返ってジプシーの顔を見た私。すると、後頭部に、麗香の視線が刺さるのがわかった。いや、別に見つめ合ってラブラブモードになっている訳じゃないって。また誤

解させたかな。

慌てて私は、彼女に向き直って、新たに意識を集中させる。とりあえず力、ためなきや。

麗香は、少し考えるそぶりをしてから、今度は右手を真横に伸ばす。

あ、今度はなんか、攻撃を仕掛けてくるの、はやそう……。もしかしたら、今度は私の力をためる時間、間に合わないかも。

ちよつと怯んだ私の様子を確認して、彼女は薄く笑い、その右手を私に向かって横一文字に切り裂くように振った。

これはたぶん、最初に見た切り裂き系のかまいたちの攻撃だ。それに、このタイミングに、やっぱり私の力は間に合わない。っていうか、逃げるのも間に合わない！

思わず両腕を顔の前に上げてかばい、踏ん張って衝撃を待つ。が、何のショックも来ない。

恐る恐る両腕の隙間から前を見ると、私の眼の前で、彼女の力が四方にはじけ飛んだのを感じた。絶対、私の力じゃない。とすると、これはジプシーの防御結界？

私はジプシーの姿を、今度は誤解されないように眼だけで探す。すると、麗香からは死角の壁際に移動したジプシーを見つけ、そして壁に添えた彼の手のひらの下から、梵字が消えていくのを見た。そうだ。今この学校は全て、ジプシーのテリトリーになっているんだ。だから、防御に関しては、全てジプシーの思いのまま。これなら安心して、私も彼女に攻撃を仕掛けられる。

チャプター・42 ほーりゅう

そして、ふと私は、自分で思い浮かべた言葉に気がついた。

何も、麗香さんからの攻撃を待っていないなくても、いいんじゃない？ 私の超能力、外に出せる位に力がたまった時点で、私から攻撃を仕掛けるってのも、ありだよな。

そう考えた私は、今度は私から彼女に仕掛ける気で、両手をあげる。

すると彼女は察知したのか、身を翻して廊下の向こうへ走って逃げ出した。

え？ 逃げるの、あり？

なら、追いかけるまでよ！

「待ってえ！」

せっかくやる気になった私、薄暗い学校の廊下を、彼女の後を追って駆け出した。

数歩遅れて、ジブシーが私の後ろをついて来るのがわかる。場所を移動しても、完璧主義のジブシーの事だ。私はもちろんだけれど、彼女のガードも大丈夫だよな。

この学校内は今、全てがジブシーのテリトリーなんだから。

背中を向けて走っている彼女の後を追いかけているが、私は走りながらになるけれど、手をあげて振り下ろす。あ、後ろからの攻撃って、本当は卑怯なのかな。でも、戦ってるって、お互いにわかってるし、いいよね。

制御不能な私の力。それでも、一杯にためていた私の力は、手を振り下ろす動作で外に出た。

そして、先程とはうって変わって、私の力は螺旋を描きながら、周りの壁を削りつつ、彼女に向かって飛んでいくのがわかった。

……螺旋状。はたから見たら、結構ダイナミックな技に見えるけ

れど。

あれって多分、真っ直ぐ飛んでいかない私の力が、ジプシーのはった結界の壁にぶつかって、よそに飛んでいく所を軌道修正されながら、進んでいるからなんだろうな。

気配に気がついた麗香が驚いた表情で振り返り、その為、彼女は正面から私の力を受ける事になった。そして跳ね飛ばされ、後ろへ仰向けに倒れる。彼女は、弾みでぶつけた肩を押さえてうめいた。「ちよつと！ 話が違っんじゃない？ この戦いは見かけだけで、実際ジプシーは麗香さんもガードしてくれるんでしょ？ 何で彼女、私の力を食らってんのよ」

焦った私は後ろを振り返り、小声でジプシーに言った。

あっさりとジプシーは答える。

「お前は百パーセント護ってやる。でも彼女は、お前の力の衝撃を多少は受けてもらわないと、負けているって意識が芽生えない。無傷もおかしいし、痛くない攻撃を何度受けても意味がないだろ。安心しろ。残るような怪我まではさせない」

……彼女だけ痛みがあるって、何だか攻撃しにくくなっちゃうなあ。

そう思いながら私は前へ向き直る。彼女を見つめる私の目の前で、麗香は身体を起こして、ゆっくり立ち上がった。

ゆるめにクルクルと綺麗に巻いていたロングの髪がほつれ、逆立つ感じすら覚える。強張った表情の中の二重の眼は、さらに光を反射し煌いた。細身の身体全身で、怒りのオーラを発しているのが見て取れる。

彼女、本気になったかも。

私の願った通り、彼女の最大の力を引き出せそうなのだが、これは、対峙すると怖い。

ところが予想に反し、再び麗香は背を向けて駆け出した。
なので、私も慌てて追いかける。

今度は、まだ私には、外に出せるだけの力はたまっていない。走りながらの集中って、なかなか難しいものがある。

彼女から引き離されないように、ダッシュでついて行っている先で、麗香は廊下の突き当たりにとどり着き、角を曲がった。私も続けて勢いよく曲がる。

そして、曲がると同時に、眼の前に、こちらを向いて彼女が立っているのを見た。

急に止まらず、勢いがついてぶつかりそうな位に接近した私の胸元へ、麗香は右手の平を当てる。

驚愕の表情を浮かべているであろう私に、麗香は妖艶に微笑んで、手の平から直接私の身体に、衝撃波を打ち込んで来た。

チャプター・43 ほーりゅう

胸元に受けた衝撃で、私は多分数メートルは弾き飛ばされ、そのまま後ろの壁へ激突した。

やばいと思う間もなく、本当に一瞬の出来事で、私の頭の中は真っ白のまま何も考えられていなかった。

……あれ？

どこも痛くないや。

壁に背中をぶつけたまま、座り込む形で呆然としていた私は、ようやく頭が回り始める。

そしてジブシーが、私と後ろの壁の間に入って、受け止めてくれた事に気がついた。そうか、ジブシーは多分、防御が間に合わないってわかったから、とっさに身体を張って私が壁にぶつかるのを防いでくれたんだ。

でも、さすがにジブシーでも、今の衝撃はきつかったのでは。私はきつとすごい勢いで吹っ飛ばされちゃったよ。

「なるほどね。五感を使う術だから、触覚という事で接触しての衝撃波も使えるって訳だ」

そうつぶやくジブシー。

さすがに心配で顔を見た私に、ジブシーは、後ろから私を抱きかかえて立たせながら、相変わらぬ無表情を保って言った。

「俺は心配ない。お前、彼女から直接受けた方の攻撃はどうなんだ？」

「あ、そうか」

麗香さんからの攻撃、直接胸元に受けて吹っ飛んだんだ。でも、衝撃はあつたけれど、痛くない。そして、思い当たって首にかけていた鎖を引っ張り、トップについているロザリオを取り出した。

「多分、場所的には、服の中にあつたロザリオに当たったんだと思

う」

でも、大丈夫。ロザリオ本体にも中の石も、傷や歪みはない。

「なるほどね。カディアの石の力なら、それ位の衝撃も吸収するだろう」

ジプシーも、石を見ながらそう言った。

私はロザリオを握り締めたまま、前に立つ麗香に眼を向ける。そして、彼女が悔しそうな表情でつぶやくのを聞いた。

「そうやって、彼にずっと護ってもらえる訳ね」

違っただけだ。

私はジプシーの彼女じゃないし、今回ジプシーが護っているのは、私と麗香さん両方なんだから、とは作戦上言えない。

言いよんだ私に向かって、麗香は右手を頭上にあげ、私を見据えて言った。

「さあ、続きをやりましょうよ」

その台詞を聞いて、ジプシーが私から離れ、数歩下がる。

そうだよ。表面上、私と麗香さんの一対一の戦いだし。

何か作戦を考えているのか、しばらく手をあげたまま動かない彼女。

力をためる時間が必要な私にとってもありがたいので、無言で彼女を見つめたまま、集中する。慣れてきているのか、今度はすぐに私の中で大きくなる力の存在がわかる。

どの位そのままだったのか。急に彼女は、上げていた手を眼の前まで下ろし、手の平を上に向ける。

何が起こるのか訝しげに見た私に、麗香は親切にも、こう言った。

「私、火も扱えるのよ」

言葉と共に、途端に手の平の上で、ぼつと燃え出す炎。

「え？ それって熱くないの？」

多分見当違いな私の言葉に、苦笑する彼女と、後ろにいるから見えないけれど呆れ顔であろうジプシー。

そして、そのまま彼女は笑いながら振りかぶって言った。

「熱いかどうか、自分で確かめてもらんなさい」

直球で、私に投げつけられた炎の玉。

え？　もしかしたらやばい状況？

慌てて私は両手をあげ、今までと同じように炎の玉に向かって振り下ろす。上手い具合に力が炎に向かって飛んでいくのがわかった。まあ、これもきつと、ジプシーの軌道修正サポートが入っているんだろぅなと思いながら。そして、跳ね返すというよりは力が炎と絡まって、彼女の方へ返っていった。

やった！　願い通りの力のラリーになる！

そう思った途端、跳ね返されるのを考えていなかったらしい彼女が、慌てて右手で振り払う。炎の玉は、大きくそれで、私の頭の上を通り越し、廊下の向こう遠くへ飛んでいった。あれ？　彼女もノコンだったら、ラリーにならないじゃん！

そして落ちた所は、私やジプシーと、遠巻きに見ていた京一郎と夢乃との間の廊下の上だった。炎の性質のせいかな、すぐに煙が上がり、火が広がる。

「うわっ！　復元結界がはってあるって言っても、これは、やばいんじゃない？」

そう叫んで、京一郎が廊下に設置されている消火器をすばやく引っ掴み、黄色い安全栓を引き抜く。夢乃も慌てて、他の消火器を取りに走っていくのが、炎越しに見えた。

「あら大変。早くケリをつけて逃げないと、炎と煙に巻かれちゃうわ」

余裕で微笑みながら、麗香は私に向かって、今度は横に右手を伸ばす。

麗香さん、火が怖くないんだろうか？　そう一瞬考えがよぎったが、彼女のこの体勢はまた切り裂き系のかまいたちかな？　跳ね返しにくいなと思いながら、防御の構えを取る。多分ジプシーも、これに対しては前と同じ、防御結界をはってくれると思って。

でも、だから、彼女が手を真横に振り切ろうとした時、ジプシーが自分の身体を両手で抱きしめて、膝から崩れ落ちたのが眼の端に見えてしまって、私は彼の方を振り返ってしまった。ジプシーの異変に、私の集中が彼女からそれる。

それでも、慌てて彼女の方に向き直ったけれど、私は彼女の攻撃から逃げるタイミングを逃した。

さすがにこれは食らったと覚悟した途端に、渾身の力を振り絞って私に飛んだらしいジプシーに抱きかかえられて、私達は床に転がる。

「いったあ！」

横向きに落ちて身体を床にぶつけた痛さに、思わず悲鳴を上げたが、私に覆いかぶさり抱きしめたままのジプシーから、反応がない。「ちよつと！　いつまでくつついてんのよ。また麗香さんが誤解しちゃう！」

助けてもらったのにひどい言い方になったけれど、そう言ってジプシーを押しつけようとした私の右手が、生暖かった。ゆっくりと自分の両手を目の高さにあげる。暗い廊下、ちよつと離れた所で燃える炎の逆光になり、ゆらゆらと私の右手が黒く染まって見える。なんで？

そして、廊下の床上に広がり出した血溜まりに気がついて、ようやく私は、声にならない叫びを上げた。

チャプター・44 ほーりゅう

「……耳元で、大声を出すな」
声が聞こえた。

そして両肘を床につき、私の上に覆いかぶさっていたジプシーが、
少しだけ身体を起こした。

「ジプシー！」

「……だから、大きな声、出すなって」

少しあいた隙間から、私は後ずさりに這い出て、改めてジプシー
を見た。

背中一面が血の色。そして、流れ続け、床の上に絶え間なく広が
り続ける血溜まり。やっぱり、さっきの麗香さんの切り裂き系かま
いたち、私をかばってジプシーが食らっちゃったんだ。

「何で……」

「……悪い。誰かが、復元結界に干渉してきて、そっちに気をとら
れた」

それって、干渉した人間、ジプシー以上の能力者って事になるん
じゃないの？

「大丈夫。結界はまだ、破られていないから。この怪我は、とっさ
に防御結界をお前に飛ばせなかった、俺のせい」

荒くなってくる息の中でジプシーが言った。

麗香も、まさかジプシーが私をかばって、ここまでひどい怪我を
すると思っていなかったんだろっ。

「こんな事、……あなたに、こんな怪我をさせる気なんて、なかっ
たのに……」

つぶやきながら、血の気の失せた顔で、麗香は茫然と立ち尽くす。

どうしよう。どう見てもジプシーの出血が多い。このまま時間が
経てば、命にかかわってくるかも。第一意識を失いかねない。そう

なると、こんな事態に直面した今、意味がようやくわかったあの長
つたらしい説明にあつた復元結果。ジプシーが気を失った時点で、
この破壊され炎も上がっている校舎が、このまま現実世界に残るっ
てことなんだ。

いつその事、ジプシーの意識がある間に、復元結果を術者のジプ
シーがといたら？ それなら、校舎のダメージだけでも直るはず。
ジプシーをすぐに病院へ運ぶ事も出来る。

今回の作戦を放棄して、また改めて次の作戦を練ろうよ。

私はそうジプシーに言おうとした。

その時、両肘を床について、うつむいているジプシーの胸元で、
鎖を伝つて滑り落ち、炎の光を受けたロザリオが、揺れて反射した。

麗香の眼が、ジプシーのロザリオに釘付けになる。

「二人、お揃いの、ロザリオ？」

私は、咄嗟にその意味に気がついたけれど、ジプシーと私の持つ
ているロザリオは、偶然似ているだけで同じじゃないって説明する
余裕がなかった。

多分これが最近何処かで聞いたフレーズ、可愛さ余つて憎さ百倍つ
て言つんだろつか。好きな相手を傷つけたショックと相俟つて、ロ
ザリオを凝視する麗香の力が、急激に膨れ上がったのがわかったか
ら。

「だめえ！」

思わず私は立ち上がり、ジプシーの前に両手を広げて立ちふさがつ
た。意識をぎりぎり保っている、怪我をしているジプシーに、これ
以上攻撃なんか、受けさせられない。

「あなた、退きなさいよ！ つぶしてやる！ そんなロザリオなん
か、なくなっちゃえばいい！」

そう叫ぶ麗香に、それでも私は退けない。ジプシーのロザリオは、
彼のお母さんの形見なんだから。

壊させる訳にはいかない。

彼女の放った大きな気の塊を正面から受け、私はジプシーを超えて吹き飛ばされた。そして叩きつけられる先は、外に面した廊下の窓ガラス。

その瞬間、苦痛に歪んだ表情のジプシーが、それでも力を振り絞って左手を伸ばしてきた。吹き飛ばされる私の右手首を掴む。

でも、彼の血にまみれた私の右手を、握力の弱くなったジプシーは、握り切れずに滑って離してしまった。

そのまま私は、本当にガラスを割り、三階の窓から外に身体ごと飛び出してしまう。

……これって、もしかしてやばい？

これじゃあ、文化祭の時の、四階から落ちた強盗犯の二の舞だ。ただし、吹き飛ばす方じゃなくて、私が落ちる方で。

そう思った瞬間、私は急激に、重力に従って下に落ちる感覚を覚えた。

チャプター・45 ほーりゅう

麗香の力を正面から受けて、校舎の三階から、窓ガラスを突き破って飛び出してしまった私。

地面に叩きつけられる事を覚悟して、眼をつぶった。急激に重力が身体にかかる。

そのはずが、不意に身体から重さの感覚が掻き消えた。

恐る恐る、眼を開ける。

……全てが止まっていた。

私、空中で止まって、浮いちゃってるよ？

いつもの、今までの私の自己防衛の超能力に、こんな力はなかった。

そして気がつく。身体を包む、以前にも触れた事のある、この力の雰囲気。

記憶にある。

思わずつぶやいた。

「我龍？」

すると、それに答えるように、直接頭の中へ、声が響いた。

『逃げる？ それとも戻る？ こちらとしては脱出を勧める。巻き込まれただけなんだろう？ いつまでも身体を張って奴の私事に付き合う必要はない。逃げる気があるなら、奴の結界は俺が破ってる』

「戻る！」

私は、我龍のテレパシーを最後まで聞かずに叫んだ。

「ジプシーも夢乃も京一郎も上にいる。皆、戦っているんだもん！」

ジプシーは私をかばって大怪我をしたんだ。今度は、戻って私がジプシーを助ける！それに、麗香さんも私が助けるんだ。戦いで彼女に勝って助ける！」

一瞬の間の後、我龍が面白そうに答えた。

『彼女も助ける、か。いいだろう。なら、上に連れて行くだけで手助けはしない。これ以上の力の干渉は、せっかくはった奴の命懸けの結界を破壊する事になる』

そうか。

さつき、ジプシーの結界に触れたのって、我龍だったんだ。

何故、我龍がこの戦いを知ってここに現れたのか聞く余裕がない位、今、私の中に内側からあふれてくるものがある。同じ能力者の我龍の力を、直接私が触れたからだろうか。今なら、彼女の殺気を原動力にしくなくても、自らの怒りのような感情で、最大の力をもって攻撃できる自信がある。

私は空気に支えられるような感じで窓際に寄り、割れたガラスに気をつけながら、外から三階の窓枠に片足をかける。

両手で身体を支えるように横の窓枠を掴んだ時、身体を包んでいた空気が変わった。きっと我龍のサポートが消えたんだ。

そして、私は校舎内の現状を見る。

廊下のずっと向こうで、炎が揺らめき煙が上がっている。窓を開け放して消火を続ける京一郎と夢乃の姿が、炎の向こう側に見える。煙は増えているけれど、さつきに比べて火が小さくなっている感じがするから、大丈夫だよな。

そして、眼の前には、うつ伏せで倒れている血だらけのジプシー。その傍らに屈み、まさに彼へ手を伸ばそうとしている麗香さんを見た。

今、麗香さんは、どういふつもりでいるかわからないけれども、これ以上ジプシーを傷つけられてたまるか。

私は、窓枠の上で仁王立って叫んだ。

「ジプシー！ まだ意識があるよね？ 攻撃最大でいくから防御を
お願い！ あんたの力と根性、信じているから！」

そして、驚愕の表情で私を振り仰いだ麗香に、ためにためていた力を全力でぶつけるべく、私は両手を頭上へ振り上げた。

チャプター・46 ほーりゅう

私は、今出せる力を最大に攻撃を仕掛ける為、両手を上にあげて狙いを定める。かなりの至近距離だから、普段は方向なんか定まらない超能力だけれど、多分はずさない。

私の本気が伝わったのか、麗香も私に向き直り、両手を左右横に広げる。でも、今のやる気満々の私に対して迫力負けしている上に、自らがジプシーを傷つけた事に動揺している為だろう。なかなか彼女の両手の平の上に、力が集まらないのがわかる。

その時、全く注意を払っていないであろう彼女の足元に、梵字を配した巨大な陣が、うつすらと浮かび上がった。陣の中心は、傷だらけで床に伏したままのジプシーがいる。

ジプシー、私の声が聞こえたんだ。大丈夫、まだ意識を失っていない。彼女の防御を、この状態でもしてくれている。

私は自分の力の大きさ、知らないけれど、彼女の力を出し切らせてのオーバーヒートが目的だから最大で攻撃する。だから、彼女自身が傷つかないようにジプシーが護ってくれるって信じているよ。

私は麗香に向かって、手を振り下ろした。

それでも必死で反撃をしてきた麗香の力を、私の力は丸ごと飲み込んで彼女に向かう。そして彼女に当たる寸前、彼女の目の前に五芒星が浮かび上がり、私の力がその中心を通って、彼女を吹っ飛ばした。

廊下と教室の間の壁に、背中から全身をぶつける麗香。その壁までもに浮き上がっていた陣が、彼女が廊下の上に崩れ落ちる時、消えていくのが見えた。

これって、ジプシーの防御結界が間に合っていたって事、だよな。私は、崩れ落ちたまま動けなくなった麗香を見つめて、その場に立ち尽くした。

どの位、時間が経ったのだろう。数分か、いや、数秒の事かもしれない。

やばい、ジブシーを病院に連れて行かないと、とうやく頭が回り始めた時、うつむいたままの麗香が、つぶやくように言った。

「あなたの方が、私より強いって事ね。私、負けたのかしら」

そして、麗香は座り込んだまま、自分の眼の前に、ゆっくり両手をかざす。

「力が、思い通りに出ないのよ。何故？ 私、あなたに負けたから？ 力を使い過ぎたから？ 力の出し方が、使い方がわからなくなってきた……」

「それは客観的にみて、力の乱用で出し過ぎた為にオーバーヒートをし、その回路が焼き切れた為だろうな。もう君に、術を使う能力は残ってはいない」

突然、廊下に朗々とした声が聞こえ、私は驚いて、声のする方へ向いた。

「……え？ 生徒会長？」

ゆっくりと私と麗香の方へ、苦笑しているような表情で、会長が歩み寄って来る。

「全く、一昨日の後始末の仕事が山積みで、この時間までかかってこちらは事後処理をしているというのに。また校内で乱闘騒ぎか」

そして、座り込んだままの麗香の正面に、会長は立ち止って見下ろす。

「他校生の君、私も一昨日の件は偶然居合わせたから、大体の事情は把握している。私が思うに、もう君には術を使う力も、奴を振り向かせる力も残っていない。あきらめろ」

居丈高に一方的に言われ、プライドの為か、わずかに麗香の表情が動く。

「あなたに、何がわかるって言うの。ただの人間のくせに」

「君だって、もう今は力を持たない、ただの人間だ」

突然、彼女は身を起こし、会長にぶつかると言う方向に向かって行った。そして、会長の胸の辺りに両手を当てて、押し付ける。

だけれど、何も起こらない。……あれはきつと、私に仕掛けてきた触覚による衝撃波の体勢なんだろうけれど。

本当に、会長の言う通り、力と考えるものが何も出ないんだ。

麗香は首を左右に振りながら、ゆっくりと後退る。

そして声をかける間もなく、身を翻し一気に走り出した。会長が通ってきた廊下を突き当たって曲がり、階段を駆け下りる気配がする。

「江沼、彼女は多分、このまま校外へ出るぞ」

会長がそう言った時、足元から軽い揺れを感じた気がした。そして私は、無意識に眼を閉じる。

これは多分、復元結界がとかれた瞬間だ。

再び眼を開いた時、窓や壁が破壊され、炎と煙を上げていた廊下は、この時間にふさわしい、何事もなかったかのような当たり前の風景と静寂に包まれていた。

チャプター・47 ほーりゅう

「彼女、今、校門を抜けたな」

窓から外の様子を伺っていた生徒会長は、誰ともなく言った。

そうか、結界も消え、麗香さんは学校の外に出たんだ。向かう先は、やっぱり自分の家なのだろうか。

その時ようやく、京一郎と夢乃が、私の元へ走り寄ってきた。

「復元結界ってすごいなあ。一瞬で全てが元通りだなんてさ。で、最後って、結局炎に阻まれて、俺ら殆ど見えていなかったんだけれど。上手くいったって事か？」

京一郎が私に聞く。

「うん、多分」

多分、会長の言葉通りだとしたら、麗香さんの能力は消えた事になる。ぼんやりとそう答えていたけれど。ふと思い出した。

って言うか、ジプシー！

傷だらけで血まみれの彼、病院に運ばなきゃ！

結界が消えても、人の怪我は治らないって、ジプシー本人が言っていたじゃない！

私は、傷だらけで倒れているジプシーに駆け寄ろうと、慌てて視線を周囲に移す。

そして、何気に立ち上がって膝のズボンに付いた汚れをはたいているジプシーを、言葉なく眼を見開いて見つめてしまった。

あれ？ 普通に立ってるように見える？

咄然としている私を一瞥して、ジプシーはいつもの見慣れた無表情で言った。

「ほーりゅう、あほづらになってる」

なんですってー！

思わず詰め寄り、ジプシーの胸倉を掴んで私は怒鳴った。

「心配したのに、その言い草って何！ 心配した私の気持ちを返してよ！ あんたの大怪我、どこへやったあ！」

怒り心頭の私の手を胸元から外しながら、ジプシーは言った。

「俺は怪我なんかしていない。ほーりゅうも俺も、会長以外の全員が、彼女の術、集団催眠にかかっていただけだ」

「え？ …… 集団催眠？」

「そう、彼女の能力は催眠術。ただの幻覚。でも一人で集団を操ったり、校舎にひびが入ったように見せたり炎を出したり、結構な力の持ち主だったな」

催眠術って、そんな簡単にかけられるもので、人に幻覚を見せられるものなの？

「幻覚って、だって私、吹っ飛ばされたりしたよ？」

「お前が、吹っ飛ばされたと思わされて、自分で倒れていたただけだ」催眠術。何故か力が抜けて、その場に私はへたり込んだ。そして、思い出して両手を見ると、確かにあれほどべったりと右手についていた血が、消えていた。あれも、幻覚だったんだ。

なるほど。私の超能力は確かに実害を及ぼすけれど、彼女の催眠術なら、ただの暗示だし、見せているだけだものね。最初にそうと聞いていたら、私は本気で彼女に攻撃できていないかも。同じような実害のある能力だと思ったから、戦えた気がする。

でも、何か、複雑。

「だが、いくらただの暗示や幻覚でも、度を過ぎると厄介なものに変わりはない」

さすがに術の発動をずっと続けていて疲れたのだろう。表情にはおくびにも出さないが、壁に寄りかかりながら、そう淡々と話すジプシーに、私は聞いた。

「あのさ、本当に彼女の能力、消えたの？ どうやって消えたかもわからないけれど、やっぱりオーバーヒートが原因？」

そばで私達の会話を聞いていた会長が、腕を組みながら言った。

「私から見ても、彼女の力は消えているな。消えたというより、使えなくなったという感じが。なかなかの心理作戦だった。確かにオーバーヒートと敗北が引き金だが、その後の二つの精神的重圧が駄目押しだ。私までをトラップとして用意するとは徹底している」
精神的重圧？ 何のことかわかんないし、それに会長が罠だったの？

会長は、変な顔をしている私に向かって言った。

「彼女に対しての一番の精神的重圧は、江沼に大怪我を負わせたっ
て思った事だな。たとえ幻覚だったとしても」

「……なんで、ジプシーの大怪我が、罠なのよ」

京一郎が会長の言葉をついで、私に言う。なんだ、この様子じゃ
会長も京一郎も、計画の内容を全て知っていたみたいじゃない。

「言葉で言ってもお前、理解しねえだろうから。たとえば、こう想像してみろよ。お前自身のその力が、好きな相手に大怪我を負わせてしまったとしたらって」

京一郎の言葉で、私は、はっとした。

そうか。そうだよ。もし私が、自分が持っているこの力で、あの文化祭で出会った一目惚れの彼に、大怪我をさせたとしたら。

単純に私はきっと、こんな力がなければ、なくなればいいの
って思っただろう。

それを狙ったんだ。

「……そうだよ。これが、精神的にダメージを与えるって事なんだね」

でもね、ジプシー。これは実際にやられると、本当にきついと思
う。

「こんな計画立てて実行するなんて、あんた、やっぱり性格悪いよ」
私は思わず、口に出して言っていた。

ジプシーはさすがに無表情を崩し、何に対してか、ちょっと嫌そ
うな顔をして返してきた。

「お前なあ。……俺にも充分、リスクのある計画だったんだ。彼女

の術にかかっている間は、怪我をしたと思わされている俺も、本当に失神寸前の激痛はあったんだからな」

そうか。演技じゃなくて、全員術にかかったものね。さすがに術にかからずの演技なんかでは、今回は彼女を欺けないか。

「で、もう一つの罠が生徒会長って言うのは？ 何で会長が、麗香さんの能力を消す精神的トラップになる訳？」

ほーりゅうの質問に、会長は楽しそうに笑った。

「見事に私もやられたよ。ほら」

そう言っ、会長は右手で反対の手首の袖を少し、ほーりゅうに返して見せる。

服の下に隠れていたその手首には、墨で書かれたような梵字があった。

「外から見えなくて書ける場所、全身に江沼に書かれた。どうやら私自身が、彼女の術が効かない防御結界というものの塊にされたらしいな。彼女が実際、最後の時点で術が使えたかどうかわからないが、今までと同じ術の使い方をしているのに、ただの通りすがりの普通の人間に対してさえ術が使えない、相手に術が効かないと思わせる。それで彼女は、駄目押しの精神パニックを起こす。能力を狂わせる罠の一つとしては有りだな」

感心したように会長は言った。面白そうな計画なので、会長は話に乗る事を承諾したのだろう。

ジプシーは、俺との計画の打ち合わせ時点で、放課後、今回の事情を知っている会長に計画協力の為に頭を下げに行くと言っていた。何と言って了解を取ったか知らねえが、会長の全身に防御結界。

ちよつと笑える。

今の会長の説明で、理解できたかどうか怪しいほーりゅうは、それ以上考える事を放棄したらしい。今度は、違う事を聞いてきた。「ジプシー。あのだ、ジプシーが彼女に怪我をさせられる罠の方、あれ、本当にわざとだね」

どういふことか言葉の真意がわからず、俺もジプシーも彼女を見

つめる。そして、ほーりゅうは、言いにくそうにその名前を言った。
「ジプシー、今回も、……本当は前の文化祭の時も、我龍が近くで様子を見ていたんだよ。今日、我龍がジプシーの結界に触れたから、麗香さんの攻撃をジプシーが食らう原因になっちゃったんでしょ？
それって偶然の出来事じゃないのかなって思ってたさ」

我龍が見ていた？ 奴は今も、この近くにいるっていうのか？

ジプシーは腕を組んで、しばらく考えていたが、これはほーりゅうに説明しないといけないだろうと思ったのだろう。己の感情を切り捨てたように無表情で淡々と言った。

「前回の文化祭の時、……確かに奴の気配を近くで感じた気がした。今回も、結界に触ってきた時は、一瞬誰だかわからなかったが。俺も、計画の一つだから、彼女から攻撃を食らうタイミングを計っていたし、だから、奴が現れたのは偶然だが、タイミングを利用させてもらった形にはなる」

そうか。本当に文化祭の日にも、我龍が近くにいたのか。

そう言えば、強盗犯が落ちた後、ジプシーが考えこんでいた様子を、ほーりゅうがやけに気にしていた。

あの時か。

それを聞いたほーりゅうが思い出したかのように、勢い込んで続けてジプシーに言った。

「そう言えば私、今日、三階の窓から落ちたよね。あれもまさか計画の内？ 下まで普通に落ちていたらどうするつもりだったのよ！

今回も私、我龍に助けられちゃったから良かったけれど」

これはジプシーが答える前に、俺が先に口を開いた。

「こいつは文化祭の一件も今回は頭に入れていた。ほら、術を使う前に結界をはるようになるって文化祭の後に言っていただろう？

今回は窓の下全てに、防御結界をはっていたよ。なんせ、午前中から夕方まで、教師の眼を盗んで校内あらゆる所に、戦い場所が移動する事を想定して結界をはりまくり動いていたジプシーだから」

こういう所は、抜かりのない完璧主義だ。

なるほどと考え込んだほーりゅうを横目で見ながら、今度は俺が気になった事をジプシーに言う為に、奴のそばに寄った。ほーりゅうには聞かせない方がいい質問だ。

「なあ」

無言で俺を見た奴に、俺は声を潜めて言う。

「お前が怪我をしているあの状況で、高橋麗香が攻撃を仕掛けてくるってわかった時、ほーりゅうがお前をかばって立ちふさがる性格だって事、初めから計算に入れていたのか？」

俺と眼が合った奴は、片方の眉を上げてみせて、俺から視線をそらした。

……いくら高橋麗香の攻撃が、実害のないものだとかわかっていても、こういう時のお前って俺から見ても腹黒い、いい性格しているよ。情け容赦のない奴だ。人に対しても……それ以上に自分に対しても。

こいつは演技が上手いのだから、自分は術にかからず、彼女の攻撃を食らったフリをしていれば良かったんだ。彼女とほーりゅうさえだませれば。

大怪我に見えるのは、術を仕掛けた彼女と、術にかかっているほーりゅうなのだから。

なのに、彼女達を苦しめた償いに、あえて自分もぎりぎりまで痛めつける。

「これから、彼女と話し合ってくる」

話がひと段落した所で、ジプシーが言った。

「今から、俺一人で彼女と話し合う。能力のない普通の彼女とね」それを聞いた俺は答える。

「そうだな。これからはお前個人のプライベートな話だもんな。俺達が口を出すことじゃない」

そして俺は、それこそ周りの皆に聞こえないように、ジプシーの

肩に手を回し、抱きかかえる様にして、耳元でささやいた。

「お前、無抵抗で彼女に刺されてやるような真似だけはするなよ」

ジプシーは、一瞬動きを止めたように見えたが、すぐに俺を見返して言った。

「わかつている」

それを聞いた所で、俺は打って変わった口調で、ジプシーに言った。

「そう言えばさ、お前、今回の計画を会長に頼む時、見返りを要求されるかどうかって、なんか言っていたよな。あれ、本当に何か要求された？」

すると奴は、会長を一瞥した後、今までの無表情を崩し、明らかにムツとした様子で小さく言った。

「……携帯の番号とメアドの交換」

俺は思わず、腹を抱えて大笑いをしてしまい、会長やほーりゅう、夢乃から冷たい視線を浴びてしまった。

……いいじゃねえか。今まで俺と夢乃の二件しか登録のなかったジプシーの携帯に、新しいアドレスが一つ増えたんだから。

時間が遅い為、もう窓からの明かりがない住宅街を、私は胸前に大きなハンカチで包んだものを抱えて走る。

所々、街灯だけがぼんやりと道を照らしている、人通りのない街。私の足音だけが響く。

負けた悔しさから最初は思った。あの彼女を殺したい。

そう思っているにも、力も、もしかしたら彼への想いも、私より彼女の方が強かった事になる。そして、私には力が残っておらず、もう戦うすべがない。

それに、彼女がいなくなれば、彼は悲しむだろう。そして、彼女を一番想っている時に彼女を失うとしたら、彼の中に残る彼女の影にも、私は勝てなくなってしまう。

私には、彼女は殺せない。

ならば、彼を殺してしまおう。

私に殺されるなら、彼は、その瞬間は私だけをみてくれる。

私だけを瞳に焼き付けて、その後は誰も、彼女も、彼の瞳には映らない。

それとも、私が彼の目の前で、彼の為に死んだら、私はずっと、彼の心の中にいる事が出来るだろうか。

私は今、死に囚われている。ただ、自分の考えに、酔っているのかもしれない。

でも、そう思いついてしまったから。

私は急いで、彼が待っている、彼の自宅へ走って向かう。

もう少しで、その先の角を曲がったら、彼の家が見える道へとさしかかった時、その道の真ん中に、一つの影を見た。街灯の逆光でよく見えない。そんなに大柄じゃない影。一瞬、体格から彼かと思

ったけれども、まさかこんな時間にこんな所にいる訳がない。
よくよく眼を凝らしてみると、多分見たことのない男の子が、こ
ちら側を向いている。

目的が目的なので、私は、それ以上眼を合わせないようにして、
小走りに通り過ぎようとした。

でも、すれ違う瞬間、その人影は、ささやくような声で言った。
「今から、人を殺しに行くような眼」

ぎくりと、私は足を止める。

そして、もう一度誰なのか確かめる為に振り向こうと思うのに、
身体が動かない。

「殺したいのは、彼女の方？ それとも奴？」

何故、そこまで知っているのだらう。彼の声が先ほどとは違って、
明瞭に聞こえる。

おそらく振り返って、今は私の方を向いて話しているに違いない。
この肌寒い季節に、冷や汗の流れる背中へ、感じる視線。

そして、続けて彼は、笑いを含んだ声で言った。

「奴は殺させない。奴を生かすのも殺すのも、俺が決める事だから」
近づく気配。

身体が動かない私は、恐怖で、手に持っていたものを取り落とす。
包んでいたハンカチから滑り出し、アスファルトに跳ねて、響く
高音。

それでも、身体の内は戻らない。

「催眠術、もう、使い方がわからなくなった？ 中途半端な知識で、
あれだけ派手に乱用したんだ。当然の結果だよな」

彼が、ゆっくりと私の前に回りこんできた。
そして、まっすぐ私の眼を見つめる。

吸い込まれそうな、綺麗なダークブラウンの瞳。

ああ、彼も催眠術を操るんだ。同じ術者だったから、瞳を見れば
わかる。

それも、私とは比較にもならない程の力と技術を持っている。

私は、術にかかっている訳じゃないとわかっているのに、力の格差を見せつけられ、もう抵抗する意志さえ微塵も持てない。

彼は、そんな私のうなじへ、私の長い髪を分けながら、ゆっくりと右手を伸ばす。

ひんやりとした指先の感覚から、徐々に手の平全体の感触に変わる。

私の眼を見つめながら、彼は言った。

「一途な気持ちはよくわかる。だが、今回は相手が悪い」

動けない私は、されるがままになりながら、それでも、私の大好きな彼と、この彼とは、何故だろう？ どこか重なる部分があるとぼんやり考える。

そう思った途端、私の思考を読み取ったかのように、目の前の彼は驚いた表情になった。だが、そのままうつすらと笑って言った。

「さようなら」

自由のきかない私の身体は、そのままゆっくり、彼の足元に崩れ落ちた。

身体に力が入らない。まぶたも開かないけれど、それでもまだ聴覚だけは働いているらしい。

地面へ伏した私に、彼の独り言が海の中の音のように届く。

「確かに心理戦は面白かったが。その後は、こうなる事が予測出来るだろうに。本当に奴は考えが甘い」

そして、私に近づいてくる別の足音を、私は意識の遠くで聞く。しばらくの間を置き、そして、ホツとしたような別の男の声が、私の上から降ってきた。

「良かった。もう、この少女を殺してしまっただかと思いましたが」
私を手にかけた彼が答える。

「彼女は倒すという言い方ではなく助けると言った。俺がこの女を殺したら意味がない」

「でも我龍。貴方は用が済んだら、このまま彼女を放ったらかしで置いていく気だったのでしょうか？ 貴方の後始末はいつも、私がしているんですけれど」

「夏樹、そのつもりで今もついて来たんだろう？ 貴様は好きでしているのだと思っていたが」

そして、そのまま本当に、我龍と呼ばれた彼の気配が、かき消すように、その場から消える。

「まあ、確かに半分は、好きでしているのも事実なんですけどね……」

後から来た夏樹と呼ばれた男の、苦笑まじりの声を聞きながら。

私の意識は本当に、音の届かない暗闇に落ちていった。

チャプター・50 ジブシー（完）

彼女が、高橋麗香がもう一度、真夜中になっても、必ず俺の所に来ると思っていた。

特別な術が使えなくなり、普通の人間になっただとしても、必ず俺の前に現れると考えていた。

それが、来なかった。

京一郎のいう所の『女』というものが、わかりかけてきたと思う俺の勘。……外れたのか？

一晚寝ずに待っていたが、次の日の朝、俺は、午前中の授業を休む連絡を職員室に入れ、彼女の家へと向かった。

驚いた事に、俺を出迎えた母親は、彼女が普通に朝、登校したと言っ。

詳細を聞くと、確かに昨日の夜に一人で帰ってきて、部屋にこもったらしい。その後、夜中に部屋から出て家を抜け出した気配に、家の者が心配している中、彼女を抱きかかえた親切な人が、道で倒れていたと連れてきたそうだ。

連れてきた人物は、ここからはそう遠くない大学の医学部の学生証を見せたらしいが、お礼を言う暇もなく、すぐに帰ってしまったらしい。

そして、次に眼を覚ました彼女は、能力と俺に関する記憶を一切無くしていた。綺麗に、その部分のみの記憶だけがない。しかし、日常生活には不都合がなく、彼女自身も違和感を持っていない様子だったので、今日は本人の希望で休まずに登校したという。

そんなに都合の良い記憶喪失が、あるはずがない。

だが、実際に彼女は、普通の日常生活を送れそうな様子だと、彼女の母親から感謝をされた。能力を利用して雑誌のモデルもしていたであろう彼女が、能力を失った今、どう変わっていくかは予測がつかないが、ただ、見守るしかないだろう。

俺は、納得がいけない気分だったが、これ以上はどうしようもない。

学校へ向かう途中、ふと俺は、文化祭の時にもらったままで、未開封の手紙を思い出した。

彼女の強烈な想いによつて、今更だが気づかされた。

それぞれ一通ずつに、いろんな人の、いろんな想いが籠められているであろう、手紙。

結構沢山あったけれど、野郎からの手紙もいくつか混じっていたけれど、一通ずつ読んでみようか。どれだけ時間がかかるかわからないけれど、俺は、どの手紙にも返事は返さないにしても、一つずつ思いを受け止めていくべきかもしれない。

「ジプシー！」

登校した後、俺は職員室の担任の所へ最初に顔を出した。病弱のフリで時々学校を休むが、トップクラスの成績と、このこまめなフォローが、担任の日頃の心証を良くする。

そして、職員室から出てきて、ちょうどドアを閉めた時、渡り廊下の向こうから、ほーりゅうが手を振りながら俺を呼んだ。

「昨日の今日だから、休みかと思っちゃった。でも授業中、窓から校門を通るジプシーが見えたから、迎えに来ちゃったよ」

無邪気にそう言ったほーりゅうに、俺は呆れながら言った。

「お前、窓の外ばかり見ていないで、ちゃんと授業に集中しろ」

そう言いながらも、わざわざ迎えに来てくれた彼女に、悪い気はしない。

並んで教室へと向かいながら、ふと、俺は隣を歩くほーりゅうを見た。

そう言えば。

今回、ほーりゅうを私事で巻き込んだ上に、大変な思いをさせて

しまった。そう考えたら、何となく口から言葉が出た。

「ほーりゅう。今回は俺の事で巻き込んで悪かった。お詫びという訳ではないが、何か一つ、お前の希望を聞くよ」

「本当？」

ほーりゅうが驚いたように聞き返してきた。

「本当に何でもいいの？ 制限なし？」

その言葉で、急に俺は思い当たる。無制限に言う事を聞くなどと言え、こいつの事だ。また女装がみたいなどと言いかねない。

俺は条件を考える。今回の事件のキーワード的な言葉は、京一郎曰く『女』だった。

「ただし、女らしい希望をしる。それが条件だ」

「えー！」

何それーと言いながらも、真剣に考え込んだほーりゅう。

どうせ、前に行った喫茶店のパフェをおこれと言ってくるの事だろうと思いつながら、俺は彼女の言葉を待つ。

しばらくして、思いついたらしいほーりゅうが言った。

「私、ジプシーのピアノが聴きたい」

予想をしていなかった思わぬ言葉を聞いて、俺は啞然とほーりゅうを見る。

「ジプシーってピアノ、弾けるんでしょ？ 夢乃に聞いたんだ。ピアノが聴きたいだなんて、女の子らしいじゃない？ 条件に合ってるよね」

確かに、印契をすばやく結ぶ指の練習も兼ねて、従兄弟のトラと一緒に、昔からピアノを習っていた。練習に没頭すれば、他の事を考えなくてもいいという利点も俺にはあった為、嫌々習っていたトラよりも、熱心に練習をしたが。

「……曲。何かリクエストはあるのか？」

そう聞くと、ほーりゅうは決めていたらしく、すぐに答えた。

「私、『幻想即興曲』が聴きたい！」

よりもよって、ショパンの『幻想即興曲』か！ 確か、つまづかずに弾けるようになるまでに半年、その後納得出来る仕上がりに、さらに半年かかった曲だ。

「お前、その曲はCDを貸してやるから」

「えゝ！ やっぱり生演奏で、ジプシーが弾く所をみながら聴きたいよ」

俺は、頭を抱えたい気分になったが、こちらから言い出した約束は約束だ。仕方がない。

「わかった。弾いてやるよ。ただし、最近はピアノに触っていないから、指が思い通りに動くかどうか。しばらく練習期間をくれ」

「うん、わかった。約束だよ。絶対、忘れないだよ」

そう言って、ほーりゅうは嬉しそうに笑った。

この一連の出来事を思い出さなくなった頃、繁華街に並ぶ小さな書店の店頭で、俺は平積みになれた『本日発売』の札の下にある雑誌を手取る。

あまり興味のないジャンルでも、知識や情報を増やす為と割り切って、俺は何でも見るし読む。お笑い芸人のテレビ番組も観るし、『人気のモデル大集合！』などと文字の躍るページも、顔と名前や個人データを頭に叩き込むという面白みのない見方で、次々とページを繰る。

近頃女子高生に一番人気らしい東条ツバサというモデルと、以下に続く数人の男性モデルの座談会方式の記事の後、女性モデルの個人データ一覧表があった。

その中に、『高橋麗香』の名前の後、以前の近寄り難さが和らぎ同年代女性の支持率上昇の現役女子高生モデル、と書いてあった。

俺は、雑誌を閉じて店頭の山に戻し、夕方の慌ただしさを増した街を歩き始める。

しばらく歩いていくと、前方からこちらへ向かってくる、私立の女子高生五、六人の集団に気がついた。

楽しそうな笑い声と絶え間ないおしゃべり。その中心で、ゆるく巻かれたロングヘアーに綺麗な二重の瞳が印象的な小顔が、ひときわ目立つ。楽しそうに友人と話をして動いている今の彼女は、先ほどの雑誌に載っていた写真よりも、イキイキとした華やかな印象があった。

その女子高生集団とすれ違う時、一瞬、俺と彼女は、眼が合った。微笑んだような表情の彼女。だが、誰にでも向ける表情なのだろう。見知らぬ者同士と同じように、すぐに視線は、お互いの顔からそれる。

そのまま、先ほどと変わらぬ笑い声とにぎやかな会話を背に受けながら、俺はゆっくりと前に歩き続けた。

チャプター・50 ジプシー（完）（後書き）

ご愛読、ありがとうございました。

続編が掲載されるまで、楽しみに待っていてくださいネ！

本館ブログ <http://blogs.yahoo.co.jp/orrkd>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2035d/>

ジプシーダンス

2010年10月8日13時28分発行